ビルマのキリスト教徒カレンをめぐる民族知識の形成史
――カレン知の生成と『プアカニョウの歴史』の位置づけについて――

池田　一人

目次

はじめに
第１章　キリスト教徒カレンによる民族史
　第１節　カレンとキリスト教
　第２節　『プアカニョウの歴史』
　第３節　執筆意図と依拠文献
第２章　最初期の記述（18～19世紀）
　第１節　王朝下の「カレン」
　第２節　西洋人旅行者の視点
　第３節　最初期史料の特徴と位置づけ
第３章　カレン知識の確立（19世紀）
　第１節　「旧約聖典の民」
　第２節　民族の外郭―ウェイドによる文字創案と言語誌
　第３節　民族知識の体系化―メイソンの博物誌

第４節　バプティストによるカレン知識の位置づけ
第４章　カレン知識の流通と受容（19世紀）
第１節　カレンをめぐるバプティスト出版物
第２節　宣教と知識の受容
第３節　英人植民地官僚とカレンの接触
第４節「ビルマ人」の生成とバプティスト・カレン
第５章　植民地下のカレン（20世紀）
第１節　英人植民地官僚による記録
第２節　人類学の対象としてのカレン
第３節　民族社会の成立とカレンのイメージ
第４節　バプティスト・カレンの自己主張
第５節　仏教徒カレンの顕在化
第６章　ビルマ独立後のカレン記述
第１節　独立とカレン
第２節　政治学的研究におけるカレン
第３節　言語学の成果
第４節　タイ・カレンの人類学
おわりに

はじめに

ビルマ植民地末期の10年ほどの間に，カレン人著者の手による[1]はじめてのカレン民族史が３点，相次いで出版された。このうち，ウー・ピンニャ（U

1　ウー・ピンニャとウー・ソオは実際のところ，みずからをカレンであるとは直接的に表明してない。しかし，カレンもしくはそれに近い立場に立つものと推定される。

Pyinnya）の『カイン王統史（kayin yazawin）』（1929年出版）とウー・ソオ（U Saw）の『クゥイン御年代記（kùyin maha yazawin dojî）』（1931年）という，仏教徒著者による２点の史書については以前，基礎的な分析を行った［池田 2009］。本稿では，キリスト教徒著者ソオ・アウンフラ（Saw Aung Hla）による『プアカニョウの歴史《pgaMkaňô ali'M taLciFsoMtêsoM》』（1939年）をあつかう[(2)]。なお，カイン（kayin）とクゥイン（kùyin）はカレン（Karen）のビルマ語他称，プアカニョウ《pgaMkaňô》はそのスゴー・カレン語自称とされる語である。

本稿の目的は，カレンという民族に関わる知識の形成過程全体を明らかにすること，そしてこのキリスト教カレン史書をその中に位置づけることである。すでに示した仏教徒カレン史書の分析と併せて，カレン民族意識の生成過程，そしてビルマ世界における民族観念生成の機制に関する今後の研究のため，基礎的整備をおこなうことをこころざす［池田 2009：71-72］。

今日，人口に膾炙されるビルマのカレンという民族集団についての知識は，その大きな部分，根幹的な部分がカレンへの19世紀以来のバプティスト派のキリスト教宣教のなかで形成された。だがこの知識は，「カレン」として想定される総人口のうちわずか１～２割を占めるに過ぎないキリスト教徒の周辺から発していて，「反ビルマ民族」で「親英」的な「キリスト教徒」，1948年の独立以後には中央政府に反旗を翻す「叛徒」というイメージがつねにつきまとって

2　ビルマ語は奥平龍二氏考案の方式［The Burma Research Group 1987：18］，スゴー・カレン語は藪司郎氏考案の方式［藪司郎 2001b：526-531］を使用し，スゴー・カレン語翻字のみ《pgaMkaňô》のように二重山括弧でくくってビルマ語翻字と区別する。民族としてのビルマ人（Burman）は，ビルマ語自称でミャンマー（myanmar），ミャンマ（myanma），バマー（bama），スゴー語他称ではパヨー《payôM》となる。また Burmese は国民としてのビルマ人とする。ビルマ語で「ミャンマー」あるいは「ミャンマ」は文語，「バマー」は口語で「ビルマ」をあらわすものと一般的に理解されている。

きた。このようにカレンの中でも少数派と目される人々についての民族観が，なぜ主たるものとして受容され，しかも否定的なイメージを伴っているのか。このように問えばさらに，主流の見方としては定着していなくとも，キリスト教徒カレンの外側で形成されたカレンについての民族観，民族知識も気になってくる。カレン人口の多数派を占める仏教徒は，その民族知識を一般に流布させることについてなぜキリスト教徒の後手に回ったのか。そもそも仏教徒やキリスト教徒なる区別以外にも，カレンにまつわる知識は生産されていたのではないか。そうだとすればそれはどのように発生し継承されているのか。このようないくつもの疑問を念頭にして，カレン知識の形成史を叙述し，全体を俯瞰する見地からソオ・アウンフラのカレン史を位置づけたい。

以下ではまず，ソオ・アウンフラのカレン史書の主張と執筆動機，参考にした文献類を検討する（１章）。そのうえでバプティスト宣教開始以前のカレンへの言及を瞥見して（２章），19世紀前半に形成されたバプティストによるカレンにたいする基本的理解と言語的側面（３章），その知識がカレン自身を含めて受容されていく局面と，それに関連して19世紀における「ビルマ人」という存在の問題性を論ずる（４章）。そして，20世紀に入ってから，各方面にカレン知識が拡散し多様な情報と認識が付加されるようになったことを概観し（５章），独立以後のおもに国外の学界におけるカレンをめぐる理解の展開について言及する（６章）。最後にソオ・アウンフラのカレン史の位置づけについて簡単にまとめたい。

第１章　キリスト教徒カレンによる民族史

まずは，カレンを諸言的に紹介しよう。そしてソオ・アウンフラの『プアカニョウの歴史』の主張と背景を概観して，そこで主張される個々の論点にはどのようなものがあるかを明らかにしたい。おのおのの論点は，おおむね19世紀

以来のバプティスト宣教史の過程ですでに一定の答えが出されていたものである。ソオ・アウンフラは過去に出版された文献を通してそれらの答えを得ていて，自身のカレン史の中で再構成して提示した。よってその次に，ソオ・アウンフラの営みをカレンの知識形成史に位置づけるため，彼の依拠した文献を概観してみたい。

第１節　カレンとキリスト教

一般的に，現在ビルマのカレンを構成するとされるサブグループの分類は，主に言語上の区別によっている。その最大のサブグループとしては，スゴーとポーがほぼ同数の人口を擁して全カレン語系話者の７割以上を占め，主に西部のエーヤーワディー河デルタ地方から東部のビルマ・タイ国境部の山地にいたる下ビルマの広範な地域に居住する。そのほかにもパオ，カヤー（カレンニー）カヤン（パダウン），ブゲェーなどがカレン語系に括られるが，当事者の意識としてはカレンとは別の民族グループを主張することも多い。さらにタウングー東方のタンダウン地区の多様なカレン語系の諸集団をふくめて，言語学的には合計40近くのサブグループが存在するとされる。

宗教的には仏教徒が８割近く，キリスト教徒は１～２割，そして他に若干の精霊信仰者がいるとされ，特にスゴーにおけるバプティストやカレンニーにおけるカトリックなどのキリスト教徒は，数は少ないが目立つ存在になっている。ポーとスゴーは18世紀以前には平地に進出していたとされ，水稲耕作を基本とした生活様式はビルマやモンなどの民族と大きな変わりがないが，山岳部に住むカレンは焼畑耕作，独身男性用の部屋を持つ高床長屋式の家屋などの伝統的生活の特徴をもつと，人類学的に説明されることもある。おそらくはその居住地域の近接性から，スゴーをビルマ（ミャンマー）・カレン，ポーをモン（タライン）・カレンと呼ぶ慣行は古くからあったらしい。

また，政治的には民族運動にコミットしているグループとして，現在，スゴーとポーを主体としたカレン民族同盟（Karen National Union：KNU）のほか，カレンニー民族進歩党（Karenni National Progressive Party：KNPP），パオ民族機構（Pao National Organization：PNO）などがあるとされる。とくにKNUは1949年１月の蜂起以来，一貫して中央政権にたいして武装闘争を継続しており，「世界で一番古い内戦を続けている」［宇田 2010：33-34］という評価もある[(3)]。当初中央部のデルタ地域やバゴー山地にも拠点を持っていたKNUの活動領域は，国軍の攻勢に押されて少しずつ東部タイ国境の山岳部へと縮小していった。カレン民族問題は膠着化・長期化し，KNUと国軍のあいだの戦闘や国内での強制移住・強制労働の結果，東部タイ国境部に多くのカレン難民が流出した。1984年以降，難民キャンプが国境沿いのタイ側に開設され，2012年現在，２つのカレンニー，７つのカレン・キャンプで合計15万人弱の難民が居住している。

さて，ここにいくつかの断片をあげたような一般に流布されている民族的・宗教的なカレン理解は，過去のある時点で発見され整序され，時代の環境の中で次第に認知を得て定着した，歴史的に構築された知識の一面である。ビルマ世界の歴史過程のなかでカレンにまつわる知識形成にかかわった主体は多様であるが，ある一群の定義者が，抜きんでて大きな役割を果たした。それは，米国に起源をもつバプティスト派キリスト教の信仰を広めた人々である。

カレンとバプティスト宣教師のかかわりは，おおよそ以下のように語られる。それは，1813年に来緬した米人宣教師ジャドソン（Adoniram X. Judson, 1788-1850）から始まる。ジャドソンは1828年，債務奴隷になっていたカレン人のコー・タービューに洗礼をほどこし，この最初のカレン改宗者を起点にバプティストの信仰は爆発的にひろがった。第１次英緬戦争の結果，1826年に下ビ

3　2012年初頭に停戦が成立した。

ルマ東部のテナセリム地方と西部のアラカン地方が英国に割譲されていた。テナセリム地方でのカレン宣教は，のちの全土におけるバプティスト宣教の原型となった。第２次英緬戦争後の1853年には下ビルマ全域が英領化して，デルタ地方，ラングーン，そしてタウングー方面に宣教が拡大したが，とくにデルタのカレン宣教団はラングーンの教勢をしのぐほどの繁栄を築いた。こうして第３次英緬戦争後，1886年のビルマ全土の英植民地化を経て世紀の変わり目を迎えるころには，ビルマにおいてキリスト教徒といえばカレン，カレンといえばキリスト教徒，さらには英国植民地主義者から優遇される人々なるイメージができていた。

キリスト教徒カレンのあいだではじめて，自らの歴史を出版したソオ・アウンフラもまた，1883年ごろタウングー近郊の村で生まれた，バプティスト派キリスト教の伝統に連なるスゴー・カレン人であった。宣教師学校の７年生を終えてからラングーンに出て，警察長官の事務所で事務官吏として働いた。そして第二次世界大戦の開戦とともに1941年にタウングーに疎開し，日本占領期のさなか1943年にそこで没した。『プアカニョウの歴史』以外にも２つの未発表原稿があったが，いずれも独立後のカレン＝ビルマ間の内戦で焼失したという。

では，カレン知識の形成史においては主要な系譜に連なるソオ・アウンフラは，どのようなカレンの歴史を主張したのか。うえに現在われわれが持っているカレンについてのイメージの概略を示し，バプティスト宣教の中でその骨格部分の定義が与えられたと述べた。そしてソオ・アウンフラはそのバプティストの伝統の中で，カレンであることを自覚した上でカレンの歴史をはじめて執筆・出版した著者である。そこで表明されたカレンの歴史は，現在までに外の世界に伝えられたカレン像とどのような異同があるのか。その異同の理由はなにか。そしてそもそも，ソオ・アウンフラは何を主張したいがために，カレンの歴史を書いたのか。まずはその主張を概観してみよう。

第２節　『プアカニョウの歴史』

著書は序と結をふくめて80節で構成されており，世界の人種と居住圏（２－12節），プアカニョウと他民族のビルマ領域への移住史（13－30），プアカニョウの分類と居住形態（31－37），プアカニョウ諸都市と諸国家の興亡史（38－65），そしてプアカニョウの文化の諸側面（66－79）という節立てになっている。

著書冒頭には，カレンの歴史開陳にあたっての３つの基本的問いが設定されていている。すなわち，「（１）プアカニョウの祖先は誰であるのか。（２）彼らは本当はどこから来たのか。（３）彼らは独自の文字や宗教や文化，とくに上のような問いに答える伝統やフォークロアを持っているのか」［Aung Hla 1939：iv］の３点である。この基本的問いに答えるためにもろもろの文献が精査され，ソオ・アウンフラのカレン史が構成される。

それらの文献は「信頼の置ける順に」分類され，第一に「『ユワ』の言葉」，第二に「権威ある学識者の論文」，第三に「ヘブライ・パーリ・サンスクリット語の言葉」，そして第四に「自らによる研究」，と４階梯の順位を定めている。「ユワ」はスゴー語において「神」を意味する一般名詞であるが，ここでは「わが主イエス・キリストが聖ペテロに託した言葉」というように，キリスト教の信仰を背景とした「神」を前提としている［*ibid.*：1-2］。文献の分類基準からもわかるように，これらの問いは彼の前提としたキリスト教の背景に合致して答えられていくことになる。そして，仏教徒であるビルマ人やモン人の圧迫に抗って，この地域に独自の言語・文字・文化・宗教・王権を保持してきたプアカニョウ，という歴史観が表明されていくことになる。

ウー・ピンニャとウー・ソオと同様にソオ・アウンフラもまた，この歴史書を世界と諸民族の起源から書き起こす。白色・黄色・黒色という三人種の根本的な人類の分類，山岳や海岸地域，寒冷地や砂漠など人類の基本的居住環境の

特色を冒頭でひとしきり論じる［*ibid.*：4-14］のは，当時，キリスト教徒カレンの知識人が西洋人の世界観に強い影響を受けていたためであろう。したがって，『大王統史』などビルマ語の諸年代記であつかわれる仏教的世界観にもとづく世界の始原を，19世紀以降に書かれた英人官僚などによるビルマ史書［Harvey 1925；Cocks 1919ほか］を根拠につぶさに否定する。そして，プアカニョウがシャンに次ぐこの地域への最も早い移住者であり，例えば中国の古い文献に「ピャオ（ピュー）」と言及されているのがポー・カレンであるとして，ビルマはポーやスゴーといったプアカニョウのクニであったとする［Aung Hla 1939：14-19］。

他方，モン（スゴー語でタールー《pgaM talöM》）は海路で，ビルマ（パヨー《pgaM payôM》）はアッサム経由，アラカン（ラーカー《pgaM röFkhöF》）も陸伝いに西方からプアカニョウの後に移住してきたインド人の末裔であった。その根拠のひとつとして，「バマー」というビルマ人の自称がビャマあるいはブラフマンというインド起源の言葉であることを挙げている。とくにモンとビルマはBC900年ごろに入ってきて，以後，プアカニョウを圧政下に置き続けてきたとしている。またシャン（ヨー《pgaM yoM》）はいくぶん好意的に扱われ，もとはビルマ領域の北東に接したところに故地があり，プアカニョウにわずかに先んじて流入してきた［*ibid.*：20-27］。

このように描かれる諸民族のビルマ領域への移住史のなかで，プアカニョウは壮大な移動を経てこの地に到達している。ソオ・アウンフラによれば，プアカニョウはもともとバビロニアに発祥した「失われたイスラエルの民」のひとつであり，同地をBC2234年に出立してBC2197年にモンゴルに，以後，BC2013年東トルキスタン，BC1864年チベット，BC1385年雲南におのおの到達し，ビルマへは第一波がBC1125年，第二波がBC739年に達したという。この旧約聖典の民としてのカレン像は，後述するように植民地期にひろく流通し，バプティストと英人植民地官僚に受け入れられていた理解であったが，ソオ・

アウンフラにいたって，漂泊の諸段階を具体的年号まで添えて詳細に彫りこまれ，提示された［*ibid.*：27-89］。

プアカニョウという民族名称の起源については，宣教師人類学者であったマーシャルの著書に見えるトラ・バテーの説明［Marshall 1922：6. fn.6］を援用し，さらに精緻化している。それによれば，ある英人がかつて，プアカニョウという語が「人間」を意味する一般名詞であることを根拠に「未開の民」としたことに反駁して，じつはこの名称が固有名詞であることを主張している。プア《pgaM》はたしかに「ひと」を意味するが，カ《k, kh》はカテー（katheh,《kasê》），カチン（カチー《kakhyeF》），カラー（インド人・外国人，《kalaM》），クメール（カメー，《khamöF》），などの民族名称に現れるように，民族名に付く接頭辞であるとする。さらにニョウ《ňô》は，シャン語でカレンを指示するヤン（英語表記でYang）と同様に，もともと「羊」や「山羊」の原義があるという［Aung Hla 1939：48-52］。

プアカニョウを構成する支族の起源について，ソオ・アウンフラは神話的な手法で説明をする。始原の人類にパア・スゴー《phaa cagôM》という父とノオ・パオ《nôL pa'oF》という母をもった家族がいた。そこにはノオ・パデー《nôL padê'M》，ノオ・ボオクロー《nôL bhôklôF》，ノオ・パアー《nôL pa'aF》という三人の娘と，ソオ・パクー《sôM paku》，ソオ・モニブワー《sôM môMneLpgaM》，ソオ・ウェイウォー《sôM wewôM》，ソオ・チェー[4]《sôM khyêF》という4人の息子がいた。3人の娘は「母方」（モーティ《moLthi'M》），4人の息子は「父方」（パーティ《paLthi'M》）を名乗っておのおのの血筋からプアカニョウの原始支族が発祥した。モーティからは10の地域別グループに分けられる「ポー（プオゥー）《pgoL》」，パーティから4地域グループの「スゴー《cgôM》」，そしてモーティとパーティの混血から12グループをその下位に持つ

4　あるいはソオ・チョー《sôM kyô》，チン（Chin）民族のこと。

「ブゲェー《bhgê》」という，合計３つのプアカニョウに分化したという【表１参照】。この３グループは，現在の二大サブグループのポーとスゴー，それ

【表１ ソオ・アウンフラによるカレンの分類】

①モーティ・ポー《moLthi'MpgoL》

	分類	居住地／下位分類
1	ポー・ボークロー《pgoL bhôklôF》	イラワディ（プレー）・デルタ地方
2	ポー・パデー《pgoL padê' M》	タトン，モールメイン，メーサリアン（ムーヌー），チェンマイ
3	ポー・パアー（パオ）《pgoL pa'aF》	シャム，タトン，シャン州
4	ポー・モーブワー《pgoL moMpgaM》	タウングー東部
5	ポー・トーキー《pgoL thoFkiF》	メルギー，シャム
6	ポー・イェスゴー《pgoL yêsakôM》	ドーナ山脈
7	ポー・メーウォー《pgoL mê'Mwô》	チェンマイ北部
8	ポー・カム《pgoL khamu'M》	トンキン，チャイッドン
9	ポー・ロロ《pgoL loMloM》	雲南西部，リス・ラフ・ラシ・アカ・アコ・ロロ・ラワ・カを含む
10	ポー・パロー《pgoL palôF》	シャム北部

②パーティ・スゴー《paLthi'McgôM》

	分類	居住地／下位分類
1	スゴー・パクー《cgôM paku》	タウングー西部，ルートーコー・ゴーワー・コーパー山脈，パプンまで，メーサリアン，チェンマイ
2	スゴー・モニブワー《cgôM môMneLpgaM》	タウングー，ベイラー，カーサードー，チャウッチー（ラードー），シュウェジン（ソーティー），タトン，モールメイン，タボイ，メルギー
3	スゴー・ウェイウォー《cgôM wewôM》	ペグー，ハンタワディー，インセイン，タラワディ，プローム，イラワディ・デルタ
4	スゴー・チェー(チョー)《cgôM khyêF (kyô)》	アラカンからナガ丘陵を経て北部カチン丘陵にいたるビルマの西部，チン４種とカチン４種を含む

③ブゲェー《bhgê》

	分類		
1	ブゲェー・ゴー（カレンニー）《bhgê》	7	ゲバー《kêbha》
2	ブゲェー・ワー（ヤベイン）《bhgê wa》	8	プレー《pre'M》
3	ブゲェー・トゥー（レーメー）《bhgê su》	9	サイェー《saye》
4	パダウン《padôF》	10	シシ《si'Msi'M》
5	ソオコー《chôFkhoF》	11	マノ《mano》
6	ゲーコー《kêkhoF》	12	ナヌマノォ《manumanôM》

出典：Aung Hla 1939: 89-97.

にカレンニーやタンダウン地方の諸サブグループにおおよそ対応しているが，スゴーの下位にはチンとカチンという普通は別の民族と見なされている人々も含まれている。後述するが，以上のようなプアカニョウ原３支族の分類はバプティスト宣教初期に見いだされた理解が引き継がれている［*ibid.*：89-97］。

プアカニョウがビルマ領域に入ってきたのちの諸王朝興亡史は著書の３分の１以上を占めて，とくに壮大に描かれている。プアカニョウの雲南からの南下はおおきく３波にわかれて，メコン川（コー・ロッ《kôM lo'L》），イラワディ川（プレー・ロッ《pleF Lo'L》），そしてサルウィン川（ゴー・ロッ《ghoF lo'L》）沿いになされた［*ibid.*：80-84］。メコン川流域への南下はチェンマイや遠くアンナンの地まで広がったことが記されているが，ここでは，イラワディ川とサルウィン川沿いに南下したグループの歴史について簡単に紹介しよう。そしてこれらふたつのグループの歴史は，ソオ・アウンフラがウー・ピンニャとウー・ソオのカレン史より情報を流用し，仏教的な観念を脱色し，キリスト教的なカレン史に組み替えた記述部分である。

イラワディ川に広がったプアカニョウによってまず，タガウン（ウェー・タコー《weL takô》）という，通常のビルマ史ではピューの都城とされる都市が創建された。しかしBC600年にはインド人，つまりはビルマ人の始祖とされるインドからの移住者のなから現れたタドーシュウェミン王によって，この地は征服されたとする。同様にティリキッタラ（ポー・ウェー《pgoL weL》）も，そもそもポーの都城で，プー・プレー《phü pleL》と呼ばれる首長が，仏陀入滅後101年目にあたるBC443年に開いたという。紀元後95年にティリキッタラは滅亡し，この地の民はポーとスゴーの第一グループ，ブゲェーの第二グループ，そしてインド人（ビルマ人）とプアカニョウの混血の第三グループに分かれて各地に散った。かのパガン（ウェー・パガー《weL pakaF》もまた，ティリキッタラから逃れた第二グループのブゲェー王族の家系との関係のうえに語られる。パガンの開祖タモーダリッ王の二代のち，168年に請われて王位に就

いたのはソオ・ディー《sôM diF》と呼ばれるブゲェーで，こののち440年までの272年間，プアカニョウ純血の王統がパガンを治めたという。ちなみにこのソオ・ディーとは，通常のビルマ史でパガン朝の伝説的開祖ピュウソオディのことである。他民族の王も含めて，1369年までパガン朝は存続した［*ibid.*：107-128］。

他方，雲南からサルウィン川沿いに下ったプアカニョウは，さらに二手に分かれて，一方は東ブゲェー・カレンニーの地に根付いた。もう一方はヤメーティン地方に定住，しだいにタウングー方面に勢力を拡大した。1119年にはビルマ人のパガン王ナラパティシトゥがタウングー（ウェー・トーウー《weL tôu》）へと侵攻しプアカニョウを捕らえて強制移住させるが，1256年にマルタバンの王がプアカニョウに肩入れし，ビルマ勢力を追い払った。1299年にはスゴーのソオ・バーがタウングーを再興した。また，こののち1531年にタウングーの王位に就き，ビルマ全土を統一したタビンシュウェティーは，プアカニョウとビルマ人の血を半分ずつ受け継いでいたという［*ibid.*：128-139］。

サルウィン川南下グループは，ズウェカビン（クウェカボー《kwêLkabô》）山を擁する現カレン州の一帯でさらなる繁栄をみる。ソオ・アウンフラは，この地域でのプアカニョウの王朝史の細部をウー・ピンニャの『カイン王統史』の記述に多く負っているが，モン人との関係はまったく異なった様相で描かれている。まず先住者としてのプアカニョウはすでに強固な王国を築いていて，後からやってきたインド起源のモン人はやがてプアカニョウに対して反乱を起こし，1049～50年にプアカニョウはモンの支配下に下ったとされる。ウー・ピンニャにおいてはモン・カインに親和的で，王権を授けズウェヤーやパアーワナ王朝の創建を許したモンの王が，プアカニョウにシンハリ（上座）仏教を強制した暴虐の主としての性格を付与されることになる［*ibid.*：144-162］。

このほかにも，タトン（ウェー・タトゥー《weL sathuF》）とモールメイン（ゴーター・ウェー《ghoFthaF weL》）の歴史［*ibid.*：149-152；158-162］，現

在の下ビルマの都市であるバゴー（ウェー・パコー《weL pako》），バセイン（ウェー・パティー《weL pasiF》），ラングーン（ウェー・タクー《weL taku》）なども，その起源においてプアカニョウが深くかかわっている。たとえばヤンゴンのシュウェダゴン・パゴダの建っている土地は，太古の昔に，とあるプアカニョウの漁師が占有の意思をあらわす釣竿をめじるしとして立てた伝説的な場所であったが，インド人とモン人によって詐取されてしまったという［*ibid.*：162-209］。

プアカニョウ諸民族による王朝興亡史は，つねに，インドからやってきた外来者としてのビルマ人やモン人との闘争の歴史であって，これらビルマ人とモン人は仏教（ソオ・ゴータマーブーダー・アターブーターバー《sô kôtama'M bhu'Mda'M ataLbhuFtaLbhaa》）の徒であったのに対して，プアカニョウは元来，単神論的な信仰を保持してきたという決定的な相違点があった。モン人やビルマ人が仏教をプアカニョウに強制した結果，20世紀になってもおおくのプアカニョウが仏教の信徒であり続けている。その一方で，仏教を受け入れなかった多くのプアカニョウは山岳部へと逃げ込み，太古の本来的な信仰を忘却して悪しき精霊を崇める野蛮人に堕してしまったと，精霊信仰のプアカニョウの現状を嘆いている。しかし，1581年にタンリン（シリアム Syriam，ウェー・タニョー《weL tanô》）でのカソリック布教に始まったキリストの宗教（カリ・アターブーターバー《khari'L ataLbhuFtaLbhaa》）はプアカニョウに希望をもたらし，本来の単神論的信仰への回帰をうながすきっかけとなった。そして，19世紀はじめのアドニラム・ジャドソンとそれに続く米国バプティスト派の宣教師による布教が，今日のプアカニョウの繁栄の基礎をもたらしたものと詳しく説明される［*ibid.*：227-243］。

プアカニョウの文化についても，暦，習俗，居住形態，死者追悼などの諸儀礼，口承伝統，文学など多岐にわたって記述している［*ibid.*：210-265］。たとえばプアカニョウ独自の文字については，それが過去に存在していたもののビ

ルマ人に剽窃されたあげく，1044年のアノーヤター王によるプアカニョウ支配の折りに失われたとする。したがって今日，モン文字起源のビルマ文字とされるものは，そもそもプアカニョウが発明したものである。このプアカニョウ独自の文字体系は，19世紀に主にバプティスト派宣教師ウェイドの尽力によって回復されたとする［*ibid.*：243-255］。

このように，仇敵のモンとビルマ，回復されたプアカニョウ本来の信仰としてのキリスト教というモチーフは，ソオ・アウンフラの描く民族としてのカレン像の根幹である。結論では，プアカニョウがかつて偉大な民族であってその栄光が「われわれの時代」，つまりビルマの植民地時代にふたたび戻ってきたことを同胞のプアカニョウに知らしめるためにこの本を執筆したことを記して，本書を締めくくっている［*ibid.*：265-269］。

第３節　執筆意図と依拠文献

『プアカニョウの歴史』の主たる関心は，このビルマ地域に広く根付いていた仏教原理に抗って，やがてはキリスト教に連なる単神論的な信仰を始原からもってきた「プアカニョウ」というひとびとが，独自の言語・文字・文化・王権を闘争の上に保ってきた歴史を描くことにある。プアカニョウは失われたイスラエルの民で，無主の地であったビルマ領域への最も初期の移住者のひとつであって各地に独自の王国を営んでいた。そして，仇敵のモンとビルマによる苛酷な圧制，そして彼らの宗教たる仏教への絶えざる強制的な教化という圧力をどうにかかわして，ようやくに英国植民地期の彼の時代に，かつてのプアカニョウの栄光が回復されたものとして描く。

では，本書は誰に向かって書かれているのか。上のような歴史観の表明がスゴー語とキリスト教スゴー文字を使って行われたということは，それがビルマ社会を構成するビルマ人や他民族に対して行われたものではなく，もっぱらバ

プティストのスゴー・カレンに向けられていたということであった。ビルマ語は，すでに多民族社会として顕在していたビルマ世界のリンガフランカの役割を担っていて，広い流通範囲をもっていた。それに対してスゴー語は，ポー・カレン語話者にたいしてはカレンの共通語の役割を果たしうるが，それがキリスト教スゴー文字で書かれるとなると，仏教徒スゴーやキリスト教他宗派のスゴーすらも想定される読者の対象外に置かれることになる。したがってソオ・アウンフラのカレン史は，他者に対する独自な民族としての宣言というよりは，自らのコミュニティに向けられた，ある種の自己再確認の営みであったといえる。『プアカニョウの歴史』はバセインのカレン・マガジン・プレスで1000部が印刷され，出版後にバプティスト・スゴーのあいだに反響を呼び，宣教師学校において教科書あるいは副読本の教材として採用されたという［Saw iS］。この点において，ビルマ語でビルマ語話者に向けて書かれたウー・ピンニャやウー・ソオのカレン史書の性格とは決定的に異なる。

あらかじめその評価の一端をあきらかにしておくと，ソオ・アウンフラのカレン史書は，20世紀初頭から顕著になりはじめた，バプティスト・カレンによる一連の民族的な自己主張の中でも，文化的な民族表明としてはもっとも精緻に構成されたものであった。だが，ここで叙述される民族名と民族の起源，支族分類，壮大な王朝史，カレンの宿敵としての仏教徒ビルマ人やモン人，イスラエルの失われた民という出自など，個々の主張をどのように評価すべきなのだろうか。ソオ・アウンフラによって表明されるカレン像・カレン理解を，より広いカレン知の形成過程のなかに位置づける必要が出てくる。ソオ・アウンフラのカレン理解は異端なのか正統なのか，そのすべての情報をバプティストの伝統から採取したのか，バプティストの領域の外でも形成されていただろうカレンの知識とはどのような関連があったのか。こうして，カレン知の形成過程じたいにも疑問は向けられることになる。ビルマ人や他民族はカレンを19世紀以来，どのように見てきていたのか，英人はどのようだったのか。20世紀に

カレン知はどのような展開を迎えたのか。

このようなもろもろの疑問を念頭に，まずはソオ・アウンフラがどのような書物を参考にしながらカレンの歴史を構成したのかを，検討することにしよう。本書末尾には参考文献表が付され，33の英語，16のビルマ語，13のスゴー・カレン語の文献が掲載されている［Aung Hla 1939：270-271］。

英語文献のリスト筆頭には，マクマホンの『黄金半島のカレン』［McMahon 1876］，スミートンの『ビルマの忠誠なるカレン』［Smeaton 1887］，そしてマーシャルの『ビルマのカレン』［Marshall 1922］という，植民地期の代表的なカレン書物が見える。また，ハックニー[5]やハリスの『東方の星』［Harris 1920］[6]，G. W. ハーヴェイの宣教史書［Hervey 1884］など宣教師の著書，当時カレンに言及していると信じられていたマルコ・ポーロ旅行記[7]の２つの英訳版［Yule 1903；Masefied 1926］などがつづく。そしてフェイヤー［Phayre 1883］やハーヴェイ［Harvey 1925］，コックス［Cocks 1919］などによるスタンダードなビルマ通史，３点の中国史［Gutzlaff 1834；Gowen 1926[8]；Soothill 1929］，インド国勢調査［Government of Burma 1912；1923］やタウングー，ペグー，シリアム，インセイン，アムハースト，ルビー・マインズ各県のビルマ地誌［Government of Burma：1914a；1917b；1914b；1914c；1913a；1915］，

5　The Karens by Rev. John Hackney とあるが，どの著書が不明。

6　The Star of Burma となっているがこれは［Harris 1920］のことであろう。

7　マルコ・ポーロの『東方見聞録』には Caride というチベットの南，アヴァに及ぶ国と，Cariaines という人々への言及がある。後述する最初期の宣教師メイソン（Francis Mason）は，これをカレンと結びつけた［Mason 1868：162］。他方，20世紀初めの宣教師人類学者マーシャルは，ブゲェーの伝承にこれに関連する口碑を見つけたとするが，それでもマルコ・ポーロの Cariaines をカレンとするのは根拠薄弱だとする［Marshall 1922：14］。

8　An Outline History of China, 1926, by Gwen and Hall とあるが，おそらくこれは［Gowen 1926］のことだろう。

それに先行するインド地誌［Government of Burma：1908］などの政府刊行本も10点ほど含まれる。ほかにも考古学者トオセインコー[9]のパガン発掘ノート［Taw Sein Kaw 1926（1917）］，歴史家ペーマウンティンによる『玻璃宮御年代記』の英訳書［Pe Maung Tin 1923］もリストに挙げられている。

ビルマ語文献としては，『大王統史（maha yazawindaw dojî）』や『玻璃宮御年代記（hmannân maha yazawin dojî）』など数種のビルマやモンなどの王統記，あるいはそれらを底本として一般向けに読み易く編集した書物[10]，シュウェダゴンなどビルマ各地の仏塔縁起[11]，それに『贍部洲縁起（zabudazei' cân）』というおそらくはウー・ピンニャの引用しているのと同一の文献も列記されている。そして，ウー・ピンニャの『カイン王統史』とウー・ソオ『クゥイン御年代記』の２点もリストに載る。

最後にカレン語文献として，まず，カレンのあいだに受け継がれてきた口承詩であるタァが随所に引用されている。しかし，とくに文献表に記載された１書に依拠しているわけではなく，各書に散在したタァや彼自身の収集したものを使っているようである。そのようなタァが確認できる文献としては，ソオ・コートゥーとウェイドによる『カレン知識の宝典』［Wade 1847；1848；1849；1850］，そしてスゴー・カレンの長老として尊敬を集めていたテオドア・タンビャの三部作［Than Bya 1904；1906：1914］がリストにある。また，ウェイドのスゴー＝英語辞書［Wade 1849］，「1911年の全カレン人集会に際して書か

9　Taw Sein Ko（1864-1936）は著名な考古学者で，フルットゥ（Hlutdaw，王朝下の元老院）の記録編纂［1889］や評論活動［例えば1913］などで知られる。

10　書誌情報は不明であるが，『タウングー王統記とタウングーの歴史』（1924年），『ハンタワディのシンチャーシンの説話』（1918年），『モン王統記』，『中国王統記』などもリストにある。

11　『シュウェダゴン仏塔の歴史文書』（出版年など詳細不明）や『ミャンマー王統記とシュウェナッドー仏塔縁起』（1911年）など。

れたトラ・バテー（Thra Ba Te）[12]の記事」，サァルー（San Lone か？）の『プアカニョウの歴史とトラ・ウェイドについて』（1931年）などが含まれる。ほかにも雑誌や新聞などの記事も文献表には掲載され，そのなかには『牧羊者（Shepherds）』や『カレン・レコーダー（Karen Recorder）』，『カレン雑誌（Karen Magazine）』その他のビルマでは散逸してしまったカレン語定期刊行物が見える[13]。

さて，これらの書物はカレンの知識形成過程において，どのように位置づけられるのか。まずはこれらの書物以前，18世紀に散見されるカレンについての断行的な記述をひろいあつめてみよう。

第２章　最初期の記述（18〜19世紀）

カレンに関する最初期の記述は，王朝側にしても，西洋人によるものにしても断片的である。さいわいこれらについては，伊東による詳細かつ網羅的な一連の研究［伊東 2006a；2006b；Ito 2007；2011］がある。ソオ・アウンフラのカレン史に直接的な影響関係があるわけではないが，それを育んだバプティスト宣教の前史としての意味合いがある。バプティストによってカレン観が確立される以前，どのような「カレン」が語られていたのか。それはバプティストのカレン知にどのように接続したのか。以下，これら３論文４点に依拠して王朝側と西洋人の視点のふたつにわけて概観して，最初期のカレン言及史料の特徴をあきらかにする。

12　Thra Ba Te も著名なバプティストのスゴー・カレンの牧師で，マーシャルの著書［Marshall 1922：6. fn.6］にも引用されている。Ba Te はビルマ語の Ba Thin である。

13　ビルマ語新聞と英字新聞の Rangoon Gazette の記事もカレン語文献に掲載されている。

第1節　王朝下の「カレン」

ビルマには1752年，最後のビルマ統一王朝とされるコンバウン王朝が成立した。この王朝下で，カレンについて言及した史料はさほど多くはない。王統記や詔勅における断片的な言及以外で，あるていどまとまったものとして伊東はシッターンとカイン（カレン）・オーダンの２種類に注目している。基本的な問題意識として，近代国家におけるネイションやエスニックな認識を批判的に対象化するため，民族名称とされる呼称の前近代における意味あいと他の人的分類のタームや個々人のアイデンティティとの関係解明を念頭に，カレンを事例として扱う，というアプローチがとられている［Ito 2007：89-90, 伊東 2011：43-45］。総じてエーヤーワディー流域に成立した政権内で用いられたカレンという語については「単に非ビルマという意味しか持ちえ」ず，それは第１に「各地に散在し，言語も異なる人々が我われ意識を有するための制度的環境が整っていなかったこと」，第２に「政権中枢の残した文書では，カレンという語に対して一致した見解が盛り込まれていなかったこと」ためである［伊東 2011：44］。

まずは，シッターンという王朝の行政文書について見てみよう。この文書は，王朝下で一定地域の住民の支配者（ダヂー）がその支配の正統性を宣し，とくに徴税を主とした支配形態を王に申告したものであった。18世紀後半から19世紀初頭にコンバウン朝下で書かれたタウングーや，モウッタマ，ハンタワディ，パテインなどの下ビルマ各地のシッターンには，そこに散在するカレンの村と彼らに課せられた税がどのようなものであったかを伺い知ることができる。ここにあらわれる記述を仔細に検討した伊東は，従来言われてきたように［例えば Koenig 1990：63］カレンが民族として過重に税を賦課されてきたわけではなく，それ以前に王朝側に単一の確固としたカレンなる民族観念とそのように

名付けたひとびとへの一様な政策的対応が存在せず，彼らをせいぜい，下ビルマにおいてモンとは異なった言語を話す人々としか認識していなかったことを明らかにしている［Ito 2007：104-105］。上ビルマの王都にあったビルマ語話者の支配者らは，ダヂー制のもとに孫支配されるカレンには総じて無関心であった。

王朝下でカレンが顕著に言及されるいまひとつの史料群には，カレンを題材に取った歌謡がある。伊東の研究［2011］ではターヤーワディー・ウー・ワインによる「カレン・オーダン」の２編とウー・チンウーによる「パデータ歌謡」中の「ダバウン月（ほぼ３月）の詩」３篇が検討の対象となっている。

カレン・オーダンは山里叙景歌（トーラー）に属して，「太く低い声で謡われた（オーダン）」［*ibid.*：45］歌謡形式で，コンバウン朝期の後半ターヤーワディー王代（1837－46）にターヤーワディー・ウー・ワインによって創始されたが，ここで引用される２編しか認められないという。２編ともに，本編ではカイン（カレン）という言葉で直接に謡われるわけではない。１編目の冒頭は「たちこめし　霧の川辺　灰斑鳩ののどかさは　遠くにある身に　うら悲しレー　ラー　ヘーの声にも　切なく　洗頭柑の枝には　鳩鳴のかまびすし　籠を背負いたる　貫頭衣の優雅さよ　・・・」とはじまり，ここにあらわれる「貫頭衣」，ほかにも「背負い籠」「焼畑耕作」でカレンが表象されるのみである［*ibid.*：46-47］。これらのオーダンの前置きとしておかれる一節に，「カレンの乙女よ」と明示されることで，それとようやくにわかる［*ibid.*：48］。作者の名前に冠される「ターヤーワディー」はおそらく王の名にあやかってのことではなく，彼の出身地にちがいないターヤーワディー地方のことであり，ここでは作者がその材をとったカレンのひとびとのどかな山里の情景が広がっていたのだろうと，想像される。

またウー・チンウーの歌謡でもカレンの表象はほぼ同様であり，３篇の最初には「銀の耳環で飾りしご仁　森に火をかけ　耙をかけず　播くは掘り棒　伝

来の鶏占い　濁り酒を囲んで楽しげなり」とあり，３つ目は「常のごとく　朦朧と　濁り酒のカゾーで　楽しげなり　耙の歯先も牛も用いず　カレンの堀棒で　畑を耕す」とある。いずれもダバウン月の風物のひとつとして，カレンの山里の情景が題材となっているにすぎない。ウー・チンウーもまた，ターヤーワディー・ウー・ワインと同様に生没年不詳であるが，ほぼ同時代の詩人と推測される。

両人のいずれもカレンにたいする執筆態度は，「支配・行政という観点は見られず，どちらかといえば風景の一部としてこれを取り入れ，それ以外に何か特別な感情が働いていたとは考えにくい」。そして，「カレンが貫頭衣を身につけ，播種には堀棒を使い，濁り酒を飲むということが繰り返されるのは，これが18世紀後期[14]の王都付近におけるカレンに対する認識であったことを示している」といえる［*ibid.*：54-55］。

以上のように，王朝下，ビルマ語史料におけるカレンへの言及はごく些少である。そこで描かれるカレンは，人的集団として明確な輪郭線と核心が備わった性質規定が伴っているわけではなく，たしかに「非ビルマという意味しか持ちあえていない」［*ibid.*：44］ように見える。

第２節　西洋人旅行者の視点

ほぼ同じ時期にこの地を旅行者として通過した英人，あるいはカトリック宣教師として滞在していたイタリア人によるカレンに関する記述もまた断片的であることに変わりはない。伊東論文［2006a；2006b］では，現在ひろく共有されているの「無辜の民カレンという定義が，いつ，だれによって，何のために，どのような要素に着目しつつ，形成されていったか」［2006a：18］を着眼点と

14 「19世紀初頭」の誤りか？

して，19世紀の西洋人のカレンへの眼差しが検討される。

1755年，シュウェボーのアラウンパヤー王のもとに英国東インド会社より派遣されたベーカー大尉は，カレン（Carianner）と呼ばれる人たちがビルマ人（Buraghmahn）やモン人（ペグー Peguer）より色白で，ミャンマー・カレンとペグー・カレンに分類され，小さい集落を形成して森の中に住んでいることを記して，その習俗について略記している［伊東 2006b：27（Dalrymple 1793：100）］。また，同じく東インド会社の元軍人のラボウムは1790年にインド政庁へ送った書簡の中でカレン（Carion）について同様に言及するが，ペグー人とビルマ人に対して「武器を取ったことはなく，圧迫に耐えかねる時は，逃散し獣虎の間に住むをよしとするか，野蛮な支配者の軛に繋がれた水牛に伍することになる」［伊東 2006b：26（Melchoir La Beaume）］と記している。この２つのカレン記述の間には，1759年のネグレイズ島の英国東インド会社の商館焼き討ち事件があり，王朝側の襲撃により英人７人とインド人100余名が殺害されている。したがってラボウムは「商館を蹂躙したミャンマー王朝を征服すべきと提案」して王朝を批判的に捉え，いかにビルマ人が「暴虐であるかを際立たせるため，カレンの人情味豊かさ，穏やかさ，実直さ，無邪気さ，そして平和を愛する姿が描かれている」［*ibid.*：26-27］と伊東は指摘する。

記述者の王朝へのまなざしが，カレン像に投影されているという指摘は重要である。このような史料批判のもとにカトリック宣教師の書き残したものを再検討してみると，王朝下で「抑圧されてきたカレン」に関する証言として幾度も援用されてきたサンジェルマーノの書物［Sangermano 1995（1893/1833）］には，抑圧の具体相への言及が欠けていることに気がつく。1783年から1808年のあいだに滞緬した彼には,「ミャンマー王朝政府が構造的に民族マイノリティを弾圧しているという認識」［伊東 2006b：25］があった。サンジェルマーノの先行者で1772年にビルマに派遣されたバルナバ会司祭のガエタノ・マンテガッツァも，1784年の『旅行記』に，「善良な人々であるカレン（Carein）あ

るいはカリアン（Carian）の国（la nation）」について記し，「現在ビルマ人に従属している」とする［伊東 2006b：28-29（Carmignani 1950：188-189）］。ここでもカレンへのビルマ王朝の「弾圧」は具体性を欠いており，それはカトリック宣教師が王朝政府を「必要悪と考え，これを利用しつつキリスト教の布教を展開して」，「ミャンマー政府を正面に据え，常にこれを批判しなければならない立場には置かれていなかった」からだと推論される［*ibid.*：30］。

こののち，1795年に英国東インド会社からアマラプーラに派遣されたサイムズ（Michael Symes）大尉［Symes 1800］一行が，カレン（Carayners, Carianers）についての見聞を残している。そこでは「ミャンマー人の抑圧のもとに，閉鎖的で素朴でひっそりと暮らすカレン」というサンジェルマーノから得た情報に基づくカレンと，「ミャンマー人との経済関係が密接で生活も豊か，心身壮健で，政府にとっては被差別者というより，他のミャンマー人一般と同様の被支配者」［伊東 2006a：27］というふたつのカレン像が混在している。ここで比較的穏健なカレン像が描かれたことについては，むしろ「サイムズがビルマ王室に好意的であった」［伊東 2006b：33］ことが指摘される。

だが，英国東インド会社と王朝の関係が悪化し，ついには最初の砲火を交えることとなった第1次英緬戦争のころには，「戦略的観点やミャンマー王朝政府を敵としていたという状況のもとで，カレン像はミャンマー政府の姿を描き出す手段として利用されてゆく」［伊東 2006a：34］ことになる。この戦争の従軍記［Snodgrass 1997（1827）］を書いたスノッドグラス少佐は，現在のヤンゴン郊外にあたる場所にあったカレンゴンという村でカレン人（Carian tribe）に出会った。そして，この人々が「毎年多くの穀物を王庫に送り，これはそれほど肥沃でない上流のアヴァ地方で使われて」いて，「重税を政府に支払」っている様を記している［伊東 2006b：29（Snodgrass 1827：141-142）］。英軍に従軍した別の将校であったトラントも同様のカレン（Carians）観を記している［*ibid.*：30（Trant 1827：147-148）］。この段階でもサイムズにあったような

２つのカレン像の混在が見られるものの，敵としてのビルマ王朝という関係性は，やがて「いかにカレン人がイギリス軍に友好的であるか，そして反ミャンマー的か」という方向に強調がおかれることになっていく［*ibid.*：32-34］。

そして終戦後に結ばれたヤンダボー条約の規定によって駐在官として王都アヴァの対岸ザガインに1826年の末に滞在したクロフォードの報告書［Crawfurd 1834］では，王朝側の暴虐を映す鏡としてのカレン像は決定的になる。彼は王朝支配下の18種の民族（nations）や部族（tribes）を人口や文明度にしたがって列挙し，とくに王朝の税制を述べた部分で具体的な数字を挙げてカレンへの課税が多民族と比べて苛酷であることを示している。そこでは，王朝政府によって「カレンがカレンなるゆえに構造的に差別されている姿を描き出すことこそが，クロフォードの主眼とするところであった」［伊東 2006b：36-40］とされる。

以上のように，18世紀から19世紀初頭にかけてエーヤーワディー流域地方に滞在しカレンを遠望した，あるいはカレンのかたわらを通過した西洋人の記述やまなざしの根底には，カレンを nation や race の用語のもとに括って語り，そのまなざしを先験的に拘束する西欧流の民族観念の存在が，たしかに感知される。しかしそれ以前に注目すべきは，いずれの西洋人による記述も，カレンそのものというよりは記述者のビルマ王朝への関心のなかでカレンを描いていて，カレン像は王朝像とセットであるという点である。してみれば，最初期の王朝側，西洋人側のカレン記述両方とも，カレンという人的集団を扱いつつも，「カレンそのもの」への記述の意思は希薄であったと評価できそうだ。このことをどのように考えるべきか。

第３節　最初期史料の特徴と位置づけ

本章で題材としている最初期のカレン記述にかぎらず，史料には書かれた目的と文脈があり，執筆者がいる。このような条件とのかねあいで，当該テキス

ト上での特定の表象の位置づけ，テキストに含まれている他要素との関係での当該表象の軽重・主従を明らかにしなければ，執筆者（たとえば「王朝期の詩人」）が対象（たとえば「カレン」）にたいして持つ態度が一般的なものであったのか，そのうえで，民族をふくめた集団性一般をどのようにとらえていたのかを判ずることは難しい。

シッターンについては，その文書の目的はおおよそのところ，シッターン「提出者のトゥーザー（ダザー）権の正統性」の確認にある［Ito 2007：90］。また，「カレン・オーダン」の２編と「トーラー」の３篇でいえば，これらのテキストは，前者は「山里の豊かでいききとした［いきいきとした］様子を描く」ことに主眼があり［伊東 2011：48］，後者では「カレンの山里もダバウン月の風物の一つにすぎない」のであって「カレンのことを読む［詠む］ことが目的ではない」［*ibid.*：52-53］。このようにダザーによる支配の正当性を上申する被支配者リスト表の一項目，あるいは山里ののどかさやその平和を表現する一要素という，カレン表象のテキスト上での従属的な位置づけからすれば，これが王朝のカレンにたいする主要かつ一般的な態度や定見であったとか，そのようなイメージであったとただちに結論づけることはできない。むしろ，このようなカレン表象の周縁的な位置づけにこそ着目すべきであり，このシッターンの提出者も王朝下の２人の詩人も，ことほどさようには「カレン」そのものに興味を持っていなかった，ある種の固有の集団的な性格を付与する必要にせまられるほどには関心を寄せていなかった，と評価すべきであろう。

となれば次に問題になるのは，このようなカレンへの関心のなさは，王朝期に一般的なものであったか否かという点である。ほかに特段，カレンを扱った史料も見当たらないとなると，そもそもこれこそが王朝側の「カレン」への一般的態度だったと見なしてよさそうである。

これにたいして，たとえばビルマ語の史料上には「インガレイッ（ingalei'）」などと言及される「英国」は，やがて王朝自身の存亡を脅かす存在になるわけ

で，王統記にも勅令集にも頻繁に出現して輪郭をともなった，「外道」といった「さげずみ」や「脅威」の感情が託される存在として表象される[15]。それは実際，王朝期の宮廷にとって「英国」が，意味のある，ある種の性質規定を付与せねばならなかった相手だからだ。詳細な性質規定を施さずにはいられないほど，関心を持たざるを得ない存在であったからだ。

しかし,「カレン」は違った。王朝の中心のあったビルマ中央からは遠く隔たった鄙の地にあり，地方領主に孫支配される「下ミャンマにおいてモン語とは異なる言葉を話す人々」[Ito 2007：105；伊東 2011：44] ていどの認識しか持たれず，王朝の政治を脅かしもしなければ，利となるわけでもない存在，あるいは，移ろいゆく季節の「風物の一つ」，のどかで静謐な山里の「風景の一部」や「情景の一こま」[伊東 2011：53, 54, 56] としては秀逸な材を提供するていどの存在でしかなかったのだ。王朝側は，「カレン」にさほど興味を持っておらず，どのような種類の人々かと規定し，実体化し，本質化しようとする意思も意欲もない。

このようなカレン表象に「民族」や「人種」の観念が備わっているか否か，備わっていなければどのような観念・世界観に底支えられて表象されていたかを論じるのは，また別の作業となる。王朝期の宮廷や一般の人々に現代流の「民族」や「人種」観念があったかどうか，なかったとしたなら歴史的にいつの時

15 ［伊東 2011］では「カレン・オーダン」（第１節）と「トーラー」（第２節）におけるビルマ古典歌謡のカレン表象と，同時期の欧米からの眼差し（第３節）におけるカレン表象を対照させて比較・分析している。全体の論調から，前者のカレン表象には「さげずみや非難の感情はみじんもない」[*ibid.*：48]，「総体としてこれを蔑むような眼差しは認められなかった」[*ibid.*：65] として，欧米人の眼差しにはそれがあったこと［とくに *ibid.*：59］を示唆している。しかし，「蔑み」の視線が混入するかどうかは，ビルマ王朝－欧米人という区別，「民族」や「人種」フレームワークの有無とは直接に関係はなく，第一義的にテキストの目的や文脈に依存する。

点からビルマ世界にかような観念がどのように生成して，現代に見るように，人的集団をみる眼差しとしては主流の枠組みの座をどの時点で得たのか，という点が問題になる。これは「カレン」という民族の知識，それに対応する「ビルマ人」の眼差しを検討している我々にとっても大きな関心となる。これについては第4章で取り上げたい。

このように考えると，欧米人による「『カレン』の発見」を論じた論考［伊東 2006a；2006b］での指摘は，テキストの記述の目的と文脈という観点から正鵠を射ている。つまり，「戦略的観点やミャンマー王朝政府を敵としていたという状況のもとで，カレン像はミャンマー政府の姿を描き出すための手段として利用されて」［伊東 2006a：34］いった，という指摘である。とくに東インド会社のラボウム，王都に滞在したサンジェルマーノ，第1次英緬戦争に従軍したスノッドグラスやトラント，ザガインに駐在したクロフォードらの描く「カレン」像には，これら記述者の最大の関心である王朝への眼差しが色濃く投影されていた。そこにいくばくかの，「カレン」という人々の民族的属性を明らかにしようという意図はともなっていても，それはテキスト上では主要な関心ではない。したがって，ここにおいて「カレン」は主に媒体であり，明確な輪郭線と核心をもつ存在ではない。

ただ，王都のカトリック神父の伝聞譚や英人旅行者の記録にあらわれる18世紀から19世紀初頭の「カレン」記述は，その原初の意図と本来の文脈から離れて，後世つぎつぎと別の記述目的のために引用・流用されていった。とくにサンジェルマーノの記録とスノッドグラスの従軍記は，相当の昔からカレンがビルマ族の「暴虐」を受けていたという典型的な「証拠」として，もとの文脈からは切り離されて読み替えられていき，カレンとビルマ民族が有史以来の「敵同士」であるという構図が常識化するほどまで引用され，利用されていった。

さて，上に検討したような従属的なカレン表象がおおきく変化するのは，19世紀の米国バプティスト派宣教師によるキリスト教宣教開始以降である。バプ

ティスト宣教師のカレンに対するかかわりは，相互の関係性の濃密さ，時間的な持続性，空間的な広がり，そこから生み出されたカレンに関する情報量のいずれの側面をとっても，従前の王朝や西欧人旅行者によるカレン観がまったく問題にならないほど圧倒的であった。(16)そしてそののち，英国植民地政庁はバプティストが生み出したカレン観を追認して受容し，統治の対象としてそのカレン知に新たな情報を加えることになる。(17)

第３章　カレン知識の確立（19世紀）

ビルマ王朝下で培われた「カレン」，そして19世紀初頭までの西欧人の見聞録にあらわれた「カレン」の双方ともに後世，「カレン」という人々に関する知識としては主流とはならなった。そのようなカレン知が形成されたのが，19

16　バプティスト宣教のカレン観について，伊東が一連の研究の最後［伊東 2006b：40-42, 2011：56-64］において言及している。ごく簡単にまとめてみると，キリスト教宣教によって「怠惰で無気力なカレン像にシフトして」［伊東 2006b：40］いき，最初期の宣教師のひとりであるボードマン（G. D. Boardman）の伝記をたよりに「宣教の都合から生まれた，素朴な自然児としてのカレン像」，「無辜の民カレンという言説」［*ibid.*：42］が生まれたとする。しかし，ボードマンはカレンへの本格的宣教開始後３年目に死去しており，この引用が，それ以降世紀をまたいで拡大していった巨大なバプティスト宣教の営み全体の傾向を表しているとは言いがたい。

17　伊東による一連の研究では，英国植民地政府によるカレン観についても触れられている。そこでは1840年代に出版されたとおぼしき『有用知識普及協会廉価事典』第24巻におけるタニンダーイーの項のカレン概説［2011：61］，下ビルマ英領化直後に出された行政報告書の引用［*ibid.*：62］，1867年から71年までの英領ビルマ弁務長官フィッチの回想録の引用［*ibid.*：63］など幅広く渉猟され，稀覯な史料が検討されている。これらの引用史料が，19世紀以降とつじょ豊富になる，カレンに言及するバプティスト史料・英人史料群・英国行政文書群のなかでどのような位置づけをもっているか，これらの諸「カレン」記述のなかでどの程度の代表性をもっているのか，注意深い資料批判をおこなわなければならない。

世紀前半からの米国バプティストによる宣教活動においてである。では現在のカレンという民族に関する知識は誰によって，どのように見出されまとめられ，定着したのか。さらに，ソオ・アウンフラのカレン史を構成する知識，なによりも起源から単神論者としてのカレン理解はどの段階でどのように見いだされたのか。彼のカレン史冒頭で問われる３つの基本的問いは，歴史的にはいつ誰によって答えられていたのか。

第１節　「旧約聖典の民」

始原よりの単神論者，ヘブライ起源でキリスト教徒に宿命的なつながりのある民族というカレン理解は，宣教過程で徐々に見いだされ形成されてきたというよりは，宣教当初から宣教師のまなざしの中にあったものであった。

ヘブライ起源の宗教につらなる民であるという最初の「証拠」が見いだされたのは，宣教に先立ってカレン諸語を話す人々に広く流布していた「失われた本」に関する伝承においてである。これにはさまざまな異型が存在するが，共通するストーリーの骨格は，カレンの伝説的神格である「ユワ」が去るにあたってカレンに黄金の本を授けたが喪失してしまった，しかしカレンの弟である「白い人」がこの本を携えやがて帰ってくる，というものである。米人宣教師は初期の接触の中で，宣教師を「白い人」，彼らの携えた聖書や祈祷書などの書物を「失われた本」と見なすカレン側の熱烈な待望に遭遇し，これがカレンによるキリスト教の大規模受容の土壌となったとされる。

この伝承は，なにもキリスト教を受容したカレンらのみに見られるものではなく，仏教を受け入れたカレン［Womack 2005：69］や中国南部のミャオ，ビルマ北東部からタイ北部のラフ［片岡 1998］などのあいだにも見受けられた。一般的には，東南アジア大陸部の山岳民族による知識を持つ平地民との対比の中で行われる劣位の語り，したがって繁栄と自己統治の願望の表明［Womack

2005：70]，文字受容の刹那に作動した機制として，「民族語読み書き能力の渇望というよりは，文字・書物のもつ呪的・秘儀的側面がもたらす『力』への希求の肥大化」[片岡 1998：163] などの論点によって，研究が深められている。なによりも「19世紀初頭の下ビルマの一部のカレンにとって，何らかの『欠乏の自覚』があり『待望の状況』があって，そこへキリスト教やカルトが解答をもたらした」[速水 2002：265] というキリスト教受容の論理がはたらいていた。

しかしながらここで注目すべきは，この伝承とカレンによる待望が当時，カレンとは新約は知らずとも旧約をどうやら知っている民であると宣教師側に受け取られた，という点である。最初の改宗者コー・タービュー（Ko Tha Byu）[18]を得てわずか5年後には，「旧約聖典の民カレン」が，メイソンによって確信を持って語られている。メイソン（Francis Mason 1799-1874）は英国ヨークの出身であり，1818年に米国に移住し1830年にジャドソンの出身校，マサチューセッツのニュートン神学校（Newton Theological Seminary）を卒業し同年に来緬している。当初タボイに駐在したが，1852年以降はタウングーを拠点とした。そして1874年に，ラングーンで逝去した［Mason 1870；Shavit 1990：338］。

メイソンは1833年，英領テナセリム地方の行政弁務官のメインギー（N. D. Maingy）への書簡のなかで「ヘブライ末孫の一部の発見」について語っている。その証拠として，タボイ地方のカレンから収集した「カレンの伝承（Traditions of the Karens）」を「I. 聖書についての伝承（Traditions of Scripture Tracts）」，「II. 聖書の教義についての伝承（Traditions of Scripture Doctrine）」，「III. 彼ら

18　Ko はビルマ語で同年配・年下の男性に冠する敬称。Ko Tha Byu は諸種の研究書ですでに固有な人名としての扱いを受けているが，ジャドソンによる最初の言及では「マウン・タービュー（Moung Thah-pyoo）」と表記されている［The Board of Managers of the Baptist General Convention 1828：234］。Moung（Maung）もビルマ語の男性につける，どちらかというと謙った敬称。

に関する民族としての伝承（Traditions concerning themselves as a nation）」の３種に分類して詳述している。III に収められた「漂泊の民族（A Nation of Wanderers）」という一節では，「ユダヤ人は神の選民であり彼らはその不服従によって呪われたが，それでも神は再び彼らに初めの恩顧を与えるだろうという信仰に疑いはない。そしてカレンが自らについて信ずるところのものも，正確に同様なのである」とする。続く「イェホバ（Jehovah）」の節では，「カレンのユワ（Yu-wah）がヘブライ人のイェホバであるということは，理性的にみてほとんど疑う余地はない」とまで断ずる［Mason 1834：328-393］。

旧約の神をあらわすこの語が実際にはどのように発音されていたかは不分明ではあるが，古代のギリシャ語では Ye-ho-wah と書かれていた。そして中間の音節が欠落して Yu-wah になったのだとする。メイソンによるこの伝承についての記事はコー・タービューの死去を契機に編纂された彼の伝記［Mason 1843］の巻末にも再録され，さらに50数年後の英人植民地官僚スミートンの著書でも再掲されている［Smeaton 1887：239-264］。

現在すでに，カレンのヘブライ起源説は真剣な検討対象とされることはなくなってしまった。しかし，旧約の民であり長い遍歴を経てこの東南アジアの片隅に到達したというカレンの過去についての理解は，植民地期をとおしてあまり疑われることはなかった。20世紀半ばに，この説に懐疑的な人類学者が「カレン」についての主要な記述者となるまでは，広範囲に流通したカレン理解であった。そしてこの点において，ソオ・アウンフラが問う３つの問いのうち，「プアカニョウの祖先は誰であるのか」そして「彼らは本当はどこから来たのか」という最初の２つの問いへの答えは，すでに，宣教最初期に，ソオ・アウンフラの望むかたちで出されていた。

第２節　民族の外郭―ウェイドによる文字創案と言語誌

宣教最初期に形成されたカレン知には，以上のような起源に関する理解とともに「カレン語」がふくまれていた。具体的な宣教の営みは，それが何語であろうとも，ことばを介してしか行われえない。そして文字が新たに創出されると，そこでは民族の境界が意識される契機も高まる。

一足おくれてデルタ地方でカレンに対する宣教活動をはじめたカトリックでは，もっぱらビルマ語を宣教手段とした。だがバプティスト宣教では，文字を持たない（あるいは，かつてそれを失ったとされる）カレンに対して文字を創案するところから始めた。そこで重要な役割を果たしたのがウェイド（Jonathan Wade 1798-1872）である。彼は多くのビルマ宣教の導師を輩出した米国ニューヨーク州のハミルトン神学校（Hamilton Theological Seminary）の最初の卒業生で，1823年に来緬している。第１次英緬戦争の開戦時にビルマ側に捕縛されたものの英軍に救出され，1827年にモールメインに着任した。途中アラカンなどにも駐在したが，1872年に逝去するまで大部分，モールメインを拠点とした［Madison University 1872；Shavit 1990：511］。

バプティストの宣教師らもカトリックと同様，当初，すでに彼らに馴染みの深かったビルマ語を仲介手段として，カレンらにビルマ語を教えたうえで，宣教活動を展開することを考えていた。こちらのほうが経済的な手法であるといえた。しかし，彼らが失われた本に関するカレンの伝承に行き当たって，カレン語で書かれたことばの「象徴的な価値」は明らかになった。ウェイドはあるカレンの古老にくだんの伝説の本を携えてきたかと尋ねられ，すぐにスゴー文字の考案に取り掛かったという。このようにして1832年，ウェイドによるスゴー文字はビルマ語字母体系をわずかに改変して考案された。それは当時，宣教団印刷局での印刷に使われていたビルマ語活字を流用できるようにという要請が

あったためであった［Womack 2005：93-97］。

他方，ポー語の正書法確立は遅れた。1830年代にやはりウェイドによってポー文字が発案されていたが，スゴー語に比べてポー語は方言差がおおきく，とくに東部のテナセリム地方と西部のイラワディ・デルタ地方では互いに意思疎通ができないほどに異なっていた。さらに1852年の第２次英緬戦争頃までバプティスト宣教師の主たる活動域となっていたテナセリム地方内ですらも，ポー語の方言差はおおきかった。1836年に最初のポー宣教が開始されたモールメイン近郊のドーンヤン村，1839年にブレイトン（Durlin L. Brayton）が初めてのポー専属の宣教師として赴任したメルギーやタボイなどの地区で，おのおのの方言差を反映して少しずつ異なる書法が採用されていた。ブレイトンによってウェイド文字を改良したポー文字が，正書法として正式に採用されたのは1852年であった［*ibid.*：109-120］。

初期のポー宣教は専ら東部テナセリム地方で行われたが，19世紀半ばにイラワディ・デルタに宣教拠点が築かれるとポー文字は急速にその地のポーの間に広まった。これにたいして東部ではその後あまり使われず，現在ではこのブレイトン改良のポー文字を「西のポー・カレン文字」と呼んで，東部地域で使用者人口のより多い「仏教ポー文字」（東のポー・カレン文字）と区別されている［加藤 2001b：334］。

カレン語辞書の編纂と出版は，コー・タービュー改宗後20年ほど経ってからであった。辞書は民族語の語彙目録であり，民族知識編纂の第一歩でもある。だが，最初のスゴー語辞書（スゴー語＝スゴー語辞書）は，語彙の集成という通常の辞書の性格を越えて，まさにカレンに関する知識の百科事典的な集大成を企図したものであった。『カレン知識の宝典（Thesaurus of Karen Knowledge）』（以下『宝典』と略記）の第１巻［Wade 1847］は，ジャドソンによる正式なビルマ語辞書[19]の

19　ジャドソンによるはじめての緬英辞書［Judson 1826］は1826年の第１次英緬戦争

出版に先立つ1847年，「ソオ・コートゥー（Sau Kau Too）執筆，J. ウェイド編纂」によって，タボイの宣教団印刷局から出版されている。1850年にかけて毎年１巻ずつ続巻が出版され，計４巻3,243ページの大著となった。正式タイトルには英語で「伝承，神話あるいは寓話，詩，慣習，迷信，鬼神信仰，民間施療などから成る，字母順に整序され，完全なるカレン原語辞典たる，定義と用例を備え，すべての語彙について活写したるところの，カレン知識の宝典」と記してある。

序言によると『宝典』は，まず「モールメイン県のすべてのカレンを管轄する現地人主席治安判事であるソオ・チェッティン（Sau Chetthing）の助けを借りて」，ウェイド自身がビルマ語辞書からスゴー語に翻訳した手稿が編纂の最初の出発点となっていた。この原稿はやはりモールメインのカレンであり説教師であるソオ・パンラー（Sau Panlah）を助手とした改訂作業を経て，その後にメイソンや他の宣教師たちが現地カレン人の書いた手紙や書類・書物から収集した語彙が統合され，ソオ・コートゥーのもとに送られた。そしてソオ・コートゥーそのひとが各語彙に定義を行い例文を付加して執筆し，ウェイドは一連の辞書編纂事業の総監修をした[20]。特筆すべきは，文字を持たなかった（あ

の際に，カルカッタに避難していたセランポールから贈呈された印刷機を使って，ウェイドの監修によって出版された。ビルマに遠征する英軍の便宜に供するためという実際的な要請があり，ベンガル英政府が資金を供与した。しかし，当時アヴァに抑留されていたジャドソンはこの辞書出版に不満であったらしく，1849年の英緬辞書［Judson 1849］とその死の翌々年の緬英辞書［Judson 1852］をもってして「初版」をうたっている［Quingly 1958］。

20　しかし当時のウェイドの健康状態を考えると，「J. ウェイド編纂」なるタイトルの一句はウェイドのカレン語事業への貢献を称えて冠されたと考えるべきであり，実質的にはこの辞書の大きい部分がソオ・コートゥーの労力から生まれてきたものとすべきであろう。1849年に出版されたウェイドの『語彙』序文には，1842年に始められたこの辞書の執筆・編集作業が，ウェイドの健康状態の悪化により中断を余儀なくされたことが述べられている。カレン語字母「y」まで至ってとりあえず，

るいは失ったとされる）カレンの間に口碑されて，その慣習や伝承，歴史を多く盛り込んだ韻律詩歌である「タァ《thaa》」が多数収録され，のちにソオ・アウンフラもそのカレン史において参照していることである。

こののち1849年には，最初のスゴー語＝英語辞書である『スゴー・カレン語の語彙（A Vocabulary of Sgau Karen Language』［Wade 1849］が『カレン知識の宝典』を底本にして，いわば英語解説を加えた同書の縮刷版のような体裁で出版されている[21]。さらに，1883年にウェイドによる英語＝カレン語辞書［Wade 1883］，1896年にはクロス（C. B. Cross）によってウェイドのスゴー語＝英語辞書が改訂出版された［Wade 1896］。また，スゴー語の最初の本格的な文法書［Mason 1846］は辞書に先立って1846年にメイソンが出版し，ウェイドも1861年に外国人学習者向けの文法書［Wade 1861］を出している。

スゴーとポーという２系統の正書法の確立過程はすなわち，カレンという民族を構成すべき２大要素としてスゴーとポーという下位語族があるという観念が認識論的に確立していった過程であった。初期の宣教過程で宣教師たちが出会った諸種の言葉が，そもそも同一言語の方言として位置付けられるべきものか否という論争は長く収束を見なかった。スゴーとポーが同一系統のカレンという言語に属しているという認識の一致に，現場の宣教師らが到達したのは1840年代のことである［Womack 2005：116］。スゴーとポーという構成要素の確定とともに，多様な偏差を含んでまとまりがなかった言葉の広がりにカレン語という名称があらためて確認され，その偏差のある特定の部分を方言と定義

表紙も奥付もない四つ折り判324ページの冊子として1843年に印刷された［Baptist Missionary Magazine（The Board of Managers of the Baptist General Convention）1844：19；Rhodes 1955］。しかし1846年から始められたこの辞書の正式版編集作業の途中で，印刷局担当宣教師ベネットの夫人にその作業は委託されざるを得なかった。

21 『語彙』の見出し語各項目にはカレン数字（ビルマ数字と同様）で番号が付されており，これが『宝典』の見出し語の番号に対応する仕組みになっていた。

しうる中心がモールメイン地方のカレン語におおむね設定され，そしてカレン語の外郭が基本的に画定されることになった。それとともにカレン語語彙が目録化され，文法構造が他言語とは異なる独自なものとして記述されていった。バプティスト宣教の最初期においてまず，「カレン」は言語的に民族として析出されたのであり，歴史的にはソオ・アウンフラの「独自の文字・言語」に関する第３の問いへの答えは，すでに宣教最初期に与えられていた。

第３節　民族知識の体系化――メイソンの博物誌

カレンとのあいだに濃厚に積み重ねられた30年の時間とテナセリム地方という場をとおして，カレンについての民族知識をはじめて体系的にまとめたはメイソンであった。1860年に出版された『ビルマ，その民と自然産物（Burmah, its People and Natural Productions）』［Mason 1860］には，宣教当初以来のヘブライ起源説を根幹として，カレンを民族として体系化したまとまりのある記述がふくまれている。

カレン宣教は1826年に英領化されたテナセリム地方を地盤として，1828年にコー・タービューという最初の受洗者を得てから，この領域内のカレンに対する教化が深められていった。同時に，第１にコー・タービューは洗礼の２年後にはすでにタイ側のカレンに伝道を志して，テナセリム地方を越えて王朝領を広範に移動していた［速水 2002：270］。第２に，テナセリム地方と同年に英領となったアラカンにも宣教拠点が築かれ，そこから1840年代には当時王朝領であったデルタにカレン宣教が始められていた。このように英領外への宣教活動は，コー・タービューや２人目のカレン受洗者であるソオ・クワラ（Sau Quala）などのカレン人伝道師や助手によって行われ，彼らのもたらした情報によってメイソンたちはやがて，カレンのビルマでの故地がタウングー（Toungoo）東方の山岳地方にあると理解するようになった。1837年にはすでに，

メイソンはウェイドと連れ立ってサルウィン川からユンサリン川をさかのぼり，タウングーを訪れようと画策していたが，シュウェジン（Shwegyin）まで至って高い山脈に阻まれて断念したという［Shwe Wa 1963：180］。第２次英緬戦争後の1853年に下ビルマ全域が英領となると，メイソンはソオ・クワラを伴ってまっさきにタウングーに赴き，そこに宣教拠点を開設した。そして７年後，カレンの「核心地域（heartland）」［*ibid.*］としてのタウングーでの知見を盛り込んだ，この博物誌が出版されることになった。

初版は1852年に出版されており，『ビルマの自然産物（The Natural Productions of Burmah）』［Mason 1852］と題されて主にテナセリム地方を対象としていた。しかし，同年に下ビルマ全域が英領化し，米人宣教師の活動範囲も広がったためにその後の知見，そして「民族（ethnology）」に関する項が加えられて，1860年に増補版としてこの第２版が編まれた。追加された民族に関する記述のうちカレンに関するものは，1858年に『ベンガル・アジア協会誌（Journal of the Asiatic Society of Bengal）』に発表された論文［Mason1858］を中核にしている。また，メイソンの死後1883年には，テオバルド（W. Theobald）によって大幅に加筆・修正を加えた第３版［Mason 1883］が２巻組みで出版されている。

ソオ・コートゥーとウェイドの『宝典』が言語誌的な関心に基礎を置いているのに対して，メイソンによるこの書物は，「ある聖書翻訳者（メイソン）の経験した要請」［Mason 1860：v］から発出して，下ビルマに産したあらゆる事物を博物誌的に網羅しようという意思が動機となっている。初版序文の冒頭には，「我らが救い主の御心と似姿は，主の御手によってかたちづくられた地上の自然の造物から絶えることなく溢れ出で，『世界の創世より主の見えざる御意思は，造物されたものを通して明らかになり理解することが出来る』」とある。この啓蒙主義的な世界観に端的に表現されているように，メイソンの経験した「要請」とは被造物としての自然に刻印された「神のみことば」を読み

解くということであった。民族から慣習，言語，あらゆる生物や鉱物などを対象とする博物誌として編纂されており[22]，「民族（ethnology）」の項にサブグループ分類や慣習，伝承を含んだカレンの概説，「鬼神信仰と仏教（demonology and Budhism）」にカレンの精霊信仰，「言語（glossology）」にポーとスゴーを基本分類としたカレン語，そして後半を通じて列記されるもろもろの生物，鉱物などの目録にカレン語名称がこと細かに付されている。

『ビルマ，その民と自然産物』は下ビルマ全域を対象としているものの，「くにの相貌」，「民族」，「鬼神信仰と仏教」，「言語」など，著書表題の『その民』にあたる著書前半各章の中心はカレンに関することである。メイソンのこの書物以前には，これほどのカレン知の総合のこころみは見いだせず，やはりソオ・アウンフラにその問いの答えを提供して，なおかつ現在の民族としてのカレン理解の基本的枠組みをかたちづくったのはメイソンであった。そうはいっても，注意を要するのは，メイソンに帰するべきは総合化という点にあって，個々のカレン知識の出所は多様であることである。ソオ・アウンフラの基本的問いに関係しては，第４章「カレン」に，ソオ・アウンフラの記述と一致する事柄が見出せる。

メイソンは，第１に，その通俗的な集団分類とカレン（Karen）なる語の起源について以下のように言う。すなわち，カレンとは「ペグーと南部ビルマの

22　目次が付されておらず，章番号が付されている箇所といない箇所がある。主な内容は，第１章にあたる「くにの相貌（Face of the Country）」，「民族（Ethnology）」としてくくられる第２章「タライン（Talaing）」，第３章「ビルマ（Burmese）」，第４章「カレン（Karen）」，そして第５章「鬼神信仰と仏教（Demonology and Budhism）」，「言語（glossology）」，「哺乳類（mammalia）」，「鳥類（ornithology）」，「魚類（ichthyology）」，「爬虫類（herpetology）」，「昆虫（entomology）」，「貝類（conchology）」，「植物（botany）」，「地質（geology）」，「鉱物（mineralogy）」，「発展の理（Law of progress）」，「ペグー管区の発展（Progress of Pegu）」，「類別目録（catalogues）」である。

大部分の山地居住者に与えられたビルマ語の名称」であり，衣服の色から白カレン／赤カレン／黒カレン，民族的な親近性からビルマ（Burmese）カレン／タライン（Talaing）カレンと分類される。また，シャン語では彼らのことをYangと呼び，ビルマ語の発音ではYenとなり，赤カレンは自身をKaya，ブゲェー（Bghai）[23]は自身をKayayと呼ぶ。これらの語はビルマ語の「最初（prior time）」の意であるAyen（ayin）か「基底，基礎（bottom, foundation）」の意のAyen（ayîn）から派生したものかもしれなく，kaは原初的接頭辞（primitive particle）[24]であり，したがって総体としては「原住民（aboriginal）」を意味する。しかしメイソンは，カレンをビルマの「原住の住民」ではないと断ずる［Mason 1860：71］。

第2に，カレン自身の起源としては，その故地を，入緬後はタウングーに存しそれ以前ははるか北方の「流砂の河（the river of running sand）」のむこう，とする言い伝えがカレンの間にあると彼の「初期の旅行」での経験を引用している［*ibid.*：72］。そして，メイソンはカレンの起源が離散したユダヤ人に結びついていると主張する。たとえば赤カレンの口碑が旧約聖書の一節に酷似していること，したがってカレンが新約聖書の成立を待たずして「かの地」を出立したこと，カレンの間に流布される「失われた本」の伝説の一件，中国のユダヤ人コミュニティとの類似点などを考察して，カレンが「聖典の民」であるとする［*ibid.*：72-75］。

そして第3に，メイソンは以上をふまえた上で，妥当なカレンとその部族分類を定義しなおしている。カレンとは「広く異なった方言が話されているもの

23　Bweとも綴る。藪方式の翻字では《bhgê》

24　あるいは単に「語根小辞」の意か。後のマーシャルの書では，スゴー自称の「プアカニョウ（Pgha K'Nyaw：本稿での表記はpgaMkaňô）」を分解してK'をKachin，Kethe，Karokなどに見られる「民族名の接頭辞（prefix）」とする［Marshall 1922：8］。

の，ひとつの言葉を持っているという共通の紐帯（the common bond）によって結合した，いくつかの異なった部族集団（tribes）に与えられた名前」であり，このような言語上の区別として，スゴー（Sgau），ブゲェー，ポー（Pwo）という３つの部族集団を示しており，ソオ・アウンフラのカレンの基本３支族の分類がここに起源を持っていることがわかる。さらにその下位にいくつもの部族（tribe）を列挙し解説を施している［*ibid.*：77-96］のもよく似通っている。一つ目に Sgau としては Sgau, Paku, Wewa, Maune-Pgha，二つ目に Bghai として Tunic Bghai, Panti Bghai, Lay-May, Manu-Manu, Red-Karens，三つ目に Pwo として Tunic Bghai, Panti Bghai, Lay-May, Manu-Manu, Red-Karens がふくまれている。とくに興味深いのは，今日別個の語族集団とされるチン（Khyen，現代語表記では Chin）が Pwo に含まれることである。ソオ・アウンフラはチンに加えてカチン（Kachin）も同様にポーに含めている。また，スゴー，ポー，ブゲェーという上位分類こそ異なっているものの，ここで示された下位分類は後の英政庁による言語調査［Government of Burma 1917など］や人口調査［1931 Census など］にも引き継がれていった。

先に記したとおり，ここに記した理解全てがバプティストによって発見されたわけではない。上記の第１の点は，メイソンが周囲のカレン人やビルマ人から採取した，当時の現地社会におけるごく常識的な理解であり，1929年のウー・ピンニャによるカレン史書でも白／赤／黒のカレン，ビルマ／タラインのカレンという区別を挙げている［池田 2009：99-100］。このうち「赤カレン」は今日でも常用され，「ビルマ（ミャンマー）・カレン」「タライン（モン）・カレン」はいささか古めかしく聞こえはするものの，それぞれ「スゴー」と「ポー」に対応していることは通用する。ミャンマー／タライン・カレンの区別は，1755年にイギリス東インド会社よりアラウンパヤー王のもとに派遣されたベーカー大尉によっても「ミャンマー／ペグー・カレン」として，すでに言及されている［伊東 2006b：27］。ちなみにモンは18世紀の西欧人の史料では Peguan とし

て言及される。

また，ビルマ語他称から派生したKarenという語の起源について，メイソンは後に『ベンガル・アジア協会誌（Journal of the Asiatic Socitety of Bengal）』の1860年代後半の巻に更なる解説を発表していたという。それによれば，ビルマ人仏教徒はカレンの語源をパーリ語のKirataに見出している，ビルマ人の手になるパーリ語辞典にはその語が「山岳民，あるいはインドのアウト・カースト」として記載されている，またウィルソンのサンスクリット辞典［Wilson 1819］でも「森や山地に住む蛮族，野蛮人―the Kinhadae of Arian」となっているという［McMahon 1876：45-46］。興味深いことにこの解説は，ウー・ピンニャによる「カイン」という民族名称の起源に関する３つの説明のうちのひとつとほぼ同じである［池田 2009：98-99］[25]。

以上のようにメイソンは，カレンに関する知識の源をカレンのみならずビルマ人仏教徒にも求めていた。そして，それら現地社会の通俗的な理解を踏まえて，彼の持っていた言語学的，宗教学的，民族学的な知識の枠組み・基準によって編集し整序した。さらにカレンの民族的起源をディアスポラのユダヤ人に結びつけることによって，聖書的な伝統に連なる人々という性質規定を付与した。

第４節　バプティストによるカレン知識の位置づけ

このようにして19世紀前半，従前とは全くことなる，輪郭線が明瞭で構成要素がはっきりとした，きわめて膨大な情報量に富んだカレンに関する知識がバプティスト宣教師によって生み出され，のちの時代に継承された。それまでのカレンに関する知識は，上ビルマに拠点をもって彼らを孫支配した王朝，ある

25　ウー・ピンニャがマクマホンの著書を参照したわけではなく，カインの語源をKirataに求めることが，当時のビルマ社会における僧侶などのパーリ語知識人に一般的な事柄であったと解釈すべきである。

いは王都にいてそれをおもに伝聞で知っていたイタリア人宣教師，旅行者としてその傍らを通り過ぎつつその記録を残した英人使節らによってかたちづくられていたが，バプティストのカレン知は長期的かつ不断の接触のもとに蓄積されたものであり，ある種の深みをともなって多義的であった。

この点において，バプティスト史料の意義と限界も見出すべきであろう。バプティスト宣教以前の西洋人の記録における「カレン」からは，その呼びかけに対して一様な応答はなされていない。むしろそこに読み取るべきは，英人やイタリア人自身の対王朝観であった［伊東 2006a：34］。これらの記録を断片的であると評価する理由もここにある。ひるがえってバプティストの史料には，宣教師自身のカレン観というフィルターを通しつつも，宣教師とは異なるところでキリスト教を受容したカレンの主体性や，受容に先立ってカレンらが従来の「カレンの」ネットワークを利用して地域を超えて結びつこうとした痕跡［速水 2004：219］，そしてなによりも宣教を媒介として水平的拡大の運動をともなって「カレン」として応答し，名乗っていった過程が初めてあらわれる。

カレンについての民族観は，布教の過程で徐々に形成されたというよりは，バプティスト宣教が始まった最初期からすでに宣教師のまなざしのなかにその原型が存在していた。それは，カレンが旧約聖書の伝統より派出したビブリックな民族，英語で nation や race，tribe という語彙のもとでくくられる他とは異なった言語や歴史を保持した民族であるという理解であった。この理解に輪郭をあたえ内実を満たしていく際に重要な役割を果たしたのが，ウェイドとメイソンというジャドソンに続く宣教最初期の２人の米人宣教師であった。カレン知は，第１次英緬戦争で英領化したテナセリム地方に住むカレン語話者たちを標準として見いだされ，蓄積され，体系化された。

ただ，このようなカレン理解の細部彫塑についてウェイドとメイソンの果たした役割を強調しすぎるべきではなく，カレンのものとされる神話，慣習，言語，歴史などについての知は，総体としては，19世紀半ばまでにカレン自身と

宣教師の協働作業によって紡ぎされたものと考えるべきであろう。宣教史書で賞賛を込めて記述される彼らの功績の背後には，ほとんど無名のカレン人の伝道師や助手，教会員による，この２人の業績に匹敵する労力もうかがわれる。ここに光を当てれば，米人宣教師に主導されてきたと描かれるバプティスト布教史観とは大いに異なったカレン側の主体性が見えてこよう［速水 2002；2004］。これについては今後の研究の進展に期待したい。

ソオ・アウンフラがその著書冒頭に問うた３つの問いのうち，カレンの起源に関する２点は，すでに1830年代の宣教最初期にこたえられていて，それにつづくテナセリム地方での宣教活動の実績が積み上げられるにしたがって，ソオ・アウンフラの問うた第３の点，つまりカレンの文字や言語，宗教，文化，フォークロアや伝統が見いだされ，「再確認」されていった。だが，ソオ・アウンフラはメイソンの著書を文献表には載せていない。メイソンが1860年にまとめた基本的なカレン理解は，マクマホンやスミートン，マーシャル（いずれも後述）のカレンに関する代表的な書物に引き継がれ，ソオ・アウンフラはそれらを読んだ。この点でソオ・アウンフラは，19世紀以来のバプティスト宣教の正統的カレン理解の継承者であったといえる。

このように，宣教の進展とともにカレン諸語を話す人々に固有の特徴，カレンという民族に内包され満たされるべき知識は蓄積・編集され整序・体系化された。同時に，そこで紡ぎだされた「カレン」が印刷・出版というテクノロジーによって斉一的に再生産され，頒布され，共有されていき，ある方向性を持った民族として定着していくプロセスも進行していく。出版という機制がカレンに付随されるべき文化を実体化していき，ぎゃくにカレンの民族的存在の確かさを証言していくようになる。では，19世紀前半に確立したバプティスト製のカレン知は，その後どのように受け入れられ流通したのか。

第４章　カレン知識の流通と受容（19世紀）

19世紀前半のテナセリム地方のバプティスト宣教において形成されたカレン理解が，そののち，ビルマ内外に流通し受容されるようになる。まずは植民地化が進展した19世紀のビルマを主たる範囲として，いくつかの側面を検討してみたい。つまり，カレンの知識がいかに書物などに書き留められ記録されたのか，カレン自身はその知識をどのように受け止めたのか，周囲の英人やビルマ人らはどのようにカレンを見て，どのような関係を持ったのか，などの点である。

第１節　カレンをめぐるバプティスト出版物

19世紀前半のテナセリム地方で形成されたカレン知識は，おもに書物を媒体として地域と世代を超えて伝達されていった。カレン宣教から発した書物は，現地で宣教を主要な用途として生産された印刷物と，それ以外，とくにビルマの外側にカレン知識として伝わったものの２つに分類できる。以下，おのおの概観してみる。

第１の類型の書物は，スゴー・カレン文字が考案されたのち，すでに教団に備わっていた印刷部局が主体となってすぐに印刷が始まっている。ビルマに導入された最初の印刷機は，インドのセランポール（Serampore）に拠点を置いた英国バプティスト宣教団によってジャドソンらに1816年に贈呈され，ジャドソンが用意したいくつものビルマ語聖書の原稿がこれによってラングーンで印刷された。第１次英緬戦争後に宣教団本部がテナセリム地方に本拠を移されてのち，1830年代に米国からさらに数台の印刷機が導入された。タボイとメルギーのカレン宣教が活況を呈し，1837年にはタボイにカレン語出版を主とした宣教

団印刷局が開設され，1855年にモールメインの宣教団印刷局に統合されるまで中心的な存在となった。第２次英緬戦争後の1862年，さらに印刷局はラングーンに移設されてそれ以降，この地に置かれた［Shwe Wa 1963：123-126］。

モールメインやタボイ，のちにはラングーンやバセインの教団印刷局で刷られた初期の印刷物の多くは，賛美歌集や聖書，そしてスゴーやポー，英語などの文字教本や科学の教科書といった，宗教的あるいは教育的な内容の書物であった。ウェイドによってスゴー文字が考案された1832年に最初に印刷されたのが，６ページの宗教的内容の小冊子（tract）と32ページのスゴー文字習字の本であったというのは象徴的である。

こころみに宗教的印刷物をみてみよう。タボイでは1836年までにマタイ福音書と100篇ほどの賛美歌の翻訳草稿が用意されているのみであったが，印刷機が設置されて翌1838年にはマタイ，ヨハネ，ルカの各福音書，讃美歌集（320ページ）などが，1843年までに新約聖書の完訳2000部，旧約聖書の摘要（840ページ），賛美歌補遺集（128ページ），児童書（154ページ）などが，さらに1853年までには完訳聖書（1,040ページ），教会史（468ページ），他にも植物誌や天文学，幼児読本から高度な数学書にいたる諸種の教科書が出版されている。また，ポー語聖書の出版に関しては，ウェイドやバラード（Edwin Bullard），メイソンが1830年代から1840年代にかけて聖書の翻訳を試みており，1847年にモールメインでバラード訳の使徒行伝500部が印刷されていたという。ポー語新約聖書完訳の初版は1852年にタボイで刷られ，新旧聖書の完訳は1878年，出版はラングーンで1883年になってからであった［Zan, U. and Sowards 1963：312-314；Beaver 1963：334］。

これらの宗教的・教育的印刷物のなかに，カレン民族の来歴や文化，伝統などの記述がどのていど含まれていたかは，まだカレン語一次史料にもとづいた研究はすすんでいない現状のゆえに詳細がいまだ不明である。だが，このようなカレンの民族としての自己主張が含まれている可能性のある印刷物となる

と，ごく限られてくるはずで，わけても注目すべきはカレン語の定期刊行物である。

カレン語による最初の定期刊行物は，『モーニングスター（*The Morning Star*）』という，メイソンによってタボイで1842年に創刊された月刊誌であった。モーニングスターは当初，スゴー語とその文字による記事とともにポー語・ポー文字の記事も併載されていたが，1850年にスゴー語の専門誌に再編され，ポー語誌として『インストラクター（*The Instructor*）』が1851年にモールメインで創刊されている［Womack 2005：121］。モーニングスターは，この後1962年にネーウィンによる軍事クーデターの折に廃刊されるまで120年にわたって刊行され続けた［Shwe Wa 1963：123-124］。両誌ともに現地では散逸してしまっている。断片的コレクションは現地で個人や教会などにわずかに所蔵されているほか，大英図書館などでも見ることができる。最もまとまったコレクションは米国バプティスト宣教団の文書館に保管されているが，ほとんど調査・研究の手が入っていない。

以上のような第１の類型の印刷物は，より直接的に宣教の手段として編纂され使用されたものであった。現地の教団印刷局で活字化された印刷物を概観してみれば，宣教における人的・経済的・時間的資源の最も大きな部分がこの事業に投入されてきたのは容易に見て取れるところである。書籍の編纂と出版，そこから生まれた聖書や宗教的印刷物による教化，そして文字教本や数学・地理・科学などの教科書による教育を通した宣教の営為こそが，バプティストの活動の核心であった。同時に，かように確実に漸増していくカレン語の印刷物の蓄積それじたいもまた，カレンという民族の存在証明として機能してきた。

第２の類型の書物群は，以上のようなカレン宣教を，おもにビルマの外の世界へと伝えるために書かれた諸種の記録である。これもまた，便宜的に３つほどのグループに分けて，20世紀の範囲にまでひろげて概観してみよう。

第１は本国宣教団本部の刊行物や報告書であり，宣教師からの諸種の手紙や

報告が毎月まとめられていた『バプティスト宣教雑誌（*Baptist Missionary Magazine*）』などの宣教雑誌や年次報告書などであった。これらの記事の元となった報告書の類はマニュスクリプトとして本部付属の文書館に収められている。宣教雑誌には当初拠点となったモールメインやタボイでの活動や，そこから多くのカレンが散居する後背の山地への宣教旅行，マタ（Mata）のような宣教モデル村の様子，印刷に付された書物のリスト，カレン人説教師の活動など，多岐にわたる報告と手紙が雑多に掲載された。

第２は，宣教地でのカレンの知見を蓄えた宣教師によって当時の学界研究誌に報告された論文や，20世紀に入ってからは本国の神学校や大学機関に提出された学位論文［Marshall 1922；Lewis 1924；1946；Hackett 1953；Truxton 1958など］，そのほかの学術書籍である。研究誌としては*Journal of the American Oriental Society*（*JAOS*）や*Journal of Indian Archipelago and Eastern Asia*（JIAEA），王立ベンガル・アジア協会誌の*Journal of the Asiatic Society of Bengal*（*JASB*），20世紀にはいるとインド高等文官（ICS）であったファーニバル（J. S. Furnivall）らによって刊行された*Journal of Burma Research Society*（*JBRS*）などがあり，とくにJASBについては1850年代からメイソンの論文が幾度も掲載さている。

これら２つの種類の文献は所蔵・保存の様態からして一般読者のアクセスが若干難しい。これらの資料の多くが再発掘されるのは，カレンやビルマをテーマにした戦後の人類学者や政治学者・歴史学者によってであった。

第３は宣教師の伝記やメモワールの類，あるいは地域拠点別の宣教史などであり，すでに宣教開始直後から英語で発刊されはじめ，20世紀をとおして今日にいたるまでその出版は続いている。とくに米国の海外宣教史上，最初にして最大の成果をビルマのカレンのあいだで勝ち得た宣教の英雄として，今でも賞賛の対象にされているジャドソンとその妻・後妻らの伝記［Knowles 1829；E. C. Judson 1848；Willson 1853；Wayland 1854；Conant 1861；Kendrick 1860；

Edward Judson 1883；Anderson 1956；Hall 1961；Pearn 1962など］は多い。ほかにも早世のボードマンの伝記［King 1836］，ウェイドについて［Wyeth 1891］，メイソンに関するもの［Mason 1870；E. H. B. Mason 1874］，そして宣教史としてはタウングー［E. H. B. Mason 1862；Bunker 1902；1910］，デルタ［Carpenter 1883］，シュウェジン［J. E. Harris 1894］，カレン一般への宣教史［A. H. Judson 1827；Harris 1920；D. A. W. Smith 1922；Houghs 1926；Howard 1931；1942；Shwe Wa 1963］などがある。

第２の類型の書物にはさらに，宣教師や見聞者が書き記した多様な報告書や小説，エッセー，そのほかの書き物が含まれているがここでは割愛する。既述のとおりこの類型の書物はおおく，ビルマ外世界にカレン宣教を伝えることを目的に書かれたものである。したがってそこにはカレンという民族集団の特徴を，それを知らない人にむけて表現しようという機制も働きやすく，この書物群におもに依拠して「カレン」が語られ研究されてきたといっても過言ではない。

第２節　宣教と知識の受容

では，19世紀の宣教過程において，宣教される側で「カレン」と日々名づけられていった人々は，自らのことをいかに認知していたのか。そしてそこで紡ぎだされる「カレン」の知識をいかに受け止めて行ったのか。

結論から言えば，このような観点からの研究はいまだなされていおらず，不明な部分が多い。その最大の理由は史料的制約であろう。上に概観したバプティスト史資料群はほとんどが宣教する側による記録であり，そこには宣教される側の発言や表出が含まれているとしても些少であり膨大な報告書の記述に埋没しているケースが多く，宣教師の視線のフィルターを通過したものである。あえて宣教される側の人々の思いが読み取れる史料があるとすれば，うえに触れた『モーニングスター』や『インストラクター』，のちに刊行される『牧羊者

(Shepherds)』などのスゴー語，ポー語の定期刊行物であろう。20世紀に入ると寡黙な19世紀カレンとはうってかわって，カレン自身の発信が記録として残り始める。ソオ・アウンフラのカレン史出版もその一環であると解釈でき，これは第５章で触れる。

問いには直接答えられないとはしても，19世紀をとおしてバプティストの信仰を受け入れた人々はどのように組織化されたかだけでも検討はすべきであろう。ここでは教育やカレンとして活動を積極的に開始した契機について触れておく。

1828年に最初の改宗者を出してから，学校は教会とともにカレン宣教の両輪のひとつであった。当初は，米人宣教師の手足となるカレン人の説教師や教師の養成と，急増する改宗者のコミュニティの教導という目的で教育が行われた。村落での改宗者は一ヶ所に集住することが奨励され，1830年代にはタボイ郊外に，このようなキリスト教徒のモデル村が早くも開かれている。マタ（Mata）[26]と名付けられたこの村は，1838年に50戸300人ほどの村で，80～100人の生徒が基礎的な読み書きを学んでいた。

また，メルギー，タボイそしてモールメインなどの宣教拠点には師範学校（normal school）が設置され，マタのような村落学校（village school）で見込まれた生徒が寄宿舎生活を送っていた。1843年にベネット（Cephas Bennett）が校長となったタボイのカレン男子寄宿舎学校（Karen Boys Boarding School）には40人の生徒がおり，1844年には70人になっていた。このうち57人がスゴー，13人がポー，そしてクリスチャンは20人だった。主に聖書とカテキズム（教理問答）が教えられていて，教科書はカレン語訳された『学童講義（*Lectures to Children*）』，『暗誦算術（*Mental Arithmetic*）』，ヘレン・メイソン（メイソン夫人）の『地理（*Geography*）』，ヴィントン夫人の『学童の書（*Child's Book*）』，デボラ・ウェイド（ウェイド夫人）の『聖典史入門（*Catechism of*

26　ビルマ語の Myitta（myi'ta 慈愛）から名付けられた。

Scripture History)』などであった。他にもほとんどの生徒が英語を学んでいた［Womack 2005：97-104］

1845年にはモールメインにカレン神学学校（Karen Theological School）が開校し，1853年にラングーンのアローン地区に移設されるまで，バプティスト教育機関の最高学府として機能した。この実質７年ほどのあいだに，60人の学生が学び，その３分の２がラングーンとバセインの出身者であったという［Shwe Wa 1965：122-123］。このようにして，1853年までにはモールメインのカレン神学学校を頂点として，各宣教拠点の師範学校，そして初等教育を施す村落学校という三層構造のヒエラルキーが完成していた。

バプティスト宣教の最初期から，キリスト教の信仰を受容する側の人々は積極的に，みずから「カレン」としてつながろうとしていた形跡がある。コー・タービューは洗礼の翌々年にはタイ側のカレンへと伝道を志しているし［速水2002：270］，宣教師のカレン語学習がおぼつかないうちに1832年までにはすでに２つのカレン教会が設立され，100名近い洗礼者を出している［*ibid.*：264］。これらはカレンの宣教助手や伝道師の役割が相当大きかったこと，「かなたのカレンへの想像力と意志」［*ibid.*：270］の存在を示唆している。

19世紀半ばという時期は，1850年のジャドソン逝去や1853年の下ビルマ英領化など，カレン宣教にとってはひとつの区切り目になった。とくに下ビルマ英領化は，カレン宣教に混乱とともに発展のチャンスをもたらした。テナセリム地方で活動していた米人宣教師15家族のうち，８家族が新たに開かれた各地の拠点へ異動し，全般的な人材不足と資金難に陥っていった。宣教師たちは第２次英緬戦争後の被災民救援，伝染病，飢饉などの対応に忙殺されたうえ，米国の宣教本部との行き違いが顕著になり[27]，1856年には古参のヴィントンとブレ

27　当時，宣教本部との通信は往復で半年から８ヶ月の時間を要し，新たな宣教活動のための用地の買収や宣教師の任命・異動に本部の承認を待たずして現地の判断で先行せざるを得ない状況にもなり，本部との行き違いの原因となった。

イトンを含めた数人の宣教師らが，米国バプティスト宣教団（American Baptist Mission：ABM）を辞して新たな宣教組織を立ち上げている［*ibid.*：151-155］。

カレン宣教の拡大は，主としてラングーンとタウングー（Toungoo），そしてなによりもイラワディ・デルタという３つの地域で行われた。デルタでは1840年代から主にカレン人説教師らがアラカンから出向いて細々と活動が営まれていたが，1852年にバセインの拠点が正式に発足した。1854年に米国本部の資金に頼らない「自立の原則（self-supporting principle）」が打ち立てられたのち，デルタのコミュニティは急速に発展し，やがてテナセリム地方をしのいで自他共にカレン・バプティストの本拠地との認知を得るまでに成長した。テナセリム地方での範に則り言語別の縦割りの教会ネットワークをつくり，スゴーとポーは基本的に別組織として活動した[28]。カレン自身による国内宣教協会（Home Mission Society）は1850年にはバセインで創設されて，1876年にはカレン人宣教師が主体となってカチンにおけるバプティスト宣教が始まっている。また，ヘンザダのカレン人による同様の宣教協会も早い時期からチン丘陵にコンタクトを持ち始め，チンでの宣教を主導していた[29]［Shwe Wa 1963：316-318］。デルタでのバプティスト・カレンによる旺盛な活動はビルマにおけるバプティスト本部が置かれたラングーンの教勢をしのぐほどであった[30]。

28　デルタでは当初ポーはスゴーと同一の教会組織に属していたが，1863年にポー独自の組織を立ち上げた［Beaver 1963：330］。

29　タウングーでもカレン人が独自にカレンニーに宣教師を派遣していた。

30　のちにラングーン・バプティスト大学（Rangoon Baptist College）を名乗ることになる，在ビルマのバプティスト最高学府に宣教師カーペンター（C. H. Carpenter）が学長として1874年に着任すると，彼はラングーンよりかはバプティスト・カレンの中心地たるバセインにあったほうが最高学府として十全に機能すると考えて，この教育機関の移設を主張するほどであったという。結局，他民族のバプティストも包摂するビルマ・バプティスト会議（Burma Baptist Convention）の反発にあって，この教育機関はラングーンにとどまった［Shwe Wa 1963：214］。

ビルマにおけるバプティスト・カレン社会の進展は，教育活動の重視から生まれたものである。19世紀末の1899年には，村落学校から高等教育機関まで含めたカレンのための宣教師学校は，全土で412校（全バプティスト宣教師学校485校中）に及んでいた［Annual Report, American Baptist Mission Union 1900］[31]。そして1926年，大英帝国インド・ビルマ州には政庁の管轄下に6694校の公立学校があったが［Government of Burma 1927：88-89；1932：86-106］，対する宣教師学校の総数は921校，そのうちカレン語学校は705にのぼっていた。ビルマの総人口（1931 Census で1464万７千人）に対するバプティスト・カレン（同16万９千人）の割合は1.2％ほどであったから，バプティスト・カレンのあいだにおける教育機会は，植民地ビルマの平均よりも質量ともに充実していた。

このような手厚い教育体制と活動をとおしてカレンの民族意識は，ビルマにおけるほかのコミュニティ，あるいは仏教徒の「カレン」よりもはるかに明確に保持されていたにちがいないが，詳細は明らかになっていない。

第３節　英人植民地官僚とカレンの接触

19世紀にバプティストを受容したカレンの自己認識をめぐる外的条件について検討してきたが，次に当然，この時期に支配者の英人や周囲のビルマ人によるカレン認識がどうだったか，カレンとどのような関係をもっていたのか，という点が問題になる。

ビルマにおける19世紀とは，ビルマ王朝が英国によって領土の蚕食をこうむり，漸進的に植民地化され，やがて王朝そのものが消滅した時代であった。最

31　ちなみにこの1899年のカレン教会数は，ラングーンとバセインがともに112を擁して最も多く，全土では571（全民族の教会数685中）に上っていた。

初の四半世紀を過ぎるまで下ビルマはまだ王朝領であったが，のちに「カレン」とひとくくりにされる人々が分布する地域は，上ビルマの王都からははるかに離れた周縁にある。1826年，下ビルマの一部であるアラカンとテナセリム地方が英領化して，カレンがはじめて英国施政下にはいる。世紀半ばの1853年には下ビルマ全域が英領化，上ビルマの王朝は内陸国家化してカレンとは政治的に完全に切り離され，同時に大部分のカレン地域が英領に組み入れられた。最終的に1886年，ビルマは完全植民地化し，王朝は消滅する。バプティスト宣教は19世紀をとおして，英国によるビルマ王朝領土の植民地化の利に与りながら宣教を拡大した。このような「長い19世紀」を背景として，王朝下と植民地下で「カレン」をめぐってはどのような認識が示されていたのか，そして実際に英人とビルマ人はカレンとどのような関係をもっていたのか。以下第3節ではまず，英人について検討してみよう。

下ビルマ併合の19世紀半ば以前まで，英植民地政庁によるカレンへの言及はごく限られていて，最初期の記述傾向を踏襲する以外に，テナセリム地方の領有から得た統治や徴税の観点からみたカレンに関する情報ていどであったようだ。伊東が引用する，英国の有用知識普及協会の刊行による『有用知識普及協会廉価事典』の，1840年代に出されたと思しき第24巻のタニンダーイー（テナセリム）の項には，バプティスト情報とともに，農業を生業とする支配対象としてのカレン記述が中心になっている［伊東 2011：62］。1855－56年度のペグー州行政報告書に言及されるカレンについても同様に，簡易で表面的な描写の範囲をでない［*ibid.*：62］[32]。

32　英植民地行政文書には，1850年代に東部山岳地方，ユンサリン川流域で発生したカレン・ミンラウン（未来王）による蜂起を鎮圧するため，植民地軍が動員されたことが記録されている［NAD：1/1（A）181］。このカレン・ミンラウンの運動は西部デルタ地方のカレンにも呼応をもったようである。ここに現れる「カレン」を英政庁がどのように見ていたかについて，最近，伊東利勝氏の研究が出版された［伊

下ビルマ全域の植民地化によって，「カレン」とされる人々の大部分が英領内にふくまれることになった。このような認識自体はまだのちになってからのことであったろうが，英人行政官のカレンへの関心は確実に高まった。そしてこのころには，米人バプティスト宣教師による濃密かつ不断の接触をとおして，カレンに関する知識はすでに四半世紀にわたって積み重ねられてきた。したがって19世紀後半にビルマに植民地官僚として赴任した英人らは，このような米人バプティストにまずカレンについての知識をもとめ，そのカレン観を踏襲したカレンについての記述を残すことになった。

1860年代後半にタウングーの県知事としてこの地に赴任してきたマクマホン（Alexander Ruxton McMahon）の『黄金半島のカレン（*The Karens of the Golden Chersonese*）』［McMahon 1876］は，英人行政官によるカレンについての回想録としてはもっとも早い時期の出版物である。この著書冒頭には，彼の前任者であり最初のタウングー知事であったオライリーの報告書［O'Riley 1858］や，それが掲載されたローガン（J. R. Logan）編纂の雑誌 *Journal of Indian Archipelago and Eastern Asia*（JIAEA）とともに，バプティスト宣教師としてタウングーの地に長く居住していたメイソンにその著書の最も大きい部分を負っていることに謝意を表明している［McMahon 1876：iv-v；69］。民族名の語源（２章），言語（３章），起源（６章），宗教や神話・伝承ほか（７章）などに書かれているカレンについての知識はメイソンあるいはウェイドによるものである[33]。

マクマホン同様のメイソンへの献辞と謝意は，19世紀末に英植民地政庁の財務長官の地位にあったスミートン（Donald Makenzie Smeaton）の著書『忠誠

東2012］。

33　伊東が引用するように，元英領ビルマ弁務長官フィッチ（Albert Fytch，在任1867-71年）の回想録でも，メイソンのカレン知識への言及が含まれている［Fytch 1878：165-166］。

なるビルマのカレン（*The Loyal Karens of Burma*）』［Smeaton 1887］にも見られるところである。メイソンの著書を頻繁に引用し，メイソンを「偉大な宣教師学者（the great missionary scholar）」［*ibid.*：71］としている。この文献が後世，何度も引用されることになるのは，1881年に英人官僚の助力を得てカレン民族協会（Karen National Association：KNA）が設立されたことを証言しているためで，通常，これをもってカレンの民族主義の起点として記念されることになる。これについては後述する。

植民地政庁官僚の個人的な回想録にかぎらず，政庁による公的刊行物におけるカレン記述でも，バプティスト，とくにメイソンによるカレン理解が基礎的な情報を提供した。政庁が編纂したもっとも古い地誌である1880年の『ビルマ地誌（*Gazetteer of Burma*）』でのカレン記述のほとんどは，メイソンの『ビルマ，その民と自然産物』からの引用で成り立っている。カレンはKarengと綴られ，その部族的な（Tribal）分類，起源，身体的特徴，居住形態と家畜・食物，衣装，生誕儀礼，名前のつけ方などが前半の記述を占め，すでに非常に詳細な民族誌的細部に溢れている。カレンはスゴー／ポー／ブゲェーという3部族に分類され，ビルマやタライン（モン）などとは明確に異なった出自を持っていて，北方の「流砂の河」を渡って太古のビルマ領域に入ってきたという伝説があること，マルコ・ポーロの書物に最初の歴史的な言及があること，身体的には平地地方のカレンが筋骨たくましく，山岳地方では貧相になることなどが言及されている。そして後半部分では，婚約と婚姻・離婚，未亡人，疾病，自己統治，戦争，俘虜の扱い，法，相続，裁判，宗教，豊穣の女神，その他諸々の習慣に関する細かい記述が続くが，ここで言及されるカレンとは，基本的に独自の神格ユワを頂いた，いわゆる精霊信仰のカレンが対象となっている［Government of Burma 1987（1880）：vol.1：162-173；vol.2：226-244.］。

このように英人官僚のカレン認識の骨格はバプティストの知識が流用されたが，実際に両者のあいだにはどのような関係が取り結ばれていたのか。わけて

も焦点となるのは，19世紀に英政庁が支配対象としての「カレン」一般にたいして，民族別の一様な政策的対応を取ったか否か，取ったとすればどのようなものであったかという点だ。元英植民地官僚のファーニバルは，植民地軍における部隊編成史を民族別に概観して19世紀のカレン部隊について触れている。1857年カレン反乱の際に２つの中隊を編成する計画が持ち上がったが結局，ほとんどがシャンとタウントゥ（パオ）で代用されたこと，のち1880年までには３分の２までカレン比率があがったことが言及される。そして第３次英緬戦争から本格的にカレンが募兵されるようになって，1891年には武装警察大隊１個が編成され，1896年にはインド軍の大隊に編入された，とする［Furnivall 1956：180-181］。

ファーニバルの書きぶりからすると，1857年のカレン２個中隊の編成，第３次英緬戦争のころから本格化したカレン募兵は，「カレン」を理由として民族を単位に行われた，19世紀にはすでにカレンに対する民族別対応が英政庁にあったと看取されよう[34]。しかし同時にファーニバルは，19世紀半ばのカレンについて以下のようにも記す。「カレン諸部族（The Karen tribes）は小さくて分裂していて，英国の支配にとって脅威となることはまったくなかった。かつてビルマ人（Burmese）に抑圧されたジャングルの民で，多くがキリスト教を受け入れ身分と繁栄を手に入れていた。他方では仏教徒もいて自らをビルマ人とみなし，1857年にはカレンの反乱によって大きな問題が引き起こされた」［*ibid.*：180］。仏教徒のカレン語話者はみずからを「カレン」とはみなさずに，むしろビルマ人に近いものとして認識していたという指摘である。後述するように，仏教徒のカレンが自らの民族を意識し始めるのは20世紀に入ってから，大規模には第二次世界大戦とビルマ独立前後の民族政治を通過してからだと考

34　ファーニバルはバプティスト・カレンと親交が深く，カレンが多数居住するインセイン県の地誌を編纂したこともあった。

えられる。19世紀後半まで，カレンにかぎらずビルマ領域の仏教徒は，ことほどさようには民族なる意識をもっていなかったのではないか。民族についての認識枠組みを19世紀にただちにあてはめることの疑義は，なによりも「ビルマ人」による「カレン」認識・関係に向けられよう。

第４節　「ビルマ人」の生成とバプティスト・カレン

本章では19世紀のカレンについて，米人バプティスト宣教師との関係，カレン自身の認識，英人官僚の認識と関係を見てきた。のこされたところはビルマ人によるカレンについての認識と彼らとの関係である。第２章で見たとおり，上ビルマのコンバウン朝王廷は18世紀以来，在地のダヂーに孫支配される，王国の周縁に住むカレンにはほとんど関心を持っておらず，詩歌の背景としては秀逸な題材を提供する人々ていどのイメージしかなかった。では，下ビルマにもいたごくふつうのビルマ農民たちは，隣人としてカレンたちをどのように見ていたのか。

これについてもまったく史料が残されておらず，一般のビルマ民衆のカレン観は知る由もないが，はたと立ち止まって考え直してみると，じつはこの疑問に前提されている「ビルマ人」という主体性が成り立っていたのかという問題，ひろい意味でビルマ語世界における民族観念が現在と同様，バプティスト・カレンと同様の質で成立していたのかという認識論上の原理的な問題に直面する。つまりは，「ビルマ人」が「カレン」をどのように見てきたのかという疑問に含まれる，19世紀にバプティスト・カレンの隣人であったはずの「ビルマ人／民族」，ビルマ語では「ミャンマー／バマー[35]・ルーミョウ（民族）」とは誰であったのか。

35　冒頭で述べたとおり，「ミャンマー（myanma）」は文語，「バマー（bama）」は口語。

まずは，あらためてコンバウン朝王廷のカレン観というときの，上ビルマ王都の宮廷における「ビルマ人」という存在，ひいては19世紀の王朝史料に見える民族観念から再考したい。

コンバウン朝王廷の自己を指し示す語彙を見ると，たとえば18世紀半ばの初代王であるアラウンパヤー王（在位1752－60）が英国東インド会社に書き送った書簡では，みずからを「タンパディーパとトゥーナパランタ，ラーマニャデーサ，カンボーザを統べる王」[36]と自称していて，「ミャンマー」なる言葉は存在していたもののまったく一般的ではなかった。それから１世紀ほど経って19世紀半ばにようやく，この領域を「ミャンマー・ナインガン（国家）」，その王を「ミャンマー・ミン（王）」と呼称する対外的な慣行がみえはじめる。その背景には，侵略者としての英国の存在を一方の極として，彼我をへだてる意識が明確になっていたことがある。他方，こちら側，すなわちエーヤーワディー川流域地方では「共通の言語，共通の宗教，共通の法的・政治的な思想と制度，そして共有の書承された歴史書までもアヴァ王朝の核心域には成立していた」［Thant Myint-U 2001：83-89］。こういった王朝下の諸要素の総体を「ミャンマー」と括り，それをある「ルーミョウ」の属性とする感性もたしかにあった。すでに17世紀宮廷の記録では，世界を構成する101のルーミョウがリスト化されていたという。

しかし，宮廷世界における「ミン」の「ミャンマー」化を過大評価することはできない。ましてや，「ミャンマー」と「ルーミョウ」の結託というプロセスが一般的であったとはとても言えない。王統記（ヤーザウィン）とは，王権の支配正統性を宣布する伝統的な文書である。19世紀初頭に成立した王統記『玻

36 「タンパディーパ」はパガンやインワ周辺，「トゥーナパランタ」はシュエボー周辺でエーヤーワディー河谷平野地方の王朝直属地域である。「ラーマニャデーサ」はビルマ南東部のモン地域，「カンボーザ」は北東部のシャン地域で，コンバウン朝と朝貢関係にあった地域の雅称である。

璃宮御年代記』や詔勅史料では,「ミャンマー」という形象はまだまだ周縁的で,それを引き受ける概念的な受容体があったとしてもそれは「ミン」であり,「ルーミョウ」という自他弁別の参照枠組みではなかった。両者が結びついて大衆的な基盤を獲得し，このビルマ語世界の民衆の心の内で中心的な場所に据え置かれるようになるのは，さらに1世紀近くの時間の経過が必要であった。

前節冒頭で俯瞰したように，ビルマにおける19世紀は植民地化の世紀であった。しかしこれは，外からの物言いであって，植民地化した英国側の視点である。当の「ビルマ」の民衆の主観にしてみれば，この時代はミンの権威が衰退してやがて消滅し，それに相即してビルマ仏教の体系，内的な呼称では「ータータナー（宗教，御教え，清教）」が衰微しそして崩壊の瀬戸際にまでいたった，未曽有のアイデンティティ危機の時代であった。そもそもタータナーが律する世界において王＝「ミン」とは，理念的には，サンガという社会制度を擁護することをとおして，タータナーの庇護者であるべき存在であった。見返りにサンガは正法（タヤーあるいはダンマ）を護持する「正法王（ダンマラージャー）」としてその支配の正統性をミンに付与する，という相互関係が成り立っていた。上座仏教社会に共通する特徴としてつとに指摘されるところである［石井2003a（1975）；奥平 1994：97］。しかし，英国植民地化によるコンバウン朝の廃絶によって仏教サンガを庇護すべき王権が突然，消滅した。このかくあるべきミンとタータナーの関係を復興しよう，タータナーをささえる王権を取り戻そうという機運は，1886年の王朝滅亡直後からはじまっていた。

19世紀末から3つの波を形成して起こった農民反乱は，ビルマ国史の立場から言えばビルマ民族主義運動の偉大なる先駆の歴史となるが，そこに登場する農民は当初，みな，「ビルマ民族（ミャンマー／バマー・ルーミョウ）」という意識をもっていなかった。1888年下ビルマのターヤーワディー県におこった僧侶ウー・トゥーリヤの反乱では，ビルマ王室の血をひくミングン王子が重要なシンボルとして引き合いに出された。そして「外道を殲滅」する宣言文が布告

され，王室を中心とする従前の秩序を回復することが蜂起の目的になっていた［伊東 1994：292-293］。この反乱の主体となるべき集団としては，たとえば，「ターヤーワディーの町や村に住むすべての臣民および首長と区長」，「自分自身や朋輩や尊師や仏陀や宗教の繁栄を心に抱く下流地方の武装した臣民」などとなっている。そこにはまったく，「ミャンマー・ルーミョウ」がでてこない。同年，テナセリム地方のタボイで起こったウー・サンディマの反乱でも同様であった［伊東 2003］。19世紀終わり，ビルマ全面植民地化とビルマ王朝廃絶に際して立ち上がったのは「ビルマ民族」ではなく，ミンに連なる「臣民」であったしタータナー信奉の徒であった。

こののちの２つ目の農民反乱の波，20世紀初頭の諸反乱における現地史料には「ミャンマー」なる形象がひんぱんにあらわれるようになる。３つ目の1930年代となるとようやくにそこにはお馴染みの「ミャンマー・ルーミョウ」なる主体性が主になり，同時期のビルマ民族主義運動とのつながりも濃厚に見られるようになる。ビルマ民族主義運動の嚆矢として語られる1906年のビルマ仏教徒青年連盟（YMBA）は，各地にできた仏教復興団体の総元締め組織を企図して設立された。したがって以上のようなの相から見れば，近代的なビルマ・ナショナリズムはその端緒において，ルーミョウを単位としたタータナー復興運動であったと再定義ができよう。あるいは，ミンの廃位にともなって空位となった人心の主座に，ルーミョウというあらたな主権概念がするりとすべりこみ，以降，ミンとタータナーが提供してきた至高の価値を肩代わりするようになった。いまのところ，ルーミョウの中心化ともいうべきこの動向は比喩的にしか表現できない。一連の農民反乱の事例のみをもって，19世紀におけるビルマ世界の民衆の自己意識を一般的に論ずるのは拙速であるし，さらに具体的細部が明らかにされる必要がある。

したがって19世紀までのビルマ世界における民衆がどのように「カレン」を見ていたのか，どのような関係を持っていたのかという疑問については，さき

の王朝側のカレン観と同様に答えることができ，そこには輪郭と核心が備わった民族観があったわけではなかったろう，ある種の本質化が行われるほどに「カレン」がビルマ世界の民衆の関心を引き付けることはなかったのではないかという推論が成り立つ[37]。

19世紀末，王権（ミン）の崩壊と仏教（タータナー）の衰退がひとびとのアイデンティティの危機を誘発し，ミャンマー・ルーミョウという主体性が顕わになっていく過程があった。それと同時に，広く深く成立しつつあった植民地空間の中で，カレンは必然的にルーミョウのひとつとして，たいがいにおいて異教徒として，英人の側にあるルーミョウとして受肉した。つまり，ビルマ人と事後的に呼ばれる人々の主観の上では，自身が「ビルマ民族」であることを引き受けて行った過程と「カレン民族」（わけても「政庁協力民族カレン」）を見出した過程は表裏一体のものとして進行したのではないか。

第５章　植民地下のカレン（20世紀）

初期バプティスト宣教のなかで核心と外郭を与えられた，カレンについての知識は，19世紀全般をとおして，知識の収集・編纂・出版・頒布・共有・再生産などの過程でさらに確固としたかたちを獲得していった。19世紀末の全面英領化に続いて世紀の変わり目をまたいで，ビルマに植民地社会が根を下ろすにしたがい，カレンをめぐる諸関係も米人宣教師以外の諸主体へ広がり，深まっていくことになる。その関係の網の目の中でさまざまな必要にせまられて，「カレン」なる人々についての新たな知識の側面が加わり始める。同時に，いまま

37　そのようなカレンについての19世紀までのビルマ語世界のイメージのいくつかは，説話や口承として残存しているにちがいなく，実際に民話採録（Ludu U Hla の収集したカレン民話）などという形で戦後にも出版されている。これも，これからの研究課題である。

では名づけられるばかりの存在であった，かようなバプティスト・カレン自身が社会的に，政治的に，文化的に自己主張をはじめる。ソオ・アウンフラのカレン史もこの一環に位置づけられよう。では，20世紀の植民地社会のなかで付加されたカレンの知識には，いかなるものがあったのか。どのような自己主張がどのようになされたのか。

第１節　英人植民地官僚による記録

19世紀の米人バプティストがカレンについての民族誌・言語誌的な知識を形成したとすれば，20世紀の英国植民地主義者たちは，植民地ビルマ大の範囲でおもに人口学的・言語分類上の統計学的データをその知識に付け加えていった。1886年の全面英領化ののち，こと地租査定を念頭にした植民地経営上の基本的政策策定のため，各地方やその住民についての情報収集の活動が本格化し，人口調査や言語調査，その他の諸種の社会統計調査がこと細かに実施された。その結果，この地に住むカレンの勢力や分類が具体的数字を伴って表現されていくことになる。

ビルマにおける最初の国勢調査は，1872年に実施された大英帝国インド領全土対象の最初の調査の一環であったが，実際には下ビルマの限られた地域で実施されたに過ぎなかった。第２回目以降は1881年，1891年，1901年と10年毎に実施され，カレンをふくめたビルマの民族人口などの統計については，とくにこののちの1911年［Government of Burma 1912］，1921年［Government of Burma 1923］，1931年［1931 census］の国勢調査が後世の文献によく引用されることとなる。

幅広い各種統計データがとられたが，対象住民の分類とその指標設定が当初から大きな問題となってさまざまに試行錯誤された。ビルマの統計において採用された各人的集団の大分類，あるいはその下位分類は，1880年代より帝国イ

ンド領で進行していた民族誌調査の流れを汲む言語調査の中で画定・確定されたものであった。結果的には，インド本土との調査とは切り離されたかたちで進行した。1917年には言語調査の予備調査報告書［Government of Burma 1917c］が出されていて，以降1921年と1931年の国勢調査ではより「精確な」分類指標の採用が試みられた[38]。

最後の1921年と1931年の国勢調査では，この1917年予備調査報告書で得られた言語分類に基礎をおいて，「言語（language）」と「人種（race）」（1921年は「人種とカースト」）のヘッダーのもとで統計が取られている。言語は「各個人が自らの家庭内で通常話す言語」と定義されていて，たいする人種は「どの人種に属するのか」という質問のもと，つまり各個人が主観的に考える自己の所属を，あらかじめ用意された人種リストから選択するという方法がとられていた。したがって，言語と人種とでは人口数が異なってくるものの，分類と項目は同一である。1931年調査を例にとると，言語については「土着言語（indigenous languages）」は大分類が15，下位分類の総数が128あるとされ，「土着人種（indigenous races）」の大分類と下位分類も同数となる。これら「土着言語／人種」に中国系を便宜的に編入して大分類16として，AからOまでとRのア

38　国勢調査における人的集団の分類指標はおおきく変遷した。まず1886年の上ビルマ併合と全面英領化ののち，インド本土と共通の言語調査が模索された。しかしビルマの弁務長官は上ビルマ言語調査者の不足を理由に，ビルマ調査は本土と別個に行われるべきと先送りされた。1891年から1911年の3回の国勢調査ではCaste, Tribes and Races，あるいはNationalityを加えたヘッダーで人種統計が取られた。これはインド本土との統一したフォーマットのもとで行われたものであったためだった。だが1911年，カーストを要としたインド本土の物差しがビルマでは不適合という認識が示されている。1917年，本格的な言語調査のための予備調査報告書が出された。そこでは暫定的に242言語がリスト化され，1911年センサスに含まれない言語が177に上ったが，その多くは既知の言語の別名であるかもしれないという認識が示された。こののち本格的な言語調査は「現状の能力」を超えたものとして放棄された。

ルファベット記号がおのおの割り当てられた。それ以外の「非土着言語／人種」としては，Sにインド＝ビルマ系のアラカン・カマンやアラカン・マハンメダンなど，Xにインド系，Yにヨーロッパ系，そしてZとしてその他が分類された。このように，とくに20世紀に入ってからビルマの国勢調査において主要な分類指標として採用された「人種」とは，第一義的に言語的な指標に従った分類であり，あらかじめ大分類された言語と人種の一覧に従って，その下位分類の精緻化と数の特定に大きな関心が払われていた。

では「カレン」は国勢調査のうえで，どのように分類され数値化されてきたか。【表２】には，1881年から1931年までの６回の国勢調査におけるカレン関係の統計をまとめてある。Language は６回を通して統計が取られていて（1891年は Parent-toungue），これに並行していまひとつの項目がたてられ，これは Castes, Tribes, and Races あるいは Castes, Tribes, Races, or Nationality というヘッダーが1891年から1911年までの３回，1921年に Race and Caste，1931年に Race というヘッダーに変わる。1911年まではインドの尺度との一貫性を優先させた結果であったが，なかみのカレン統計じたいは様々に試行錯誤されておりむしろ一貫性はない。1891年には「ポー」・「スゴー」・「カレンニー」・「タウントゥ」という言語的サブグループとともに，「仏教徒」・「精霊信仰者」・「イスラム教徒」の宗教人口が記載されるものの，キリスト教徒人口は現われない。1901年は宗教別人口が消え，「スゴー」・「ポー」・「カレンニー」それに「その他」，1911年には「タウントゥ」と「その他のカレン」と簡略化される。言語予備調査後の1921年からはビルマ専用仕様のフォーマットにかわって，15の言語・人種グループのうちカレンには「N」という記号が割り振られ，「その他」を除いて16の下位言語グループに分類された。また，宗教別人口統計も1921年からふたたび掲載されるようになった[39]。

39　ヘッダーには人種（race）がおもに使われてきたが国籍／民族（nationality）や

【表２　国勢調査におけるカレン統計の変遷】

1881

● Language – Karen 514,495

1891

● Parent-toungue – Pwo 408,475 / Sgau 225,193 / Taungthu 41,115

● Castes,Tribes, and Races –

Pwo	Buddhist	225,444	Nat-worshipper	44,047	Musalman	14
Sgau	〃	178,978	〃	6,404	〃	6
Karenni	〃	1,019	〃	112	〃	-
Taungthu	〃	4,637	〃	2	〃	-

1901

● Language – Karen Groups: Bre 669 / Karen 711,408 / Karenni 1,363 / Padaung 9,321 / Taungthu 160,436 /Zayein 4,666

● Caste, Tribe, Race, or Nationality – Karen (Sgau) 86,434 / (Pwo) 174,070 / (unspecified) 457,355 / (Red) 4,936

1911

● Language – Sgau+Pwo+Karen (unspecified) (Provincial Total) 850,756 / (Burma Proper) 816,231

● Caste, Tribe, Race, or Nationality – Karen: Taungthu (Provincial Total) 183,054
Karen: other Karens (Provincial Total) 919,641

1921

● Language – N. Karen Groups 1,114,016
N1. Karen (unspecified kind) / N2. Sgaw / N3. Paku / N4.Wewaw / N5. Monepwa / N6. Bwe / N7. Brek/N8.Karenbyu / N9. Pwo / N10. Mopwa / N11. Taungthu / N12. Padaung / N13. Yinbaw / N14 Gheko / N15. Karenni / N16. Zayein / N17. Talaing-Kalasi

● Race and Caste – N. Karen Groups 1,220,356
＊下位分類は上記 Language と同じ

○ Race-groups by Religion and District – N. Karen (Provincial Total) 1,220,356
(Buddhist) 943,878/ (Animist) 98,253 / (Christian) 178,225

1931

● Language – N. Karen Groups 1,341,066
N1. Karen (unspecified kind) / N2. Sgaw / N3. Paku / N4.Wewaw / N5. Monepwa / N6. Bwe / N7. Brek / N8.Karenbyu / N9. Pwo / N10. Mopwa / N11. Taungthu / N12. Padaung / N13. Yinbaw/N14 Gheko / N15. Karenni / N16. Zayein / N17. Talaing-Kalasi

● Race – N. Karen Groups 1,367,673
＊下位分類は上記 Language と同じ

○ Race-groups by Religion and District – N. Karen (Provincial Total) 1,367,673
(Buddhist) 1,049,613/ (Animist) 95,873 / (Christian) 218,790/ (Others) 397

注：1921年と1931年の統計中，下線のついた項目が本文中で「大分類」としたものに相当する。1911年までは一貫性がないが，おおよそ上位分類と目されるものに下線をつけた。

こうしてカレンは，植民地期最後の1931年国勢調査で，ビルマ民族に次いで英領ビルマで２番目に大きい，137万人弱の人口規模を誇る人種（race）集団として規定された。上述のように人種の定義は基本的に言語を基準としたものであり，この16下位言語グループには，カレンの中核となるスゴーとポーという２グループ以外に，現在では別民族と数えられることが多いパダウン（カヤン），タウントゥ（パオ），カレンニー（カヤー）なども含まれていた。

カレン全体を数値の上で俯瞰しうる国勢調査の成果によって，カレンを率先して標榜するバプティスト派キリスト教徒の勢力も1921年統計から明らかにされた。1931年の国勢調査で明示されたバプティストの信仰を有するスゴーとポー，他をあわせたカレン人口は168,935人でカレン全体の12.35％であり，キリスト教徒のカレン人口としては218,790人，15.99％であった。これにたいして精霊信仰者は7.23％，そして仏教徒は76.74％という圧倒的に多数派であった。

英国植民地政庁がバプティストによるカレン知識に加えたのは，統計学的な数値データや精緻な人種・言語分類だけではない。カレンについての記録文献も数多く残した。おおまかにいえば，地誌（gazetteer）と民族の特徴を列挙して記述した総覧的書物の２種類に分けられる。

まず，植民地経営を通して得られた諸種の情報は地域本位でも分類・体系化され，19世紀末より各種の地誌として出版されることになる。すでに４章でも触れた『ビルマ地誌』［Government of Burma 1987（1880）］以降，スコットによる『上ビルマとシャン州地誌（*Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*）』［Scott and Hardiman 1900］，『インド帝国地誌，州別編―ビルマ（*Imperial Gazetteer of India,Provincial series－Burma*）』［Government of Burma 1908］などが編纂された。20世紀に入るとさらに，膨大な量の県単位の地誌が政庁の事

部族（tribe）もあり，バプティスト宣教でカレンを人種や民／民族（naiton）とさまざまに呼称した態度とそうかわらない。要は，第一に言語によって人的集団が分類されていた点に注意を払うべきであろう。

業として1930年代にいたるまで続けられることになった。ここで執筆された地誌にもカレンに関しての記述が多く含まれ，ほとんどはバプティスト宣教師の知見が流用されている。だが，上ビルマのシャンに関する権威的な書物として長らく影響力を誇ってきたスコットの著書は，シャン化したカレンとも形容できるカレンニーを中心にして，そのカレン関係の記述は独自の取材源のものが多い。

このような政庁による現地知識の整備は，他方で，1908年地誌の執筆者でもあったICSのローウィスによる『ビルマの部族（*Tribes of Burma*）』［Lowis 1919］や，植民地軍将校エンリケーズによる『ビルマの人種（*Races of Burma*）』［Enriquez 1924］，独立交渉期に辺境地域局局長を勤めたスティーブンソンによる『ビルマの山岳民族（*The hill peoples of Burma*）』［Stevenson 1944］などの総覧的な民族紹介書籍に連なっていった。ローウィスもエンリケーズも，スコットのカレンニーとそれに付随するカレン叙述を主柱に添えて執筆している。

「精確さ」をもとめた言語調査計画は結局のところ，「技術的限界」によって放棄された。しかし言語調査や国勢調査の成果は，こののちの植民地経営の諸政策に実地に適用され，植民地社会のさまざまな局面で影響力をふるった。たとえば1923年からはじまった植民地議会の総選挙におけるカレン選挙区の議席配分は，直接的に国勢調査の結果を受けてカレン選挙区の設定が決定されたし，宣教師学校への補助金配分などにも同様のことがいえた。そしてカレン人知識人自身もまた，これらの国勢調査報告書を手にして自らの民族的勢力を確認した。このような知識人には，植民地議会のカレン人政治家や弁護士，教師，牧師，そしてソオ・アウンフラのような公務員も含まれていた。

さて，以上のように英人植民地官僚によってまとめられたカレンの情報を概観すると，ただちにふたつばかりの疑問が湧きおこる。第1にカレンという民族の人口とその下位分類について，英人は相当の労力をかけてその細緻化に取

り組んだが，そもそものカレンと非カレンを分ける指標じたいはどこに求めたのか，ということである。それは，技術論的には言語学の蓄積と理論から演繹されたのだが，それ以前に，このような分類を前提する知識がバプティスト宣教の中で積み重ねられていた。バプティストが基本的に決定した言語的「カレン」の外郭がここでも流用された。

第２の疑問は，カレン内の仏教徒の存在に関してである。国勢調査の結果をひととおり検討して，カレンという集団内の多数派の人々はいかなる属性を持つ人々かと問うことになると，それはスゴーとポー語話者で仏教徒である，という理解に不可避的に到達する。1931年統計で仏教徒として記載されるカレンは1,049,613人，全カレン人口の76.74％を占めている[40]。しかし，このような仏教徒の存在は一般に認知されていたものの，植民地期の英政庁側はもちろん，バプティスト側の資料にもその生活様態や具体的な描写が記されることはほとんどなかった。地誌や総覧的書籍，のちに見る人類学者による民族誌においても，「山岳民族」というイメージに迎合しやすい，しかし統計上はカレン全体の98,873人，7.23％というキリスト教徒よりも小さな割合の精霊信仰者（アニミスト）のカレンが好んで取り上げられるのが一般であった。統計にあらわれる最大多数者としての仏教徒カレンは，民族誌的細部が欠落した存在であった。これはいったい，どうしたわけか。

第２節　人類学の対象としてのカレン

カレンは戦後（1948年のビルマ連邦独立後），学問研究の領域で重要な関心対象として浮上してくるが，それはとくに人類学と政治学的研究の分野でのこ

40　これを地域別に見れば，ペグー管区では70.3％，イラワディ管区で77.3％，テナセリム管区で80.5％，南北シャン州とカレンニー州で72.1％が，おのおののカレン人口に占める仏教徒の割合となる。

とであった。直接的には，1960年代に国を閉ざすビルマに代わって，隣国タイのカレンを参与観察の対象とした人類学者によるカレン研究が盛んになったためであるし，国民統合や民族紛争といった政治学のテーマについて，東南アジアにおける多民族国家ビルマのカレン問題が恰好の素材を提供しえたからであった。そして，人類学の対象としてのカレン，政治学的な問題を内包する存在としてのカレンというふたつのカレン記述の系譜もやはり，ビルマ植民地期後半，20世紀の植民地社会におけるバプティスト領域にその直接的な起源がある。まずは前者について瞥見し，後者については第4節で検討を加える。

20世紀に入ってから人類学という学問領域が広く制度化されるに至り，宣教師としてビルマに派遣された米人のなかからカレンをそのような研究対象とする試みが現われた。マーシャル（Harry Ignatius Marshall）の『ビルマのカレン：人類学と民族学の研究（*The Karen People of Burma*：*A Study in Anthropology and Ethnology*）』［Marshall 1922］は，最初にして後世のカレン研究にもっとも大きな影響を与えた書のひとつであろう。マーシャルはタウングー・カレン宣教団への派遣宣教師で，1918年に同地に滞在していた。章立ては，まず第1部に「概説」として，居住圏と部族分布，カレンの起源，身体的特徴，気質と倫理観，言語，時間と空間観念が扱われる。そして以下，居住形態などの「家族生活」（第2部），慣習などの「社会生活」（第3部），「宗教生活」（第4部）と続き，さいごに「カレン族の発展」（第5部）と題してカレンの間でキリスト教信仰が広がっていることを描写する。「未開の民」を考究対象とする初期人類学の傾向を反映して，そこに掲載された写真図版の多くは，山地居住の素朴で民族衣装をまとったカレンや，彼らの伝統的な風習と形容できる構図を被写体に選んでいる。だが，そこに体系的に記述された知識の多くは，19世紀を通した宣教のなかですでに得られていたものであった。

カレン知識の形成史上におけるマーシャルによる本書のなによりの意義は，一冊の学術書という体裁をとって，その中にカレンを構成するとされる下位言

語，居住地域，住居，儀礼，諸種の習俗・伝統の諸観点が民族誌的細部として整理・配置され，それがオハイオ州立大学の『歴史・政治科学叢書』の第８巻という学問的権威の装いを纏って出版された，という事実にある。これ以降，その集団「内部」の多様性から派出する疑義――「下位」言語集団や宗教，居住地域などの多様性を見てみれば，常にそれが「ひとつの」民族として認知を受けられるか？――は等閑に付され，人類「学」的検証に耐えうるカレンなる「外郭」，カレンなる「民族」が確かに存在するという印象を一般に強めた。マーシャルが，その著書で「より一般的な複数形の Karens よりも Karen を使用」したのは用語上の混乱を避けるという技術的な理由［*ibid.*：vii］であったのだが，それでも「スゴー」や「ポー」よりも，この単数形の「カレン」という集団水準こそが世界のその他の地域の同様な集団と比較しうる単一の「民族」として一般に受け入れられていく。

1939年に出版されたソオ・アウンフラのカレン史叙述の肝要な部分も，マーシャルの民族誌に負っている。とくに，ソオ・アウンフラが最たる関心とするカレンのヘブライ起源説についても，マーシャルを参照している。そのマーシャルは，カレンのユダヤ起源説を慎重に検討して，それでもカレンがヘブライに源に持つ創造神話を保持しているという疑いを払拭することはできない［*ibid.*：12］と結論付ける。

いま１点，植民地期の人類学的なカレン研究を挙げてみたいが，これはさきに触れた仏教徒カレンについて，植民地政庁の統計に最大多数派として現れるものの，その民族誌的細部が欠如していると指摘したことを考えるヒントが隠されている。この研究は，やはり宣教師としてビルマに派遣されていたルイス（James Lee Lewis）によって，1924年にシカゴ大学に修士論文として提出された『カレン民族のビルマ化：人種的適応の研究（*The Burmanization of the Karen People*：*A Study in Racial Adaptability*）』［Lewis 1924］である。

そのタイトルからも明らかなように，ながきにわたって独自で確かな民族で

あったカレンが，ビルマ人の文化的・政治的優位のまえにいかに「ビルマ化」をこうむっているかということを主題としている。マーシャルの著書から細部を引用して，通婚による形質的ビルマ化，衣服や文化におけるビルマ化，言語におけるビルマ化など，「一連の長いビルマ化のプロセスの最後の段階が，カレンの仏教化である」［*ibid.*：106］とする。前提されているのは，もっとも「純粋な」カレンの原型としてアニミスト的な信仰を保持した山地のカレンであり，そこから生態的・社会的・経済的諸要因により次第に「ビルマ化」が進行したという，単線的なカレンの歴史観である。この論法に従えば，すでに1921年の国勢調査に現われる８割近くの仏教徒カレンはすでにビルマ化していることになる。

このような，カレンにおいて精霊信仰を基本形とする考え方は，先に引用した1880年の『ビルマ地誌』にも見える。カレン項目の「宗教」での記述には，「キリスト教に改宗したものを除いて，この人種はすべて，無数の見えざる精霊の加護を祈願し，あるいはそれらの怨讐を恨み…」，そして「偶像崇拝を忌み嫌い，仏教（Boodhism）に対しては最大の侮蔑を持っている」［Government of Burma 1987（1880）：vol.2：239.］とある。あたかもカレンとは根源的には精霊信仰者であり，キリスト教に改宗する余地はあるものの，仏教とはほとんど無縁な存在として表象されている。

バプティスト宣教師や英人植民地官僚たちが「仏教徒カレン」にさほど興味を示さずその記録を残してこなかった理由のひとつも，ここにあるのかもしれない。実際，宣教のフロンティアは多くの場合，山地の精霊信仰者の間にあった。そして，英人官僚たちは，このように民族的に「純粋な」状態からもっとも遠い，仏教徒カレンには民族誌的叙述の価値がないと判断したのかもしれない。

第３節　民族社会の成立とカレンのイメージ

カレンを語る英人植民地官僚と米人バプティストの英語史料からは明確な区切り目が見えてこないが，植民地社会が根を下ろし始めたビルマ語世界では，おそらく19世紀後半から20世紀にかけて，世界を語る基本的語彙におおきな変化が訪れていた。むろんこの観点からの研究は現在までのところまったくなされていないと言ってよいから，この言明はまだ推測の域を出ていない。しかし先述のとおり，この世界を構成する基本単位に「ルーミョウ（民族）」という語が頻用されるようになり，やがて，人的集団を分類する指標としてはなににもまして主要なものとして使用されることになったようだ。端的には，前章で触れたように，全面植民地化の1880年代までは，このようなルーミョウの一集団としての「ビルマ／ミャンマー」と冠された人々の存在はその輪郭もおぼろで，その意識を担うべき主体もとらえどころがなかった。しかし，そのわずか20～30年後には，明確な核心と担い手をもった「ビルマ人の」ナショナリズム運動がはじまっている。19世紀後半から20世紀初頭にかけて，ビルマ・ナショナリズムを担うべき「ビルマ人」なる意識がどのように立ち上がっていったのか，ひいては民族を単位とする社会がいかに成立したのか，具体的な細部をともなった実証研究はほとんど進展していない。

いずれにせよ1906年，ビルマ民族による初めての民族団体とされるビルマ仏教徒青年連盟（YMBA）が設立された。当初，仏教復興を目的とした運動は，ほどなくして植民地体制そのものに批判の矛先を向けるようになる。1920年，YMBA はビルマ人団体総評議会（GCBA）という第２世代のビルマ民族主義運動に発展的に解消し，1923年の両頭制導入，1936年の印緬分離とビルマの直轄植民地化という自治権拡大の政治変動を惹き起こしていく。

このようなビルマ民族主義運動の拡大を背景として，ルーミョウを前提とし

た人的集団の分別に「土着民族（タインインダー）[41]」か否かの区別がくわわった。現代ビルマ語では日常的に使用される語彙のひとつであるこの言葉は，植民時代に頻用されはじめたか，もしくはおそらく新たに発明されたものである。植民地支配を前提とした「外来」の人的集団を区別する必要に迫られて登場した，政治的な彼我分別の指標であった。そして20世紀初頭，とくに下ビルマにおいて，このようなルーミョウによって画されるコミュニティでよく目立つものといえば，それは非タインインダーのインド人とタインインダーのカレンであった。

インド人は19世紀後半のデルタ開発の際に労働力として移入され，以降，1931年の国勢調査では，ビルマ総人口約1,465万人のうち，ビルマ（約860万人）とカレン（約137万人）に次いで約102万人の人口を誇るコミュニティにまで成長していたことがわかる。インド人商人は，1920年代にはデルタで産出したコメのマーケティングと輸送をめぐってビルマ人商人と激しく角逐し，1930年代にはラングーンで最大の不動産所有者となり，外国貿易においてもインド系の企業がその額面の半分以上を握るまでになっていた。植民地末期，ラングーンの人口の半数以上はインド人で，ラングーンはまるでインドの街のようであったと言われる［Pearn 1939；Taylor 1987：127］。ビルマに土着の人々，つまりタインインダーにとっては，経済的に優位に立つ「外国人」としてのインド人やヨーロッパ人の存在はそれだけでビルマにおける植民地体制の矛盾として認識され，ことあるたびに批判と憎悪の対象となった。

カレンはタインインダーでありながら，このような植民地体制の恩恵を受け

41　現代ビルマ語でもあいまいに使われる言葉で，一方で「外国人」とされる中国系やインド系に対して「土着民族」を意味してビルマ民族をはじめビルマ領域の諸民族を含むが，他方では「少数民族」を指しビルマ民族が含まれないことがある。したがって，この語を発声する主体が都合よく，あいまいに使用することができて，政治的意味合いを含蓄しうる。

る側の人々という印象があった。その理由は第１に，ビルマ民族・仏教徒が多数派となっているなかで，ビルマのキリスト教徒の代名詞となるほどにキリスト教徒に占めるカレンの割合が高く（66.08％），カレンと言えばキリスト教徒というイメージがあったことによる。既述のように，カレンにおけるキリスト教徒はカレン人口の16％程度の少数派であったが，その大半を占めるバプティストが社会的におおきな発言力を持っていた。カレンに宣教したのは米国のバプティストであったが，カレンの間でのジャドソンの成功はすでに一般のビルマ仏教徒にとってもごく常識的な知識として知られていたのは，当時の有力ビルマ語日刊紙トゥーリヤの投書を見ても分かる。そして，「カリヤン・バーダー（キリスト教）の考え方はミャンマー人の考え方とは逆である」［Thuriya Dadhinza：1929年３月８日「サンダー」］と投書に書かれたように，おおかたのビルマ民族仏教徒には異質な宗教であり，なによりも支配者の宗教であった。

第２に，このようなキリスト教徒を中心に植民地軍にカレンが多く登用されていた。もともと植民地軍におけるビルマ民族兵士はごく少なく，1927年に最後のビルマ民族の部隊が解隊された[42]。相対的に植民地軍におけるカレン，チン，カチンなどの割合は大きくなり，わけてもカレンは重用されているという印象を強くした。第１次世界大戦でのメソポタミア派兵が成功して平時体勢に戻ってから，植民地軍の主力現地民部隊であって３個大隊が配備されていたビルマ・ライフル大隊（Burma Rifles）の標準的な構成は，カレン中隊２個，カチン中隊１個，チン中隊１個となっており，たしかにカレンが多かった。19世

42　ビルマ民族からは，1887年にティーボー王下の王朝軍で兵士であったものを中心に工兵１個中隊が編成され，1914年には３個中隊まで拡充されていたが，1925年には募兵が中止された。1927年の解隊以降，1937年に印緬分離の際にビルマ国防軍が組織されるまで，植民地軍からビルマ民族兵士はほぼ完全に排除されていた［Tinker 1959：313-314］。1920年代にビルマ民族主義が高まり，政庁が忠誠に疑問のある民族からの登用を嫌ったことが最大の理由であった。

紀後半より何度かの波を形成して起こった農民反乱や反政庁武装蜂起では，カレン兵を含んだ植民地軍が鎮圧部隊としてたびたび派兵された。政庁側は反カレンの風潮に配慮してカレンの出兵を抑制することもあったが，他方で地元のキリスト教徒カレンのコミュニティが武装した自警団を結成して，こうした「ビルマ」人主体の「叛徒」と交戦することも多かった。このような植民地軍のカレン兵とカレン私兵団の存在は，トゥーリヤなどビルマ民族主義的な新聞として名を馳せていたメディアに批判的に取り上げられていた。

タインインダーでありながら政庁側の民族であるという印象をもたれた第3の理由には，バプティスト・カレンによる旺盛な民族的主張と英国植民地政庁に親和的な政治的発言という点にある。これについては以下，節を変えて検討しよう。

いずれにせよ，以上のように20世紀前半には，カレンのなかのキリスト教徒の存在感はきわめて大きいものであった。植民地体制を成り立たせている強制装置としての植民地軍で優位な位置を占め，なおかつ政治分野ではとくに親英的な傾向が濃厚であって，カレンは植民地体制の恩恵を受ける「彼らの側の民族」，すなわち「政庁協力民族」であるというイメージはすでに抜き差しならぬほどにビルマ社会に浸透していたと言ってよい。

第4節　バプティスト・カレンの自己主張

戦後の政治学的な考究対象としての「カレン」が検討されるとき，まずは19世紀のバプティスト宣教がかならずや言及される。そして19世紀末にはすでに，ビルマにおいて初めての民族組織を設立し，20世紀前半にはビルマ民族主義に対抗的なカレンのエスノナショナリズムが発露していた，それが戦後の分離主義的な運動の流れに接続し，ひいては独立ビルマの国民統合の障壁となった，と解説される。これをカレンの知識形成史を概観しているわれわれの立場から

とらえなおせば，20世紀前半にようやくカレンの語り手にバプティストのカレン自身が参画し始めたということであり，カレンとしての明確な自己主張の歴史において，現在までに判明しているさいしょの記録群という位置づけを与えることができる。

ビルマ人最初の民族組織に先立つこと四半世紀，1881年に設立されたカレン民族協会（Karen National Association：KNA）は，最初のカレンの民族的表明とされる。スミートンの著書［Smeaton 1887］はその設立を直接的に証言する英語史料として引き合いに出され，そこでは宗教的・教育的かつ民族的な目的で設立されたとされる。ほかにこの組織を扱った英語史料は，ほとんど見当たらない。牧師でもあったテオドア・タンビャ（Theodore Than Bya）が初代会長であり，バセイン，ミャウンミャ，ヘンザダ，タラワディ，タウングー，タトン，アムハースト，タボイ，メルグィ，マウービン，インセインの各県に支部があり，キリスト教徒が大部分の会員を占めていた［PRO：FO643/71/138GSO］。1920年代から30年代にかけてのカレン政治家の活発な活動は，KNA を拠点とした。しかしこれを通して，バプティスト・カレンたちがどのような自己主張を行ったのか，どのような活動形態があったのか，具体的なことはいっさい明らかになっていない。その全容解明には，モーニングスターなどのカレン語定期刊行物の検討が必要になるだろう。

タンビャは，20世紀初頭にバプティスト宣教団印刷局から３点のスゴー語書籍を出版している。19世紀より，バプティストのコミュニティで教育を受けた人々のなかからは，欧米に留学する知識人が輩出されるようになっていたが，タンビャはこのような系譜に連なって熱心な著述活動をおこなった。『カレンと彼らの迫害（The Karens and Their Persecution, A.D.1824-1854）』［Than Bya 1904］，『カレンの慣習，儀礼，そして詩（Karen Customs, Ceremonies, and Poetry）』［Than Bya 1906］，『カレンと彼らの発展（The Karens and Their Progress, A.D.1854-1914）』［Than Bya 1914］という，各々に付された英訳タイ

トルがその主張の内容を端的に示している。そこでは，ビルマ民族からの絶えざる圧政に晒され，それに対抗して独自な文化を保持し，キリスト教を受容して発展した民族という，こののちのソオ・アウンフラの著書に通底するカレンのイメージを語っている。

本格的なカレンとしての政治的自己主張は，ビルマ民族主義の高揚と軌を一にして行われるようになった。ビルマ州弁務長官下の一諮問機関でしかなかった立法参事会には，すでにスゴー・バプティストのサンC.ポー（Sir San Crombie Po）が議員として加わっていた（在任1916-1923年）。1917年，インドで開かれたモンタギュー・チェルムスフォード改革下の公聴会ではKNAがビルマにおけるカレンの権益を代表して，「ビルマはまだ自治を行うだけの状況に至っていない・・・なぜなら（ビルマは）文明度や宗教，社会的発展段階において互いに異なる多くの人種（races）が混在して」おり，「英政府下でのさらなる鍛錬が必要である」との嘆願書［San C. Po 1928：66］を提出して，YMBAの反発を買っている。さらにビルマ州総督クラドック（Reginald Craddock）による改革の際，1920年にはスゴー・バプティストのシドニー・ルーニー（Sydney Loo Nee）が，ビルマで２番目に大きい人種集団である「カレンには独立した選挙区が保障されるべき」と主張した。つづくホワイト調査委員会ではビルマ側の反対にもかかわらず，1923年以降，両頭制下の議会で130議席中５議席が割り当てられることになった［Smith 1991：51］[43]。

43　このようなカレンを標榜した政治活動の足跡は，1910年代からの植民地議会の議事録［OIOC V/9/4051-4119］におけるカレン議員の発言，もろもろの政治改革の際に刊行された政庁報告書や公聴会記録にも，そのあとをたどることができる。植民地議会（立法参事会）のカレン選挙区は，デルタ地方でバセイン，マウービン，ミャウンミャの３つ，東部でアムハーストとタトンの２つが設定された。1937年のビルマ統治法施行以後，これらの選挙区は二分割されて議席が倍増し，さらにタウングーとヘンザダの選挙区も加わった。また上院にもサンC.ポーら３人のカレン人議員が任命された。

とくにのちのバプティスト・カレンに「カレンの父」として尊崇されることになるサン C. ポーの『ビルマとカレン（*Burma and the Karen*）』［San C. Po 1928］がロンドンで出版されたのは，上記のようなカレンを取り巻く政治環境のなかでその民族的権利が損なわれかねないという危惧が動機になっていたからであった。1920年代の一連の政治状況をキリスト教徒カレンの立場から概観して，「カレンとビルマの間の協力の兆候」［*ibid.*：11-17］に言及しつつも終始，ビルマ民族に対して警戒的であり，結局はカレンとビルマの間の「完全な協力の不可能性」［*ibid.*：18-21］を論じて，少数派としてのカレンがこれ以上の不利益をこうむることのないように，「民族の切望」としてテナセリム管区をカレンに自治州として割り当てること［*ibid.*：77-84］を主張している。

このようなカレン政治家による活発な政治活動と自己主張は，よりひろいすそ野をもったカレン自身の言論出版活動にささえられていた。この点もまた，研究がまったく進んでいない。植民地政庁の出版物検閲報告［OIOC：V/25/960/44］には当時の定期刊行物のリストがあり，そこでいくつものカレン語誌の存在を知ることができる。たとえば1930年に刊行されていたものをあげれば，すでに何度も触れてきた『モーニングスター』（月刊，1400部）のほか，『フェアプレイ（Fair Play）』（隔週刊，1000部），『カレン・レコーダー（Karen Recorder）』（週刊，500部），『カレン神学公報（Karen Theological Bulletin）』（季刊，100部）などのスゴー語誌，それに『ポー・カレン日曜学校新聞』（週刊，1800部）のポー語誌があったようだ。当時のビルマ語紙『トゥーリヤ（Thuriya：英語名 Sun）』（日刊，2400部）や英語紙『ラングーン・タイムズ』（日刊，4000部）とくらべて規模は小さかったが，発行部数が極端にすく少なかったわけでもない。

ソオ・アウンフラの『プアカニョウの歴史』出版もまた，このような20世紀に入ってからとつじょ盛んになったバプティスト・カレン自身の民族的表明の文脈に位置づけるべき出来事である。既述のとおりその背景には，ビルマ植民

地社会が民族を単位に構成され，そこにおいてビルマ・ナショナリズム運動が隆盛をむかえ，「カレン」というカテゴリー一般が「政庁協力民族」との避難を受けていたことがある。先鋭化していく反カレン感情の中で，バプティスト・カレンのコミュニティは，他民族，とくにビルマ民族のナショナリストにたいして防衛的な態度をとり，内向きになっていったのかもしれない。この『プアカニョウの歴史』はスゴー・カレン語で書かれ，ビルマ人や英人の読者を想定していなかったことを考えると，先述のとおり，それがスゴー・バプティストのコミュニティの自己確認の営みのひとつであったという性格づけは妥当する。

さて，ソオ・アウンフラは，19世紀以来，連綿と積み重ねられてきたバプティストのカレン知の巨大な蓄積に恩恵を受けてカレン史を執筆したが，そこに採用されたカレンの歴史の細部には，仏教徒のビルマ人，そして仏教徒カレン人と目される人々の知識をも取り込んでいる。

第５節　仏教徒カレンの顕在化

ソオ・アウンフラのカレン史の３分の１を占めるカレン王朝興亡史の骨格は，その出版に先立つ２つの仏教カレン史書から取り込んだものであった。すでに本稿冒頭に示した，ウー・ピンニャによる『カイン王統史』（1929年出版）と，ウー・ソオの『クゥイン御年代記』（1931年）の２書である。これらの出版の背景を検討すると，これまでに検討してきたバプティストの伝統において形成されたカレンの知識とは異なったカレン像，そして統計上は圧倒的多数派のカレンでありながら，英人植民地官僚からも米人バプティストからも無視されてきた仏教徒カレン，という存在が浮かび上がってくる。それはどのような相貌と内実をもったひとびとであったのか。

カレンにおける仏教については，19世紀にさかのぼって多少の記録が見出せる。ほとんどが東部の山岳地域についてであり，たとえば初期バプティスト宣

教記録には，仏教的要素をそなえたカルト的宗教運動への言及がある[44]。また既述のとおり，植民地軍が動員された1850年代のユンサリン川流域とデルタの「カレン反乱」には，ミンラウン（未来王）という仏教的な表徴がふくまれている［NAD：1/1（A）181］。そして，この東部山岳地域の南方，現在のパアンの平野地方では，上ビルマに中心をもつ上座仏教につながりをもつオーソドックスな仏教がカレン語話者のあいだに信仰されていた。19世紀半ばからはこの地方の僧院で，ポー・カレン語の貝葉経典が多数生産されて，「ポー・カレン・サンガ」［Womack 2005：127］とのちに形容されることになった。しかし，のこされた仏典の内容を検討してみれば，そこにはかならずしも「カレン」なるつよい民族的表出は見いだせない。それはむしろ，カレン語話者をより普遍的な仏教世界に結びつけるための「ポー・カレン文字」の創出，それを使用した貝葉経典の生産であったと評価できる。

1929年に『カイン王統記』を出版したウー・ピンニャは，この地方におけるカレン仏教と王統の伝統に依拠してカレンの歴史を紡ぎだした。それによれば，カレン（カイン）にはシャン・カレン，ビルマ・カレン，モン・カレンという，おのおのビルマ領域で主要な他民族の名称を冠した３種類の系統があり，過去に４つの王統が存在した。そのうちモン・カレンのゼーヤーとパアーワナという，パアン地方に拠点をもったふたつの王朝が記述の中心となっている。このような王統史の詳細が具体的細部をともなって描かれるわけであるが，ウー・ピンニャが１書を成してまで主張しようとしている事柄は，カレンがビルマやモンなどの他のルーミョウと同源であり，始原から仏教徒であるということである［池田 2009］。そしてウー・ソオもまた似通った主張を行っている。

２つの仏教的カレン史書の出版には，ここでも，民族社会の成立とビルマ民

44　19世紀の東部山地におけるカレンの仏教的な宗教運動に着目し，こまやかな史料発掘をおこなったのは，戦後にタイ・カレンを対象とした人類学者であった。

族主義の高揚が関係している。前述のとおり，ビルマ植民地社会におけるキリスト教徒カレンの存在感のゆえに，20世紀前半のビルマで「カレン」といえば「政庁協力民族」であるという固定観念が出来上がっていた。このようなイメージをとくに吹聴したのは，このころから英政庁に対して自治権拡大運動を繰り広げていたビルマ・ナショナリストであり，それを支えるビルマ民族を自覚するビルマ語話者たちであったようだ。カレン一般が「野蛮な民」という誹りを受けるに至り，カレンを自覚する人々の中でも仏教を信奉する人々が反駁をせざるを得なくなる[45]。この反駁の最初の声がウー・ピンニャとウー・ソオのカレン史であった。これら2書においては，カレンがビルマ仏教世界において野蛮ではないこと，つまり，始原から仏教を奉じる王権を保持した民族のひとつであることを，ビルマ語によって，ビルマ語読者に向けて，ビルマ語世界に特有の論理を駆使しながら証明することに主眼があった。

だが，1920年代に，ビルマ・ナショナリズムの中でのカレン批判に反応したカレンの仏教徒はまだ限定的であったろう。カレンとしての反駁は，都市部に住むウー・ソオのような公務員やウー・ピンニャのような作家，僧侶たちの知識人のあいだから始まったはずだ。この時代，外から名づけられたところの「カレン仏教徒」，つまり1931年国勢調査に76.74％という数値で表現された「カレン仏教徒」は，その大部分がバプティスト・カレンのような強固な民族意識を持っていなかった。あるいは，同じ仏教を信仰するビルマ民族やモン民族への信頼感にささえられ，カレンというアイデンティティに依存する必要がなかった。しかしこののち，日本占領下のミャウンミャ事件［池田 2005］や独立交渉期の政治［池田 2000］，独立直後の内戦，タイ国境部を中心とした民族紛争をとおして，「カレン」をめぐる民族政治は深刻の度を深めていく。さらにカ

45　このような具体的な事例として，1929年前半にトゥーリヤ紙上で繰り広げられた「カレン映画論争」がある［池田2008：100-117］。

レン州設立によって，カレンの歴史・文化の知識は公的に収集・編纂されていった。この過程で，ビルマにおける仏教徒カレンらが，みずからのカレンという民族アイデンティティをより明確に引き受けて行ったことは想像に難くない。

このような仏教徒の側で積み重ねられたビルマ語やカレン語による「カレンの知識」は，キリスト教徒側のカレン知とはほとんど無関係に成立し，無関係なところで蓄積されていった。ソオ・アウンフラは，ウー・ピンニャとウー・ソオの仏教カレン史を，その仏教色を払拭して取り入れた。しかし，このようなふたつの知識系統の統合の努力はむしろ例外的である。じっさいのところ，ビルマ世界外でひろくゆきわたったカレン知はバプティスト起源のものであり，本節で描いたところの仏教カレンの知識はほとんど，顧慮を払われることはなかったといってよい。

たいしてビルマ国内では，1951年にカレン州が設立されて，ほかに州を付与されたアラカン（ヤカイン），チン，カチン，シャン，カレンニー（カヤー），モンとともに，カレンは主要民族に数えられることになる。これらの民族について，民族文化を公的なかたちで認定する動きが活発になる。これと対応して，カレンの仏教文化が連綿として受け継がれてきたことを書き示すビルマ語，カレン語の書籍が出版されるようになった。とくにパアン地方のカレン仏教に材を取った著作物は数多く出版されてきた。例えば，マン・リンミャッチョウとマン・ティンナウンはともに著名なポー作家で，前者には『カイン文化の記録』［Lin Myat Kyaw 1970］や『カイン慣習文化の集成』［1980］，後者には『東ポー・カイン』［Thin Naung 1978］，『カイン州の美』［1981］，『パアン市』［1984］などの著作がある。最近のものでは，ソオ・アウンチェインの『原民族カインの歴史・文化とカイン州小史』［Aung Chain 2003］がある。また，この地方の仏塔寺院縁起も多く見られ，ズウェカビン山にゆかりのある寺院・仏塔に関しては『ズウェカビン仏塔縁起』［Loung Khin 1965］や『ズウェカビン寺院新史』［Zagara

1966］が代表的である[46]。このようにして，植民地期にはほとんど民族的な実体をうかがい知ることのできなかった仏教徒カレンは，ビルマ独立後，確かな輪郭と核心をそなえた民族，ルーミョウとしてビルマ世界の一部となっている。

第6章　ビルマ独立後のカレン記述

はじめてのキリスト教徒著者によるカレン史書の分析と定位，そしてそれを可能とするカレン知識の形成史の俯瞰，という本稿のふたつの課題の範囲はほぼ検討を終えた。以下ではビルマ独立後のカレン知識の形成動向を概観することにして，とくに政治学的研究におけるカレン叙述，言語学的な対象としてのカレン，そしてタイに場を移した人類学的考究の対象としてのカレンという3点のみ，1970年代くらいまでを範囲としてかいつまんで言及したい。

第1節　独立とカレン

1941年12月の太平洋戦争の開戦に始まる1940年代は，ビルマ近現代史上の画期となった。植民地期と独立以後の国民国家期にはさまれた，日本占領期（1942～1945）と独立交渉期（1945～1947）という，ビルマ政治史のうえでの転換期である。この時期には，1942年初頭の日本軍によるビルマ侵攻，英国植民地政庁のインド・シムラへの退去，1945年の日本の敗戦と政庁の復帰，アウンサン主導のタキン党による独立交渉，1948年1月の独立，それにつづく内戦など，のちのビルマにおける国家のあり方，社会の様態を大きく規定することになる出来事，したがってのちの研究の主題となった政治・社会変動がこの時期に

46　これらカレン仏教も含めてビルマ語とカレン語の出版物に関しては，ヤンゴン大学図書館情報学部にディプロマ論文として提出された，カレン関係の書誌目録［Nilar Tin 1991；Aung Thein 1999など］に詳しい。

次々と生起した。

このような一連の流れの中で，なんと言っても主役の扱いを受けてきたのは，1930年代に勃興し，日本軍と結託するかたちで英国植民地勢力をビルマから駆逐，つづいてファシスト日本もビルマから追い落として，復帰した英国を相手に交渉を重ね，ついには独立という偉業を達成したタキン党であり，その独立の道半ばにして凶弾に斃れた英雄としてのアウンサンという指導者であった。また，日本軍特務機関の指導の下，開戦直後に設立されたビルマ独立義勇軍（BIA）は，日本占領期における幾度かの再編を経て国軍の地位を得て，独立を通して旧植民地軍の一部を吸収しあるいは放逐して，ついには1962年の軍事クーデターの際に政権の座についたネーウィンの権力基盤となった。ネーウィンに始まる軍主導の統治体制は，1988年の民主化運動の高揚をはさんで現在に至るまで存続している。国軍という体制側，あるいは「国父」アウンサンとその息女アウンサンスーチーを象徴に戴いた民主化運動の側においても，1940年代に主役に上り詰めたタキン党の系譜に連なる人脈が大きな源になっている。したがって，戦後のビルマ近現代史研究が，このタキン系譜による政治を主題としてきたことは当然であったろう。

日本占領期から独立交渉期にいたる転換期はまた，カレンをめぐる政治の季節でもあった。まず，日本占領期の冒頭，1942年３月から６月にかけて，BIAと日本軍が入緬し英植民地勢力が退去する混乱のなか，デルタ地方と東部山岳地方で深刻なカレン＝ビルマ民族紛争が勃発した。ビルマ・ナショナリストを中心とするビルマ民族を一方に，多様でまだまとまりのなかったカレンを他方にして，植民地時代にはまだ言説上のものでしかなかったビルマとカレンの民族対立が現実化した。この事件はさらに，それまで民族名を共にするのみでしかなかった「カレン」内部のキリスト教徒と仏教徒に，民族の名の下の経験，ビルマ民族を敵とする民族的経験を史上初めて共有させた［池田 2005］。また，日本占領期末期の抗日一斉蜂起にはタキン主導の抗日蜂起部隊に，諸民族中で

唯一カレンが部隊を参加させている［池田 2012］。そして独立交渉期においては，ビルマ独立に際してカレンを名乗る諸勢力がこぞって政治的権利を主張しはじめ，カレンのための新たな自治州設立をめぐって独立そのものを脅かすカレン政治が展開した［池田 2000］。このような一連の「カレン」をめぐる政治をとおして，カレンという民族的自覚は確実に，広範に，深まっていった。

ビルマ独立後，以上のような政治過程とともにカレン知識の形成史においても，あらたな展開が訪れた。まず，米人バプティスト宣教師と英人植民地官僚という，従来カレンを直接的見聞のもと宣教の対象，統治の対象として描いてきた二大記述者がビルマの独立によって，カレンのもとから，ビルマという地域から去って行った。これによって，植民地時代に膨大に集積された米人バプティスト宣教師による宣教記録と英人官僚による行政記録は，ふたたび更新されることのなくなった歴史的な「史料」に変貌した。そしてカレンから離れた場所でカレンについて知ろうとする欧米をはじめとする外部世界の観察者たち，研究者たちは，「カレン」についての過去と情報を，まずはこの「史料」に求めることになった。それは膨大に集積され，一貫性があり，英語で書かれて読みやすく，そしてなにより「カレン」を直接的かつ直近で証言する，ほかでは手に入らない貴重な史料群であった。

ところで，すでに述べたように，カレンを証言するバプティスト文書はそのほとんどがキリスト教徒を受容したカレンか，あるいは宣教のフロンティアを形成する山岳部の精霊信仰者を対象としていた。英人植民地官僚もまた，カレンと言えばキリスト教徒か精霊信仰者を念頭に記述を行っていた。くわえて，植民地期には仏教を信仰するカレンはまだまだ民族的自己主張をおこなっていなかった。こうしてカレンの過去を証言する史料は，宣教師と植民地官僚によるキリスト教徒あるいは精霊信仰者のカレンのみが参照されるようになった。

さらに，ビルマ独立後に政治学的，人類学的な研究についてカレンにかかわる研究者を多く輩出した米国における事情もあろう。カレンのあいだに宣教し

たジャドソンは，それまで旧大陸から宣教を受ける立場にあった米国から初めての海外宣教に乗り出し，そしてビルマのカレンにおいて米国海外宣教史上で最大の成功をもたらした宣教師の英雄であった。したがって米国側から見るとカレンとは，ジャドソンの存在とあいまってなににもましてキリスト教徒の民族としての認知が確立している。

これらの史料群から，「キリスト教徒」であり「親英」的かつ「反ビルマ」的な「カレン」像を析出することは極めて容易なことであった。1948年のビルマ独立以降，ビルマの外の世界でカレンは，政治学と人類学の対象という２つの相から記述されていくことが主流となる。そしてとくに前者の政治学的研究のなかで，上記のような「キリスト教徒」・「親英」・「反ビルマ」というイメージが典型的に再生産されることになる。また後者については，1960年代から国を閉ざすことになるビルマに代わって，隣国タイにおける「山地民」としてのカレンを対象に研究が深められることになる。

国外の学界におけるカレンを対象とした研究動向の検討にうつる前に，現地でのビルマ人側にとっての，独立後の「カレン」について簡単に触れておきたい。ビルマ民族・仏教徒の背景をもったタキン系の統治主体が政治権力の座を占めることになる戦後史のなかで，カレンをめぐる歴史認識はつねに植民地期の「分割統治」＝「独立後の民族問題の根源」という言説と裏腹の関係となっていた。つまり，独立後にいよいよ膠着化して激化していく民族問題は，戦後タキン系諸政権にとっては英国による「分割統治」の負の遺産であり，その最たる例がKNUに代表されるカレンの存在であった。そこにおいて前提されている，「分割統治」されて優遇された「カレン」はむろん，「キリスト教徒」であり「親英」的で「反ビルマ」的な人々である[47]。同時に，５章５節で指摘し

47 「分割統治」＝「民族問題の根源」という構図は独立後，教科書やありとあらゆる局面で繰り返され，当のビルマ人どころか国外の研究者のあいだでもほとんど常識化している。だがそれは同時に，タキンの民族問題についての実際上の政治的・

たように，カレン州の設立がもたらした「カレン」の存在の公定化は，その仏教的な要素を前面に出したカレンの文化・歴史などの実体化を生み出して，従来の「キリスト教」をめぐる否定的なイメージと併存しつつ，カレン・イメージの多様化が進行している。

第２節　政治学的研究におけるカレン

独立後における政治研究の対象としてのカレンは，上記のようなタキンの系統にあった諸運動による政治展開を主軸に据えたもろもろの研究の中で，いわば背景の一部としてはじめに記述された。1950年代後半から1960年代にかけて，ビルマ独立までを範囲に含んだビルマ通史や概説書が出版されている。ケイディとトレイガーによる近現代通史［Cady 1958；Traeger 1966］，そしてティンカーによる独立期を中心とした政治史［Tinker 1959］などである。またファーニバルは主に植民地期の統治を主題にした著書［Furnivall 1956（1948）］で有名であるが，独立後のビルマ政治についても一書をなしている［Furnivall 1960］。これらの書物においてカレンに関しておおむね共通して記述対象となるのは，主に以下の５つの点であろう。それらは，①19世紀以来のバプティスト宣教によるキリスト教化，②19世紀末のKNA設立にはじまるカレン民族主義運動，③日本占領期冒頭におけるカレン＝ビルマ間の民族衝突，④独立交渉期における政治，そして⑤内戦期のKNUによる武装蜂起，である。

このような通史や概説書におけるカレン記述の特徴的な点は，おもに以下の２つの点にまとめられる。第１は，そのカレンに関する基礎的な情報と基本的な理解を，やはり植民地期に膨大に積み上げられた，主に英語による，バプティ

歴史的責任を都合よく回避させることのできる構造的な説明回路を提供してきた。この点はタキン史観にまつわる問題として，別に論じるべき課題である［池田 2012］。

スト系の史資料と英国植民地官僚らの行政記録や文献資料に負っている，という点である。ファーニバルは植民地官僚出身であり，ラングーン周辺地域におけるバプティスト・カレンの中心地であったインセイン県の地誌［Government of Burma 1914a］も執筆していて，ことに彼らと親しかった。また，ケイディも米国バプティスト宣教団本部の要請を受けて，ラングーン大学ジャドソン・カレッジの教授として赴任し，植民地期末期の数年間に滞緬した［Cady 1983］。これらの研究の対象とされるカレンは，国勢調査のうえではカレン総人口の１割強を占めていた，明確にキリスト教徒カレンと言われる人々であった。

第２に，王国から植民地国家を経て国民国家にいたる国家体制の変遷を画期とし主要な枠組みとする政治史が基本的構図となっていて，そうであればこそ，その視座に拘束されてカレンは必然的にこの流れにおいては異質な勢力として表現される。国家／国民形成においては主役になり得なかったカレンは，植民地期におけるキリスト教徒主体の親英的な政治勢力，日本占領期にタキン勢力と衝突した親英分子，独立交渉期におけるタキンにとっての抵抗勢力，さらには内戦期の反タキン中央政府勢力へと，容易に連なって描写されていく。

これらの通史・概説書は，後続の諸々の論文・研究書の末尾文献リストに常に付されるビルマ政治史研究の「古典」となった。そしてこれらの古典を直接的な資料としてカレンを事例のひとつとして語る，二次研究や比較研究がおおく続くことになる。

ひとつふたつ例を挙げるとすると，日本語で書かれた研究である『カレン族問題とビルマの苦悩』［飯島 1967］と『国民形成と少数民族問題―ビルマにおけるカレン族の悲劇―』［飯島 1974］は，この「古典」に主に依拠して書かれた初期の論考の典型である。両論考には７年の隔たりがあるが，ともに植民地期から1960年代あるいは70年代までのカレンの歴史を概観して同様の結論を導いている。そこではカレン問題が，「東南アジア諸国の国民形成と少数民族問

題のなかで，もっとも悲劇的であり，不幸な事例の典型」として描かれる。初期の宣教師の「純粋な気持や情熱を疑う余地はないが」，「イギリスの植民地支配に迎合し，また癒着して」いたためにカレンとビルマ民族のあいだを分け隔てる「分派主義」を生み出した［*ibid.*：133］と，ファーニバルの「分割統治」に関する分析［Furnivall 1960：22］に依拠して結論付けている。

飯島の論では，うえの「古典」における第1のカレンについての情報上・理解上の制約が，カレンとはキリスト教徒であるという断定に短絡する。また，第2の基本的構図が，カレン＝ビルマ民族の確執という現状は植民地期のバプティスト宣教と植民地体制下の分割統治政策に原因がある，と遡及的に理解されていることが見て取れよう。このような政治問題としてのカレン理解のありかたは，現代ビルマ史における「少数民族問題」のひとつ［桐生 1969］，既存の国民国家から武力を伴う分離主義の一事例［Silverstein 1980］，東南アジア諸国家におけるエスノ・ポリティックスの一要素［Brown 1994］といった相のもとで二次研究において繰り返され，現在に至るまで支配的な見方である。

これ以降，カレンに言及した政治学的な研究は多いが，簡単に傾向をまとめてみれば以下のようになろう。すなわち，戦後のビルマ政治史研究における「カレン」とは，依拠される資料の点で，英語を主とした，バプティスト史料や英植民地官僚による文献や行政文書にあるキリスト教徒カレンである。研究の視点のうえでは国民国家形成研究という時代の動向に強い規制を受け，国家／国民を形成しえた主流のナショナリズム運動の背景に定位される。したがって扱いの上では「少数民族問題」，あるいは既存の国家／国民の枠組みからの独立を企図した「分離主義」の典型と性格づけられる。そして原因と起源の分析には，植民地期のバプティスト宣教と「分割統治」が常套句として用いられることによって描かれてきた。

第３節　言語学の成果

独立後のカレンに関する研究の２つの大きな潮流のうち，のこされた一方，つまりタイにおけるカレンを対象に進められた人類学的研究史を見るまえに，言語学の分野で蓄積された「カレン」についての知見を瞥見したい。

言語学的なカレン研究史のうえでも，植民地期のバプティスト宣教師や植民地官僚の記録の中にその先行的な文献を見出すことができる。既述のように，カレン語においてスゴー文字は1832年，ポー文字の原型も1830年代にウェイドによって考案され，後者はブレイトンによって1850年代に正書法が確立している。おなじくウェイドによってスゴー語の辞書［Wade 1847-1850；1849；1883］と文法書［1861］，メイソンも文法書［Mason 1846］に出版していて，ほかにもギルモアやカンヂーの文法書［Gilmore 1898；Kan Gyi 1915］もある。ポー語のほうは遅れて，20世紀に入ってからダッフィンやパーサーらの文法書［Duffin 1913；Purser and Tun Aung 1922］が出されている。カレン・アイデンティティの核心としての言語については，いわば，19世紀以来バプティスト宣教師が中心となって，カレンが確かに他民族とは異なる民族であるということを，その証拠を構築しながら証明していったともいえよう。こののちの言語学はバプティスト宣教の遺産を継承して，スゴーとポーからさらに対象の裾野を広げていく。

専門化した言語学の対象としてのカレン諸語については，この地域のビルマ語やタイ語・シャン語，カチン語やチン語などその話者の居住圏が重複または近接する他言語との関係性，通時的観点のうえでのカレン諸語内の分化・分類，そしてより広い言語系統樹のうえでの位置付けなどが，学問的関心となって研究されていった。すでに1918年ギルモアは音声学的な手法を用いて，スゴー語とポー語のビルマ語からの影響度合いから，両語話者のこの地域への来住年代を割り出

す試みをしている［Gilmore 1918］。またルースは，それぞれカレン，スゴー，タウントゥ（パオ），ポーと比定されるKaryaṅ（1238年ごろ），cakrawとcakrow（1242年ごろ），toṅsū（1165年など），plaw'（1238年など）の語が，12～13世紀のビルマ語碑文に見えるとしている［藪 2001a：1314；Luce 1931；1959］。

戦後においてカレン語の言語学的研究を大きく前進させたのは，まずもってオードリクールであった。彼はスゴー語とポー語の比較研究を通して，史的音韻論によってカレン祖語（le Karen commun）を再構築し，ここにおける「有声音の系列が，スゴー・カレン語では無声無気音に，ポー・カレン語では無声有気音に変化した」［加藤 2004a：8］との説を立てた［Haudricourt 1946；1953］。オードリクールの学説は，ルースによるブゲェーやパク（Paku）語の研究［Luce 1959］と，ヘンダーソンによるブゲェー語の調査研究［Henderson 1961；1979；1997］を通して正しいことが証明された。またジョーンズも，バセイン・スゴー, モールメイン・スゴー, バセイン・ポー, モールメイン・ポー，パオ，パラチー（Palaychi）の6つの言語調査［Jones 1961］を行い，カレン祖語（Proto-Karen）にさかのぼるカレン諸語の分類を示しているが，このカレン祖語の直下にパオ＝ポー（Taungthu-Pwo）とパラチー＝スゴーを分けているところに特徴がある。これに対して西田は，その直下をスゴー＝ポー＝パラチーとパオに分類しなおしている［西田 1964］。このようなカレン諸語分類の試みは，クックらによるタイのポー［Cooke et.al. 1976］，加藤による東部ポー語［1998b；2001c；2002；2003；2004a；2004b；Kato 2003］，その他のスゴー語などを対象とした言語誌の集積と理論的検討によって深められていった。わけても新谷は，20近いカレン系諸語の調査とデータ分析に基づいて，音韻変化を遡り「ブラカロン（Brakaloung）」を想定されるカレン祖語における自称とする系統樹［Shintani 2003］[48]を提起して，「最も信頼に足る」［加藤 2004：8］

48　新谷はこの系統樹において，まず「パオ」と「カレン」とに分け，「カレン」下

説として受け入れられつつあるという。

他方，より広範なシナ・チベット（Sino-Tibetan）諸語におけるカレン系諸言語の位置付けはながらく諸説紛々としてきた。シナ・チベット諸語下の言語分類は，20世紀初頭から始められた大英帝国インド領における言語調査の際に，グリアーソンによって最初に試みられた［Grierson 1903-1927］。戦後にシェーファーが，ここに含まれる諸語を音価の一致（phonetic equation）という基準によって，漢語群（Sinitic），タイ語群（Daic），チベット語群（Bodic），カレン語群（Karenic），ビルマ語群（Burmic），バラ語群（Baric）の6語群に分類した［Shafer 1966-1974］。こののちに，ベネディクトが示した系統樹の影響力は大きかったといい，シナ・チベット諸語はまずチベット＝カレン語群（Tibeto-Karen）と漢語群（Chinese）に，前者の下位にチベット＝ビルマ語群（Tibeto-Burman）とカレン語群が分けられている［Benedict 1972］。現在ではマティソフの所説［Matisoff 2003］が最も有力とされ［加藤 2004：8］，シナ・チベット諸語をチベット＝ビルマ語群と漢語群，そして前者の直下にカレン語群（Karennic）とその他のチベット＝ビルマ語群（Other Tibet-Burman）を配置している。

いずれにせよ，このような言語学上の理論的検討から明らかになるのは，カレン系諸語が，系統樹のうえで漢語群とも比肩しうる，別個のカテゴリーを立てるに足る，この地域のほかの言語からは際立って独自な言語であるということだ。しかしながら同時に，言語学の蓄積が示す「カレン」語の独自性と一体性は，歴史社会学的な意味での独自で一体感のある「カレン」意識の成立とは区別されなくてはならない。人類学者のカイズは，タイ西部のメーサリアン地方で出会ったパオ語話者が自らをシャンの一派だと考えていたことを引き合いに出して，「カレンのアイデンティティと（本来的に）関係付けられるべきは，

に「カヤー＝パダウン」，「ブゲェー」，「スゴー＝ポー」の3言語を配置している。

カレン人自身によって保持された，カレン語は他言語とは異なるという文化的信念（cultural belief）であり，カレン諸語の客観的独自性という言語学的事実ではない」［Keyes 1979b：11］としているが，これは重要な指摘である。

第4節　タイ・カレンの人類学

カイズの指摘の背後にある態度に見られるように，民族を本質化せずに動員主義的にカレンにアプローチする見解をごく常識的な方法論にしたのは，タイにおけるカレンに研究の対象を移した人類学的研究の流れのなかでのことであった。そこでは，ビルマ植民地期に膨大に集積された史資料にとらわれず，新たなカレン理解が民族誌の蓄積と民族理論の検証・更新の試みのなかから生まれた。ここではそのごく一部，1970年代ころまでの動向に限って瞥見してみたい。

タイにおけるカレンは，タイ総人口の1％程度を占める「少数民族」のなかでは最多の35万人（1996年）の人口を擁して，主に北部と西部山地にスゴーとポーを中心に分布している。おおかたの人類学者がこれらのカレンを対象に研究調査を始める頃にはすでに，タイ政府が，インドシナ戦争を背景とした共産ゲリラへの対処，のちには麻薬生産流通の対策を通じてカレンを「山地民（チャオカオ）」のひとつとして，山地民政策の対象に組み入れていた。初期に行われたタイ・カレンの研究には，トラクストン［Truxton 1958］，ハミルトン［Hamilton 1963；1965］，スターン［Stern 1965］，飯島［Iijima 1965］，クンステッダー［Kunstadter 1967；1969］，ヒントン［Hinton 1969］，マーロウ［Marlowe 1969；1970］などが見出される。

このような北・西部タイをフィールドとする民族誌の蓄積を通して，この地域のカレンをエスニシティ理論の実験場とする試みは，*A Pivotal or Marginal People；The Place of the Karen in Southeast Asia* をテーマとしたアジア学会

（Association for Asian Studies）の1971年年次研究大会開催につながった。これに参加した研究者の中で，ビルマにおいて調査を行ったのは，カヤー研究のレーマンのみであった［Lehman 1967］。こののち，この大会を組織したカイズが中心となって，スターン，ヒントン，飯島，クンステッダー，マーロウ，レーマンが寄稿した論集 *Ethnic Adaption and Identity*：*The Karen on the Thai Frontier with Burma*［Keyes 1979］は，タイ・カレン人類学の金字塔となっている。ここでは，戦前から戦中にかけて植民地官僚として滞緬し北部ビルマのカチンの社会を素材として『高地ビルマの政治体系（*Political System of Highland Burma*）』［Leach 1954；リーチ 1995］を著したリーチの理論的関心や，民族集団とその構成員の認定は共通する文化的要素によって行われるのではなく構造的な対他関係の中でそのエスニックな境界はつねに流動的であることを指摘したバルトの議論［Barth 1969］に触発されて，カレンの民族的アイデンティティを隣接の対他（民族）関係，宗教，言語，タイ社会などの文脈のもとに論じることが企図された。

ビルマにおけるカレンの歴史を主題とする本稿の立場からすると，従来，共時的視点を偏重しがちであったタイ・カレン研究に鑑みて，この論集でカイズがタイ語の年代記やバプティスト史料を駆使してタイにおけるカレンの歴史の再構築を試みていること［Keyes 1979c］は注目に値する。こののち，レナードはタイ社会への編入過程を論点に含んだより緻密なタイ・カレンの歴史を博士論文としてまとめているし［Renard 1980］，ウィルソンもタイ語史料を使用して論文［Wilson 1978］を発表している。いずれにせよ，カイズ論集をおおよその分水嶺としてカレンはおおいに研究対象として注目を受けるにいたった感があり，以降，タイ・カレンの人類学の領域では，環境や林業，生態学，ジェンダー，観光，難民，山地民政策などの論点に拡大しながら多岐にわたる研究が行われるようになった。

おわりに

本稿の課題は，はじめてのキリスト教カレン史書の基本的条件の検討と，カレン知識の形成史の概観であった。本稿をしめくくるにあたって，ソオ・アウンフラの位置づけについてのみ，簡単にまとめておきたい。まず，そのカレン史を構成する基本的な知識・情報の出所は，おおよそ２種類に特定できた。それらは，第１にメイソンによる集成を経た19世紀以来の主にバプティストによるものと，第２にウー・ピンニャとウー・ソオのカレン史である。

第１について，端的に言えば，ソオ・アウンフラが出発点に据える３つの基本的問い，（１）プアカニョウの祖先は誰であるのか。（２）彼らは本当はどこから来たのか。（３）彼らは独自の文字や宗教や文化，とくに上のような問いに答える伝統やフォークロアを持っているのか，という３点はすべて，バプティストによるカレン知識形成の最初期で，すでにメイソンの段階までに見出されていたものであった。ソオ・アウンフラ自身はメイソンを文献として参照はしていないが，マクマホンやマーシャルなどの著書をとおしてメイソンの薫陶を十分すぎるほどに受けていた。ソオ・アウンフラにおいて，19世紀バプティストのカレン観がより原理主義的に濃縮されたかたちで再現されることとなったといってもよいかもしれない。

第２については，バプティストの伝統の中から得ることのできなかった，ソオ・アウンフラのカレン史の中では３分の１の分量に相当するカレンの王朝史の叙述を，ウー・ピンニャとウー・ソオのカレン史から流用してきた。メイソン，マクマホン，スミートン，そしてマーシャルの書物におけるカレンの記述には，太古のカレン入緬以降19世紀以前までのカレン史が扱われていない。これは，いずれの著者も入緬以前のカレンの出自，つまりは「失われたユダヤの民」という起源に大きな関心を寄せ，入緬後のカレンのありようについては直

接的な史料を見出せなかったことによる。ソオ・アウンフラは，このカレン史の「空白」に独自の歴史を書き込んでいった。そして，その具体的な叙述には，ウー・ピンニャやウー・ソオが詳述し細部を彫り込んだカレン史を流用して仏教色を排除し，キリスト教的な世界観・歴史観を骨格にキリスト教のカレンの歴史に再構成した。

ではソオ・アウンフラはなぜ，このキリスト教的なカレン史を執筆したのか。はっきりとした動機の開陳はなく特定はできない。しかしソオ・アウンフラはこの書物出版までに７年を費やしていることを述べている。すると1932年ごろ，つまりウー・ピンニャの書籍（1929年出版）とウー・ソオのもの（1931年）の直後に準備を始めたことになることから，これら仏教徒著者のカレン史出版を受けて発奮したものと推測される。だが，ソオ・アウンフラのカレン史は，仏教徒著者らによるビルマ語によってビルマ語話者に向けて書かれたカレン史とはおおいに異なっている。それは，カレン宣教最初期の19世紀初頭に考案されたスゴー文字によって，バプティスト・スゴーのために書かれ，その宣教過程で集積されたカレンに関する知識が盛り込まれ，そこで育まれた民族観を正統に継承し，なおかつ1920年代以降に社会的に発言を始めた仏教徒カレンの知識を包摂して改変し，バプティストの出版社によって印刷され，その教会や学校を結節点とした広大で密なネットワークに乗って流通し，そしてバプティスト・スゴーに読まれた。ソオ・アウンフラのカレン史には，ビルマにおけるバプティスト・カレンのネットワークの広がりと深みとが投影されていた。

参考文献

１．未公刊史料

1/1（A）181　Karen Minlaung in Yunzalin.（ミャンマー国立公文書局：NAD）

FO643/71/138GSO　1946　Reconstruction：Karen Organizations.（英国国立公文書

館：TNA）

V/9/4051-4086　Burma – Legislative Council Proceedings（Debate）, 1897-1936.

V/9/4087-4100　Burma – Proceedings of the First House of Representatives, 1937-1941.

V/9/4101-4119　Burma – Proceedings of the First Senate, 1937-1940.

V/25/960/44　Annual Statement of Newspapers and Periodicals published in the Province of Burma, 1926-1940（以上４点，大英図書館オリエンタル・インド省コレクション：OIOC）

２．ビルマ語文献

Aung Chain, Saw. 2003. *tâinyîndhâ kayin lumyôumyâ î thamâincâun yincêihmu hnîn kayin pyine hpyi'zinacîin.*［原民族カインの歴史・文化とカイン州小史］Yangon：sêinyaunshein sapeitai'

Aung Thein, Saw. 1999. *kayin pyine sasùsayîn.*［カイン州に関連する書誌目録］ヤンゴン大学図書館情報学部提出ディプロマ学位論文

Hpoun Myint, U. 1975. *bou'dabatha pôukayin peiza thamâin.*［仏教徒ポー・カレンの貝葉文書の歴史］Yangon：thàpyeûsapetai'

Lin Myat Kyaw, Mahn. 1970. *thìhma'bwe kayin yôuya.*［カイン文化の記録］Yangon：shweimôu sapeiyei'tha.

————. 1980. *kayin yôuyathùtapadeitha.*［カイン慣習文化の集成］Yangon：sapeilôkàpounhnei'tai'.

Loung Khin, Mahn. 1965. *zwêkabin zeidi thamâin.*［ズウェカビン仏塔縁起］Maulamyain：n.p.

Nilar Tin, Ma. 1991. *kayin tâinyîndhâ hsain ya sasùsayîn.*［原民族カインに関連する書誌目録］ヤンゴン大学図書館情報学部提出ディプロマ学位論文

Paw, Thra Saw. 1983. *kayin ì mulàzi'myi'*（*The Roots of Karen, Part 1.*）［カインの起源第１巻］Yangon：（カレン民族新年祭開催委員会）

Pyinnya, U. 1929. *kayin yazawin.*［カイン王統史］Yangon：thurìyà thadîzatai'

Saw, U. 1931. *kùyin maha yazawin dojî.*［クゥイン御年代記］Yangon：amyôthâ sapounhnei'tai'.

Thin Naung, Mahn. 1978. *ashèi pôu kayin.*［東ポー・カレン］Yangon：sôumôumei'hse'.

————. 1981. *kayin pyine ahlà.*［カイン州の美］Yangon：sapeilôkàpounhnei'tai'.

————. 1984. *myòu pâan.*［パアン市］Paan：cohtwûnsapei..

Thuriya Dadhinza［The Sun，トゥーリヤ新聞］1929年３月８日「サンダー」投稿記事

Zagara, U. 1966. *zwêkabinpay â thamâin thi'*.［ズウェカビン寺院新史］Yangon：n.p.

3．カレン語文献

Aung Hla, Saw. 1939. *þgaMkaňô ali'M taLciFsoMtêsoM*［The Karen History.］Bassein：The Karen Magazine Press.

Theodore Than Bya, Saw. 1904. The Karen and their persecution A.D. 1824-1854. Rangoon：American Baptist Mission Press.

————. 1906. *Karen Customs, Ceremonies, and Poetry.* Rangoon：American Baptist Mission Press.

————. 1914. *The Karens and Their Progress, A.D.1854-1914.* Rangoon：American Baptist Mission Press.

Wade, Jonathan, and Sau Kau-Too. 1847-50. *Thesaurus of Karen Knowledge, Comprising Traditions, Legends or Fables, Poetry, Customs, Superstions, Demonology, Therapeutics, etc., Alphabetically Aarranged and Forming a Complete Native Karen Dictionary, with Definitions and Examples, Illustrating the Usages of Every Word.* Tavoy：Karen Mission Press

————. 1849. *A Vocabulary of the Sgau Karen Language* Tavoy：Karen Mission Press.

4．英語文献

American Baptist Mission Union. 1900. Annual Report of American Baptist Mission Union

Anderson, Courtney. 1956. *To the golden shore：the life of Adoniram Judson*. Boston：Little, Brown.

Barth, Fredrik. 1969. *Ethnic groups and boundaries：the social organization of culture difference*. Boston：Little, Brown and Company.

Binney, Juliet P. 1880. *Twenty-Six Years in Burma：Records of the Life and Work of John G. Binney, D.D.* Philadelphia：American Baptist Publication Society.

Beaver, Raymond W. 1963. The Pwo Karen Churches. in *Book II, Burma Baptist chronicle.* edited by Genevienve Sowords and Erville Sowords. pp. 327-337. Rangoon：Board of Publications, Burma Baptist Convention.

Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan, a conspectus*. Princeton-Cambridge studies in Chinese linguistics, 2. Cambridge：University Press.

The Board of Managers of the Baptist General Convention. 1828. *The Baptist Missionary*

Magazine.

The Board of Managers of the Baptist General Convention. 1844. *The Baptist Missionary Magazine*. Volume XXIV. Boston：Press of John Putnam.

Brown, David. 1994. *The State and Ethnic Politics in Southeast Asia*. London and New York：Routledge.

The Burma Research Group. 1987. *Burma and Japan：Basic Studies on Their Cultural and Social Structure*. Tokyo：Burma Research Group［ビルマ研究グループ事務局］

Bunker, Alonzo, and Henry Clay Mabie. 1902. *Soo Thah：a tale of the making of the Karen nation*. New York：Fleming H. Revell Company.

————. 1910. *Sketches from the Karen hills*. New York：Fleming H. Revell.

Cady, John F. 1958. *A History of Modern Burma*. Ithaca and London：Cornell University Press.

————. 1983. *Contacts with Burma, 1935-1949：A Personal Account*.（Papers in International Studies, Southeast Asia Series：No.61.）Athens：Ohio University.

Carpenter, C. H. 1883. *Self-support, illustrated in the history of the Bassein Karen mission from 1840 to 1880*. Boston：Rand, Avery, and Co.

Childers, R.C. 1909. *A Dictionary of the Pali Language*. London：Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.

Cocks, S. W. 1919. *A Short History of Burma*. London：Macmillan.

Conant, H. C., and Joseph Angus. 1861. *The earnest man：a memoir of Adoniram Judson, D.D., first missionary to Burmah*. Bunyan libr, v. 3. London：J. Heaton & Son.

Cooke, Joseph R., Edwin J. Hudspith, and James Morris. 1976. “Phlong（Pwo Karen of Amphur Hod District, Chiang Mai）.” in *Phonemes and Orthography：Language Planning in Ten Minority Languages of Thailand*, ed. by William Smalley, 187-220. Canberra：Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.

Cross, E. B. 1854. On the Karens. Journal of the American Oriental Society. Vol.IV., 291-316.

The Director of Survey（India）. 1944. *Gazetteer of Burma*. Oct. 1944.

Duffin, C. H. 1913. *A manual of the Pwo-Karen dialect*. Rangoon：American Baptist mission press.

Dutt, Romesh Chunder. 1893. *A brief history of ancient and modern India*. Calcutta：S.K.

Lahiri & Co.

————. 1895. *A brief history of ancient and modern India, for the use of schools.* Calcutta：S.K. Lahiri & co.

————. 1909. *A brief history of ancient and modern India, according to the syllabus prescribed by the Calcutta University.* Calcutta：Lahiri.

————. 1917. *The economic history of India under British rule, from the rise of the British power in 1757 to the accession of Queen Victoria in 1837.* Trübner's oriental series. London：K. Paul, Trench, Trübner & Co.

Enriquez, C. M. 1924. *Races of Burma.* Handbooks for the Indian Army. Calcutta：Government of India Central Publication Branch.

Furnivall, John Sydenham. 1956（1948）. *Colonial policy and practice；a comparative study of Burma and Netherlands India.* New York：New York University Press.

————. 1960. *The Governance of Modern Burma.* New York：International Secretariat, Institute of Pacific Relations.

Gilmore, David Chandler. 1898. *A grammar of the Sgaw Karen.* Rangoon：American Baptist mission press.

————. 1918. “Phonetic Changes in the Karen Language.” *Journal of the Burma Research Society*, 8：113-119.

Government of Burma. 1908. *Imperial gazetteer of India. Provincial series. Burma.* Calcutta：Supt. of Govt. Print.（by Lowis, C. C., R. Casson, and George Eustace Rion Grant Brown.）

————. 1912. *Census of India, 1911 Volume IX Burma.* Rangoon：Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.

————. 1913a. *Burma Gazetteer. Amherst District. Vol. A.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1914a. *Burma Gazetteer. Insein District. Vol. A.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1914b. *Burma Gazetteer. Toungoo District. Vol. A.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1914c. *Burma Gazetteer. Syriam District. Vol. A.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1915. *Burma Gazetteer. Ruby Mines District. Vol. A.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1916. *Burma gazetteer. Bassein District.* Rangoon：Office of the Supt. of Docs.（by Hewett, H. P., and J. Clague.）

————. 1917a. *Linguistic Survey of Burma：Preparatory Stage or Linguistic Census.* by C. B. Webb, Rangoon：Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1917b. *Burma Gazetteer. Pegu District. Vol. A.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1917c. *Linguistic Survey of Burma：Preparatory Stage or Linguistic Census.* Office of the Superintendent, Government of Burma. Rangoon：Government Printing.

————. 1923. *Census of India, 1921 Volume X Burma.* Rangoon：Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.

————. 1924. *Burma Gazetteer. Myaungmya District. Vol. B.* Office of the Supdt., Govt Printing, Burma.

————. 1927. *The Report of the Administration Report of Burma For the Year 1925-1926.* Rangoon：Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma.

————. 1932. *The Report of the Administration Report of Burma For the Year 1925-1926.* Rangoon：Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma.

————. 1933. *Census of India, 1931 Volume XI Burma.* Rangoon：Office of the Supdt., Government Printing and Stationery, Burma.（“1931 Census”と略記）

————. 1987（1880）. *Gazetteer of Burma. vol. I & II.* Delhi：Gian Pub. House.（by Spearman, H. R./ *British Burma gazetteer*. 1880.）

Gowen, Herbert H., and Upton Close. 1926. *An outline history of China, with a thorough account of the republican era interpreted in its historical perspective.* New York：D. Appleton and Co.

Grant, R. Brown. 1911. "The Linguistic Survey of India" *Burma Research Society's Journal.* Vol.i, Part i：17-23

Grierson, George Abraham. 1903-1927. *Linguistic survey of India*. Calcutta：Office of the Superintendent of Government Printing, India.

Gutzlaff, Charles. 1834. *A Sketch of Chinese History, Ancient and Modern：comprising a retrospect of the foreign intercourse and trade with China：illstrated by a new corrected map of the Empire.* London：Smith, Elder and Co.

Hackett, William Dunn. 1953. *The Pa-o people of the Shan State, Union of Burma：a sociological and ethnographic study of the Pa-o（Taungthu）people*. Ph.D. Thesis, Cornell Univ., Sept., 1953.

Hall, D.G.E. 1981. *A History of South-East Asia. Fourth Edition.* London：Macmillan Press.

Hall, Gordon Langley. 1961. *Golden boats from Burma*. Philadelphia：Macrae Smith Company.

Hamilton, James William. 1963. "Effects of the Thai Market on Karen Life." *Practical Anthropology,* 10：5：209-215.

————. 1965. *Ban Hong：social structure and economy of a Pwo Karen village in Northern Thailand*. Thesis–University of Michigan.

————. 1976. *Pwo Karen：at the edge of mountain and plain*. St. Paul：West Pub. Co.

Harris, Edward Norman. 1920. *A star in the East；an account of American Baptist missions to the Karens of Burma.* New York：Fleming H. Revell Co.

Harris, Mrs. Julia. E.（Chapman）. 1894. *History of the Shwegyin Karen mission*. Oakland, CA：Carruth & Carruth.

Harvey, G.E. 1925. *History of Burma：from the earliest times to 10 March, 1824, the beginning of the English conquest.* London：Longmans.

————. 1956. *British Rule in Burma 1824-1942.* London：Faber and Faber.

Haudricourt, André-G. 1946. "Restitution du karen commun." *Bulletin de la Société de L inguistique de Paris,* 42：103-11.

————. 1953. "A propos de la restitution du Karen commun. " *Bulletin de la Société de L inguistique de Paris,* 49：129-32.

Hayami, Yoko. 1996. "Karen Tradition According to Christ or Buddha：The Implications of Multiple Reinterpretations for a Minority Ethnic Group in Thailand" *Journal of Southeast Asian Studies.* 27,2（Sept. 1996）：334-349.

————. 2004. *Between hills and plains power and practice in socio-religious dynamics among Karen / Hayami Yoko.* Kyoto area studies on Asia, v. 7. Kyoto, Japan：Kyoto University Press.

Henderson, Eugénie J. A. 1961. "Tone and Intonation in Western Bwe Karen." *Burma Research Society Fiftieth Anniversary Publication, No.1.* Rangoon.

————. 1979. "Bwe as a two-tone language ? " *Pacific Linguistics.* Series C, No.45.

Henderson, Eugénie J. A., and Anna Allott. 1997. *Bwe Karen dictionary：with texts and*

English-Karen word list. London：School of Oriental and African Studies, University of London.

Hervey, George Winfred. 1884. *The story of Baptist missions in foreign lands：from the time of Carey to the present date.* St. Louis：Chancy R. Barnes.

Hinton, Peter. 1969. *The Pwo Karen of Northern Thailand – A Preliminary Report.* Chiang Mai：Tribal Research Centre.

————. 1978. "Declining Production among Sedentary Swidden Cultivators：The Case of Pwo Karen." in *Farmers in the Forest：Economic Development and Marginal Agriculture in Northern Thailand,* ed. by Peter Kunstadter, E. C. Chapman, and Sanga Sabhsri. Honolulu：University Press of Hawaii. 185-198.

Hughes, Lizabeth B. 1926. *The evangel in Burma, being a review for the quarter century 1900-1925 of the work of the American Baptist foreign mission society in Burma*. Rangoon：American Baptist Mission Press.

Howard, Randolph Levi. 1931. *Baptists in Burma*. Philadelphia, Boston：Judson Press.

————. 1942. *It began in Burma*. Philadelphia：Judson Press.

Iijima, Shigeru. 1965. "Cultural Change among the Hill Karens in Northern Thaliland." *Asian Survey,* 5：417-423.

Ito, Toshikastu. 2007. "Karens and the Konbaung Polity in Myanmar" *ACTA ASIATICA：Bulletin of the Institute of Eastern Culture.* Vol.92.（Studies in Southeast Asian History.）

Jones, Robert B. 1961. *Karen linguistic studies：description, comparison, and texts*. Berkeley：University of California Press.

Judson, Adoniram, and J. Wade. 1826. *A dictionary of the Burman language, with explanations in English Compiled from the manuscripts of A. Judson, D.D. and of other missionaries in Burmah.* Calcutta：Printed at the Baptist Mission Press, Circular Road.

Judson, Adoniram. 1849. *Dictionary, English and Burmese*. American Baptist Mission Press.

————. 1852. *A dictionary, Burmese and English*. Maulmain：American Mission Press.

Judson, Ann Hasseltine. 1827. *An account of the American Baptist mission to the Burman Empire：in a series of letters addressed to a gentleman in London*. London：J. Butterworth.

Judson, Edward. 1883. *Adoniram Judson：his life and labours*. London：Hodder　&

Stoughton.

Judson, Emily C. 1848. *Memoir of Sarah B. Judson, member of the American mission to Burmah*. New-York：L. Colby and Company.

Kan Gyi, Saya. 1915. *Introduction to the study of Sgaw Karen*. Rangoon：American Baptist Mission Press.

Kato, Atsuhiko. 2003. "Pwo Karen" in Graham Thurgood and Randy LaPolla eds. *The Sino-Tibetan Languages.* pp.632-648. London and New York：Routledge.

Kendrick, A. C. 1860. *The life and letters of Mrs. Emily C. Judson*. New York：Sheldon.

Keyes, Charles F. ed. 1979a. *Ethnic Adaption and Identity：the Karen on the Thai Frontier with Burma.* Philadelphia：Institute for the Study of Human Issues.

Keyes, Charles F. 1979b. "Introduction." in Keyes, Charles F. ed. *Ethnic Adaption and Identity：the Karen on the Thai Frontier with Burma.* Philadelphia：Institute for the Study of Human Issues.

————. 1979c. "The Karen in Thai History and the History of the Karen in Thailand." in Keyes, Charles F. ed. *Ethnic Adaption and Identity：the Karen on the Thai Frontier with Burma.* Philadelphia：Institute for the Study of Human Issues.

King, Alonzo. 1848（1836）. *Memoir of George Dana Boardman, late missionary to Burmah：containing much intelligence relative to the Burman mission*. Boston：Gould, Kendall & Lincoln.

Klein, Harold. n.d. *The Karens of Burma：Their Search for Freedom and Justice.* （unpublished.）n.p.

Knowles, James D. 1829. *Memoir of Mrs. Ann H. Judson, late missionary to Burmah：including a history of the American Baptist mission in the Burman empire*. Boston：Lincoln & Edmands.

Koenig, William J. 1990. *The Burmese Polity, 1752-1819：Politics, Administration, and Social Organization in the Early Kong-baung Period.*（Michigan Papers on South and Southeast Asia, No.34.）Center for South and Southeast Asian Studies, The Michigan University.

Kunstadter, Peter. 1967. "The Lua' and Sgaw Karen of Maehongson Province, Northwest Thailand." in *Southeast Asian tribes, minorities, and nations*. ed. by Peter Kunstader, vol 2. 639-674. Princeton, N.J.：Princeton University Press.

————. 1969. "Socio-cultural Change among Upland Peoples of Thailand：Lua' and Karen—two Modes of Adaption." in *Proceedings of the VIIth International*

Congress of Anthropological and Ethnological Sciences, 1968, Tokyo and Kyoto, Vol.II, Ethnology. Tokyo：Science Council of Japan.

Leach, Edmund. 1954. *Political systems of highland Burma：a study of Kachin social structure*. Cambridge：Harvard Universtiy Press.

Lehman, F.K. 1967. "Kayah Society as a Function of the Shan-Burman-Karen Context." in *Contemporary Change in Traditional Societies,* ed. by Julian H. Steward. Urbana：University of Illionois. 1-104.

————. 1979. "Who Are the Karen, and If So, Why ? Karen Ethnohistory and a Formal Theory of Ethnicity." in *Ethnic Adaption and Identity：the Karen on the Thai Frontier with Burma*. ed. Charles F. Keyes. 215-253. Philadelphia：Institute for the Study of Human Issues.

Lewis, James Lee. 1924. *The Burmanization of the Karen People：A Study in Racial Adaptability.* M.A. Thesis, University of Chicago.

————. 1946. Self-Supporting Karen Churches in Burma：a Historical Study of the Development of Karen Stewardship. Th.D. Thesis, Central Baptist Theological Seminary.

Lowis, Cecil Champain. 1919. *The tribes of Burma.* Rangoon：Office of the Supt., Govt. Printing, Burma.

Luce, Gordon H. 1959（1931）. "Introduction to the Comparative Study of Karen Languages." *Journal of the Burma Research Society.* Vol.xlii（June 1959）：1-18.

————. 1968. "Burma Languages." *Journal of the Burma Research Society.* Vol.li（Jun. 1968）：29-34

Madison University. 1872. *The First Half Century of Madison University*（*1819-1869*）. New York：Sheldon & Co.

Marlowe, David H. 1969. " Upland-Lowland Relationships：The Case of the S'kaw Karen of Central Upland Western Ciang Mai." in *Tribesmen and Peasants in North Thailand,* ed. by Peter Hinton. Chiang Mai：Tribal Research Centre. 53-68.

————. 1970. "The S'kaw Karen of Chiang Mai." Paper presented at the Annual Meeting of the Association for Asian Studies, San Francisco, April.

Marshall, Harry Ignatius. 1922. *The Karen People of Burma：A Study in Anthropology and Ethnology.*（The Ohio State university Bulletin, Vol.16, No.13.）Ohio：the Ohio State University.

Masefield, John. 1926. *The Travels of Marco Polo the Venetian.* London：J. M. Dent,

New York：Dutton

Mason, Ellen Huntly Bullard. 1862. *Civilizing mountain men, or, Sketches of mission work among the Karens*. London：J. Nisbet.

————. 1874. *Last days of the Rev. Francis Mason, D.D*. London：Heaton & Son, Whittam Press

Mason, Francis. 1834. "Traditions of the Karens." *The Baptist Missionary Magazine*. Volume XIV. 328-393. Boston：Press of John Putnam.

————. 1843. *The Karen Apostle；Memoir of Ko Thah-Byu, the First Karen Convert, with Notices concerning His Nation*. Boston：Gould, Kendall and Lincoln.（初版はコー・タービュー逝去の1840年からこの1843年版の間に London：The Religious Tract Societyから出版されたと考えられるが, 正確な出版年は不明。）

————. 1846. *Synopsis of a Grammer of the Karen Language, embracing both Dialects, Sgau, and Pgho or Sho*. Tavoy：Karen Mission Press.

————. 1852. *The Natural Productions of Burmah, or Notes on the Fauna, Flora, and Minerals of the Tenasserim Provinces, and the Burman Empire*. Maulmain：American Mission Press.

————. 1858. "Notes on the Karen Language." *Journal of the Asiatic Society of Bengal*. No.II. 129-168.

————. 1860. *Burmah, its People and Natural Productions：or, Notes on the Nations, Fauna, Flora, and Minerals of Tenasserim, Pegu, and Burmah, with Systematic Catalogues of the Known Mammals, Birds, Fish, Reptiles, Insects, Mollusks, Crustaceans, Annalids, Radiates, Plants and Minerals, with Vernacular Names*. Rangoon：Thos. Stowe Ranny.

————. 1868. "On Dwellings, Works of Art, etc., of the Karens." *Journal of the Asiatic Society of Bengal*. Vol. XXXIV.

————. 1870. *The Story of a Working Man's Life：With Sketches of Travel in Europe, Asia, Africa, and America, as related by himself*. New York：Oakley, Mason & Co.

————. 1883. *Burma, its People and Productions：or, Notes on the Fauna, Flora and Minerals of Tenasserim, Pegu and Burma*.（rewritten and enlarged by W. Theobald.）

Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman：system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. University of California publications in linguistics, v.

135. Berkeley：University of California Press.

O'Riley, Edward. 1858. "Journal of a Tour to Karen-Nee for the purpose of opening a trading road to the Shan Traders from Mobyay and the adjacent Shan Territory direct to Toungoo." *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia. New Series* Vol.II. 391-457.

Patton, Alfred Spencer. 1858. *The hero missionary：or, a history of the labours of the Rev. Eugenio Kincaid*. New-York：H. Dayton.

Pearn, Bertie Reginald. 1939. *A history of Rangoon.* Rangoon：American Baptist Mission Press.

————. 1962. *Judson of Burma*. London：Edinburgh House Press.

Pe Maung Tin. 1923. *The Glass Palace chronicle of the kings of Burma.*（translated by Pe Maung Tin and G.H. Luce.）London：Oxford University Press.

Phayre, Arthur P. 1883. *History of Burma：including Burma proper, Pegu, Taungu, Tenasserim, and Arakan, from the earliest time to the end of the first war with British India*. London：Trubuner,

Purser, W. C. B., and Hsaya Tun Aung. 1922. *Comparative dictionary of the Pwo-Karen dialect*. Rangoon：American Baptist Mission Press.

Quigly, E. Pauline. 1958. "Some Early Reference to the First Burmese-English Dictionary of 1826." *The Journal of Burma Research Society*. Vol.XL, Part 2（a）

Renard, Ronald D. 1980. *Kariang：history of Karen-T'ai relations from the beginnings to 1923*. Thesis（Ph. D.）–University of Hawaii.

Rhodes, D. E. 1955. "The First Karen Dictionary." in *British Museum Quarterly*, 20（1955/1956）：58-59.

San C. Po. 1928. *Burma and the Karens.* London：Elliot Stock.

Sangermano, Vincenzo. 1994. *The Burmese Empire a Hundred years Ago.* Bangkok：White Orchid Press.（Third Edition published at Westminster in 1893）

Scott, James George, and J. P. Hardiman. 1900. *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States.* Rangoon：Printed by the superintendent, Government printing, Burma.

Shafer, Robert. 1966-1974. *Introduction to Sino-Tibetan, 5 parts*. Wiesbaden：Harrassowitz.

Shavit, David. 1990. *The United States in Asia：A Historical Dictionary.* New York：Greenwood Press.

Shintani, Tdahiko L.A. 2003. "Classification of Brakaloungic（Karenic）languages in

relation to their tonal evolution." in Shigeki Kaji ed. *Proccedings of the Symposium Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena：historical development, phonetics of tone, and descriptive studies.* 37-54. Tokyo：Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Shwe Wa, Maung. 1963. *Burma Baptist chronicle.* Rangoon：Board of Publications, Burma Baptist Convention.

Silverstein, Josef. 1980. *Burmese politics：the dilemma of national unity*. New Brunswick, N.J.：Rutgers University Press.

Smeaton, Donald Mackenzie. 1887. *The Loyal Karens of Burma.* London：Kegan Paul, Trench & Co.

Smith, Daniel A. W. 1922. *Forty Years Presidency of the Karen Theological Seminary, Insein.* Rangoon：American Baptist Missionary Press.

Smith, Martin. 1991. *Burma：Insurgency and the Politics of Ethnicity.* London & New Jersey：Zed Books Ltd.

————. 1999. *Burma：Insurgency and the Politics of Ethnicity.* London：Zed Books Ltd., Bangkok；White Lotus. Second（updated）edition.

Snodgrass, Major. 1994. *The Burmese War 1824-1826.* Bangkok：Ava Publishing House.（First published in 1827 by John Murray）

Soothill, William Edward. 1929. *A history of China.* Benn's sixpenny library, no. 15. London：E. Benn.

Stern, Theodore. 1965. "Research upon Karen in Village and Town, Upper Khwae Noi, Western Thailand. Selected Findings." Report to the National Research Council of Thailand. Bangkok：mimeo.

————. 1968. "Ariya and the Golden Book：A Millenarian Buddhist Sect Among the Karen." *The Journal of Asian Studies.* Vol. xxvii, No.2（Feb, 1968）：297-328.

Stevenson, H. N. C. 1944. *The hill peoples of Burma*.［London, etc.］：Longmans, Green & Co.

Symes, Michael. 1800. *An account of an embassy to the Kingdom of Ava sent by the Governor-general of India, in the year 1795. By Michael Symes*. London：printed by W. Bulmer and Co.；and sold by Messrs. G. and W. Nicol；and J. Wright.

Taylor, Robert H. 1987. *The State in Burma.* London：C. Hurst & Company.

Taw Sein Ko. 1889. *Selections from the records of the Hlutdaw.* Rangoon：Supt., Govt. Printing, Burma.

————. 1913. *Original inscriptions collected by King Bodawpaya in Upper Burma and now placed near the Patodawgyi Pagoda, Amarapura.* Rangoon：Office of the Superintendent, Government Printing, Burma.

————. 1913. *Burmese sketches.* Rangoon：British Burma Press.

————. 1917. *Archaeological notes on Mandalay.* Rangoon：Superintendent, Govt. Print.

————. 1926（1917）. *Archaeological notes on Pagan.* Rangoon：Superintendent, Government Printing, Burma.

————. 1972. *Lithic and other inscriptions of Burma.* Rangoon：Supt. of Govt. Print.

Thant Myint-U. 2001. *The making of modern Burma.* New York：Cambridge University Press.

Tinker, Hugh. 1959. *The Union of Burma：A Study of the First Years of Independence.* London：Oxford University Press.

Trager, Frank N. 1966. *Burma：From Kingdom to Republic.* New York：Frederick A. Praeger .

Truxton, Addison Strong. 1958. *The integration of the Karen Peoples of Burma and Thailand into their respective national cultures：a study in the dynamics of culture contact.* Thesis（M.A.）–Cornell University, September, 1958.

Wade, Jonathan. 1849. *A Vocabulary of the Sgau Karen Language* Tavoy：Karen Mission Press.

————. 1861. *Karen vernacular grammar. With English interspersed for the benefit of foreign students.* Maulmain：American Baptist Mission Press.

————. 1888（1861）. *Karen Vernacular Grammer, with English Interspersed for the Benefit of Foreign Students, in Four Parts, embracing Termonology* [*sic.*], *Etymology, Syntax, and Style.* Rangoon：American Baptist Mission Press.

————. 1896. *A dictionary of the Sgau Karen language.* Rangoon：American Baptist Mission Press.

Wade, Jonathan. and Juliette Pattison Binney. 1883. *The Anglo-Karen dictionary.* Rangoon：American Baptist Mission Press.

Wayland, Francis. 1854. *A memoir of the life and labors of the Rev. Adoniram Judson. D.D.* Boston：Philips, Sampson, and Co. [etc.].

Willson, Arabella M. 1853. *The lives of Mrs. Ann H. Judson and Mrs. Sarah B. Judson：with a biographical sketch of Mrs. Emily C. Judson, missionaries to Burmah：in*

three parts. Auburn［N.Y.］：Derby & Miller.

Wilson, Constance M. 1978. *Burmese-Karen Warfare, 1840-1850：A Thai View*. Northern Illinois University.

Wilson, Horace Hayman. 1819. *Sanskrit-English Dictionary*. Calcutta：Printed by P. Pereira at the Hindoostanee Press,

Womack, William Burgess. 2005. *Literate networks and the Production of Sgaw and Pwo Karen Writing in Burma, c.1830-1930*.（Ph.D. Dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London.）

Wyeth, Walter N. 1891. *The Wades：Jonathan Wade, Deborah B.L. Wade；a memorial*. Philadelphia：W.N. Wyeth.

Yule, Henry. 1903. *The book of Ser Marco Polo：the Venetian concerning the kingdoms and marvels of the East / translated and edited, with notes, by Colonel Sir Henry Yule. – 3rd ed., rev. throughout in the light of recent discoveries by Henri Cordier*（*of Paris*）*/ with a memoir of Henry Yule by his daughter Amy Frances Yule*. London：John Murray.

Zan, U, and E. E. Sowards. 1963. “Baptist Work for Among Karens.” in *Book II, Burma Baptist chronicle*. edited by Genevienve Sowords and Erville Sowords. pp. 304-326. Rangoon：Board of Publications, Burma Baptist Convention.

５．邦語文献

飯島茂 1967.「カレン族問題とビルマの苦悩」『国際政治』No.36（「開発途上国の政治・社会構造」）

————. 1974.「国民形成と少数民族問題 ― ビルマにおけるカレン族の悲劇」『アジア・アフリカ言語文化研究』８：117-135.

池田一人 2000.「ビルマ独立期におけるカレン民族運動 ―a separate state をめぐる政治―」『アジア・アフリカ言語文化研究』60：37-111.

————. 2005.「日本占領期ビルマにおけるミャウンミャ事件とカレン―シュウェトゥンチャをめぐる民族的経験について」『東南アジア―歴史と文化』No.34：40-79. 山川出版社

————. 2008.『ビルマにおけるカレンの民族意識と民族運動の形成』東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士学位申請論文（2008年７月）

————. 2009.「ビルマ植民地末期における仏教徒カレンの歴史叙述―『カイン王統史』と『クゥイン御年代記』の主張と論理―」『東洋文化研究所紀要』第156

冊
————. 2012.『日本占領期ビルマにおけるカレン＝タキン関係―ミャウンミャ事件と抗日蜂起をめぐって―』（上智大学アジア文化研究所「モノグラフ・シリーズ」No. 11）2012年12月発行予定
石井米雄 2003a（1975）.『上座部仏教の政治社会学』（東南アジア研究叢書９）創文社
伊東利勝 1994.「ビルマ農民の意識変化」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』285-306. 山川出版社
————. 2003.「1888年ビルマ南部における反政庁ディスクール」成城大学『経済研究』第159号：21-51.
————. 2006a.「『カレン』の発見―西洋人によるコンバウン朝ミャンマーのカレン像―（１）」『文學論叢』（愛知大學文學會）第133輯
————. 2006b.「『カレン』の発見―西洋人によるコンバウン朝ミャンマーのカレン像―（２）」『文學論叢』（愛知大學文學會）第134輯
————. 2011.「ビルマ古典歌謡カレン・オーダンの眼差し」『愛大史学－日本史・アジア史・地理学』（愛知大学文学部人文社会学科）第20号
————. 2012.「1856～58年『カレンの反乱』のカレンについて」『愛大史学―日本史めアジア史・地理学』（愛知大学文学部人文社会学科）第21号
宇田有三 2010.『閉ざされた国ビルマ：カレン民族闘争と民主化闘争の現場をあるく』高文研
奥平龍二 1994.「上座仏教国家」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』90-108. 山川出版社
加藤昌彦 1995.「ポー・カレン語諸方言の音韻体系 ― 西部方言１種と東部方言２種」『国立民族学博物館研究報告』20（３）：537-598.
————. 1998a.「カレン系言語の文字」新谷忠彦編『黄金の四角地帯』82-85. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
————. 1998b.「ポー・カレン語（東部方言）の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113：31-61.
————. 2001a.「キリスト教ポー・カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』333-337. 三省堂 .
————. 2001b.「仏教ポー・カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』847-851. 三省堂 .
————. 2001c.「ポー・カレン語の関係節」『東京大学言語学論集』20：275-300.
————. 2002.「ビルマにおける東部および西部ポー・カレン語の対照基礎語彙」『東

京外大東南アジア学』 7 ：212-249.
————. 2003.「カレン系言語の状況」崎山理（編）『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』国立民族学博物館調査報告39：115-125.
————. 2004a.『ポーカレン語文法』（東京大学人文社会学系研究科提出博士論文）2004年 7 月
————. 2004b.「ポー・カレン語パアン方言の文法情報付きテキスト」塚田誠之（編）『中国・東南アジア大陸部の国境部における諸民族文化の動態に関する人類学的調査研究』（科研）269-291.
片岡樹　1998.「東南アジアにおける「失われた本」伝説とキリスト教への集団改宗―上ビルマのラフ布教の事例を中心に―」『アジア・アフリカ言語文化研究』56：141-165.
桐生稔 1969.「ビルマ」衛藤藩吉『アジア現代史』　毎日新聞社
西田龍雄 1964.「R.B. ジョーンズ Jr. 著　カレン語研究：記述・比較・テキスト」『東洋學報』46.4：1-13.
速水洋子 2002.「黄金の本とカレンの文字：ビルマにおけるキリスト教宣教」杉本良男編『福音と文明化：20世紀における諸民族文化の伝統と変容』pp.260-277. 東京：ドメス出版
————. 2004.「タイ・ビルマ国境域の＜カレン＞から見る民族と宗教の動態」加藤剛編著『変容する東南アジア社会』201-243. めこん
藪　司郎 1988.「カレン語群」亀井孝他編著『言語学大辞典 第 1 巻 世界言語編 上あ―こ』1312-1318. 三省堂 .
————. 2001a.「カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』253-254. 三省堂 .
————. 2001b.「スゴー・カレン文字」河野六郎他編著『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』526-531. 三省堂 .
リーチ，エドモンド R.（関本照夫訳）1995.『高地ビルマの政治体系』弘文堂

6．聞き取り

Saw iS　ソオ・アウンフラの近親者，70歳代，（2004年 1 月）

An Outline of Knowledge Formation on the Karen People of Burma and Saw Aung Hla's "A History of the Pgakanyaw" (1939)

Kazuto IKEDA

This paper aims to outline the development of knowledge on the Karen people of Burma, and to locate the first publication of the Christian version of Karen history in this knowledge formation process.

In "A History of the Pgakanyaw," Saw Aung Hla narrates a history of struggle against persistent attempts by Buddhist Burmans and Mons to swallow the Pgakanyaw, who, with their unique language, script, culture, and kingship, had managed for many centuries to hold to a monotheistic faith, which was to be later fulfilled as Christianity. The question, then, is; what is the origin of the historiography of this first Christian version of Karen history?

A substantial part of the Karen knowledge widely shared to date was mostly formed by the American Baptist missionaries during the second quarter of the nineteenth century in Tenasserim Division of colonial Burma. Two early Baptist missionaries played prominent roles with the help of nameless Karen assistants. Jonathan Wade was the creator of both Sgaw and Pwo orthographies, and the compiler of the dictionaries and grammar books. Through his works, Karen ethnicity emerged and was linguistically defined. Francis Mason published the first systematic and general description of the Karen people as a part of the natural history of Tenasserim Division. Mason's core idea that the Karen were a lost tribe of Israelites and therefore originated as a biblical nation remained unquestioned until doubtful anthropologists gained the initiative in interpreting the ethnic origin of the Karen.

Knowledge on the Karen was in the first place produced, collected and shaped in an organized manner by the hands of the Baptists. It was then

distributed through printing and publication, and shared with the world. Throughout the nineteenth century, the Baptist mission created an amount of information and knowledge on the Karen as never been seen before in Burma. These had in time attained the quality of valuable "first-hand records" and "classics" indispensable for knowing who the Karen were. British colonialists who came into contact with the Karen a few decades later also followed the understanding carved out by the early Baptists.

On the other hand, the two other concerned parties, who, to modern eyes, were supposed to have held a close relationship with Karen knowledge, remained silent up to the twentieth century in terms of written sources. They were the Karen themselves on one side, and the ethnic Burman, a neighbor to the Karen, on the other. The records of the former would be discovered if a serious research were to be conducted on the early Sgaw and Pwo periodicals kept in the Baptist missionary archive in America. The lack of sources on the latter would tend to indicate theoretical skepticism about whether the ethnic category, consciousness or identity of "Burman" and "Myanmar" had truly already been established among the Burman speaking population in nineteenth century Burma.

Around the turn of the twentieth century, the British colonial administrators began to survey the Karen as a subject to be ruled and integrated, and added a vast amount of demographic and linguistic data to the Baptist-originated perceptions on the Karen. The twentieth century saw another institutionalization of Karen knowledge when anthropology began to deal with the Karen and built up an academically verified and systematized knowledge of the Karen.

At the beginning of the twentieth century, Burma was rapidly transformed into an ethnically organized and articulated society. Burman nationalism was, of course, the most acute expression of this ethnicization. Along with the elevated nationalistic atmosphere, the Karen were often accused of siding with the colonialists, and their image deteriorated and became fixed in the mind of the Burman majority. On the side of the so-called Karen people, Baptists, who had already grown influential in colonial Burma, started to propagate their ethnic claims especially in the political sphere, and at the same time their public

utterances began to be recorded, particularly in the English language.

The 1940s was a major transitional period in Burmese history, and the Karen were now becoming more and more a significant political issue in Burma. After Burma accomplished independence, a substantial change occurred in conditions on the mode of Karen knowledge production. American Baptists and British colonialists, two major and privileged composers of Karen knowledge, left Burma and the Karen for good. A fair amount of witness reports that continuously radiated the impression of the Karen as being "Christian," "pro-British," and "anti-Burman" were left behind, and these turned into valuable and firm historical records which were never to be updated again.

Saw Aung Hla's version of Karen history is, in this perspective, a legitimate and fundamentalistic successor to the Karen knowledge which had been fostered in Baptist mission history in Burma. It was also one of the most carefully structured ethnic claims made in the late colonial Burma.